

せければ多久の城に歸り入る事かなはずして筑後國に出奔し坂東寺と云ところに浪々して居けるが弟の中務大輔賢光と共に隆信をねらふ由聞へければ押懸て討果んはやすけれど一先たばかりで見んとて鎮光に人を遣してこのごろの罪を赦し妻子をも元の如くに與へんとさまざまに偽りさて又鎮光が女房の手によく似たる手跡をえらみて隆信の怨りをば我より申なをしたり早々佐嘉に越さるべし若し遲滯もあるならば却て疑ひあるべしとさも有ていに書したゝめ爲持遣しければ鎮光兄弟是をまことと心得てうかうかと佐嘉へ來りける鎮光をば納富但馬守信景が館に入れ水町左京に申つけ夜に入りて混甲數十人鎮光が旅館をとりかこむ鎮光怒驚きて千悔すれども甲斐ぞなき實にや六塵の囂にまよひ六根の罪をつくる事も見る事聞く事に迷ふ心なるべしと江口の一曲を謠ふて長刀をとつて立むかう討手の者どもは塙を越へてのり入り互に稠しく切むすび鎮光が所従一族十餘人ことごとく討死す此時鎮光は信景が三男納富石見をさきころし水町左京に切てかゝる左京は鎗を以て鎮光が長刀としばしさへて戦ふ處を左京が子水町彌太右衛門走り寄て鎮光を討とめ又鎮光が臣山崎主殿と云者にわたり合創を蒙りけるとかや扱て賢光は鍋島豊前守信房が宅に入れ同加賀守直茂と兄弟にて易々と是を討つころは元龜二年四月九日の事なるに小田氏の嫡流是の時に至て斷絶す

戸次丹後守鑑連筑前國守護職事

元龜二年辛未戸次丹後守鑑連を筑前の國の守護職とし國中の軍令をとりをこない中國の押へたるべしと宗麟直ちに云ひつけらる此れに依て鑑連五十七歳にて豊州の藤北より筑前の立花へ引越しけり是ひとへに鑑連數年の功と云筑肥は動もすれば逆徒蜂起の處なれば是を靜ん爲と云ひことには毛利の大敵を防んとての故なるべし立花に移りてより城の名を家の名字とぞ呼びにける鑑連後法體して道雪と號せりさて亦立花の城には國中の諸士寺社の面々其外博多の町人までもこのらず參候し祝儀をのべける次第目を驚すばかりなり最にも鑑連武勇無比類威勢哉と諸人も申あへり當年辛未より天正甲申迄十四年の間立花に在城せり此間にも薩隅日豊筑肥の逆徒蜂起しければ一日片時も安堵の思に住せずあるひは四方に敵をうけ籠鳥の思をなすときも有り或は近國の諸士籠城なんぎに及ぶと聞ては糧米を運ばせ後詰の爲に出張する事も月々に及べり

高橋家別立事

戸次丹後守鑑連筑前國守護職事 高橋家別立事

高橋鑑種は小倉の城にうつり法體して宗專とぞ云ける寶滿より付添ける家臣北原伊賀鎮久伊藤中務兩人長臣として諸事を執行ひける就中伊藤は寵甚しく權專なり威多即必厥と云言の未何か相違すべき中務何とかしたりけん鑑種が機嫌に背き終に切腹す斯る折節に北原鎮久も鑑種に窺はずして自分與力の者共へ加恩を與へたる事あり鑑種激怒以の外にて我儘の仕方憚り多き事なれば皆々取返すべしとぞ申ける鎮久思けるは中務が如く我身の上にも災害可來事疑なし然ば他出にしくはなしと思ひ與力の侍を相催し中々忍で出る物ならば討手を被差向犬死せん事必定なり白晝に押彰し出る者ならば縦ひ討手を差出したりとも打破て通んになど通らざらんと思究め雜兵三百斗りにて白晝に打立ける鑑種聞て所詮身を誤る奴原に事を仕出て何かせん唯知らぬ顔にて置たるが増ならんと遠慮を廻し一人も不出仍て鎮久事故なく筑後の國に引越し古郷なれば暫く牢居して天の時を待居けるが如何思立けん豊府に行き縁を求めて種々に大友屋形へ申入けるは高橋入道宗專事今亦藝州へ組し二度逆心の様に候然れば豊州家の高橋を取立て度存候あはれ御面を蒙り候はゞ鑑種豊前へ引越候時供を仕損じ或は捨て置れたるもの多く御座候取分伊藤屋山花田福富村山今泉など云高橋累代の家臣共方々牢居候間御貴族の内可然大將を一人下し給らば主君と仰ぎ奉り高橋家を再興仕度旨頻りに申達しける宗麟

も内々此儀心にかゝる處に幸哉と思ひ吉弘左近大夫鑑理が弟主膳兵衛鎮理を可遣にぞ議定せられける抑此主膳兵衛鎮理は未だ壯年に足ぬ比より度量寛大にして智勇共に相兼たる者なりとて一族の人々も此人如何様當世の英雄たるべしと沙汰しけり其名近國にも隠れなかりければ鎮久も大に悦で元龜元年庚午の歲御笠郡を給り古の居城なればとて寶滿岩屋兩城を堅め高橋家を再興せり是よりしてこそ兩高橋とはなりにける主膳兵衛鎮理實名を鎮種と改む行年二十三歳なり三十の内にして法體し紹運とぞ申ける武勇の譽長じて其名遠國迄も隠れなかりしこと共なり

土佐一條豊州下向事

土佐の國は前々より京都一條殿の御領なり然るに大永の比國中の士共爭奪止む時なく諸民迷惑ふて暴虐甚しかりしかば守護人各相談有て一條殿へ申達し在國の主君を望みしかば大永の末の頃關白教房公の子息房家を下し給ひしなり即幡多の郡に屋形を建て國人等拜謁す此卿禮讓を專とし仁茲深く撫育を加へられしかば一國父母の如くに思ひて國平穩年久し天文八年に老病にて逝去せらる其息權中納言房冬父の業を繼ぐ其嫡男阿波守房基社稷を受けて且くは無

爲なりき其子權中納言康政と云しが狂亂無道にて國中も大きに騒亂す元龜三年に伊豫國西園寺公廣と合戦しけり康政始は伊豫の宇都宮が娘を娶りて子二人迄有けるを去出して後大友宗麟の息女を乞れけり是は軍の時加勢を乞はんと謀略とぞ聞へし再三乞れければ宗麟も辭退に不及左有ば始の子息此方へ賜れ出家させ申其後娘を參せんと有ければ康政子息一人豊後へぞ下されける依て宗麟も息女を土佐へぞ送りける彼子息成人の後悦長老の弟子となる康政の狂亂無道いや増しになりければ家臣土居宗算強く諫言致しけるを康政手討にせられけり宗算が嫡子土居肥後守遺恨底に徹して覺へければ國人並に長曾我部など談合し康政を追出し豊後國へ送りけり宇都宮腹の若君今一人有けるを取立一條家を繼せ申元親が聳とす大津の御所なぞ云ける扱康政は宗麟いたはり扶助し白杵に假の屋敷を構へて入置たり如何なる者がしたりけん

一條で作り立たる紙衾破ればつれば御所めきもせず

康政の内室を土佐に残し置れければ柴田治郎右衛門を使として大津の御所亦是元親にも案内を遂げ幼少の姫君諸共に豊後へ飯國ありけり其後康政は又豊州を忍出て伊豫國へ渡り譜代の家人共駐集土佐の國へ入しが國人にたばかられ終に殺されけるとなり

彦山來由付逆儀事

筑前國秋月種實は度々旗を揚しか共終に功を立やらず無念とや思けん亦逆意の企にて方々と内略を廻らしける中にも豊前國彦山へ内通せしかば一山衆徒行者大友の仕置を疎み敵の色を立にける抑此彦山と申は西國第一の大山にて豊後豊前筑前三箇國にまたがり山中坊數三千に餘れり此彦山大權現と申は本地は西天竺の靈神たり人王十代崇神天皇の御宇に當て天竺より五の劔を東へ向て抛給ひ吾縁の有方へ留るべしとちかい玉ふ一つは紀伊の國室の都に留り一つは下野國日光山に留り一つは出羽國羽黒の嶺に留り一つは淡路國乙鶴羽の峯に留り一つは豊前國彦山に留る彼彦山に飛來らせ玉ふ時は其形八角の水晶にて御長三尺餘りに見へ玉ふと云傳し人王二十七代繼躰天皇の御宇に大唐より善正和尚と云人來朝有て彦山を草創ありしか共未だ佛法漾通の時至らずとて頓て飯唐成れけり其人人王四十二代文武天皇の御宇に當て慶雲二年に役の行者彦山の峰を闢き玉ひしに權現の靈あらはれ出給ひけりそれより以來靈驗九州にあまねく萬人歩を運びぬ其後人王五十二代嵯峨天皇の御宇に法蓮上人と權化の僧當山を中興し玉ひ種々の神異を示さる其比大唐より異賊襲來の事ありしに由里若大臣を大將にて數

萬騎の軍兵を西國へ差向らる去ども佛神の力にあらずんば輒く退治難かるべしとて諸寺諸社に勅宣有て降伏祈念を行はる殊更彦山は九國の中の事なれば別して丹誠を抽ぶべきの由法蓮上人へ仰ける是に依て一山衆徒行者肝膽を碎て祈りける實にも佛力神力にてやありけん異賊一戦に打負殘少に討なされてぞ飯けり是に依て國土安全に民も悦をなしける其時より毎年二月十五日に彦山に於て神秘の祭禮を執行ふ士民等相傳へて種蒔の祭と申なり近代は領地も多く祈願の料も數々集り僧坊繁富限なく驕奢目を驚す計なり往古より守護不入の山なりとて我儘にのみ振廻けり彼山法師根來熊野の惡僧も是には過じとぞ覺ける重科の者にては彼山へ逃入て頼みぬれば一人も山を不出助置けり夫故に若山伏等は惡黨人にいざなはれて徒黨を結び近國の在々へ走り廻り夜討強盜狼藉以外の外なりけり元より豊筑肥の間は大友幕下の事なれば宗麟より彦山座主の御坊に使を立て惡黨の狼藉下知を加へられ靜謐可有の由數度申入しか共内證は秋月一味の事なれば大友の下知は耳にも不入打過けるこそ滅亡の時至ぬと覺へたり是により宗麟大きに噴りて當家の下知を背くのみならず秋月に與力すること不敵なれ急に退治すべしとて清田阿波守鎮忠上野權正鎮俊を大將にて都合其勢四千三百餘騎天正四年丙子四月三日に日田郡に著陣し先兩將より使者を立前々の如く大友へ降參候へ左無きに於ては急に

攻入一山破滅すべき由を申遣しけれ共中々返事もなし兩將力不及同八日に件の大勢段々手分をして彦山へ押寄たり一山の衆徒山伏都合三千餘人甲の緒をしめ我もと討て出て命も不惜防戦しければ清田上野も散々に戰疲れて少しは退屈してぞ見へにける去ども寄手大軍なれば荒手を入替入替鐵砲を打懸矢を放ち夜晝の境もなく三日迄ぞ攻たりける一山の山伏等叶はじとや思けん谷々の己が寺院へ引入けり寄手の軍兵亂入て方々に火を放ちければ三千の寺院坊舎諸堂迄片時の焰と燼上る黒烟天をかすめ魔風吹しいて東西南北も難辨ければ寄手の勢其紛れに切入突入一人も漏さずと走り廻る討るゝ者は數を不知漸々身から計逃出たる僧山伏共佛來岳に取籠れば寄手の勢は黒岩嶽に陣取て遠卷に攻ければ衆徒も力盡き勢疾れて夜に紛れ一人二人づゝ何く共なく落行て今は手に向ふ者一人も無かりければ追詰るにも不及皆々歸陣とぞ聞へし九州無双の山此時に至て兵火の爲に燒亡しけるこそ本意なけれ

宗麟行跡事

元龜年中に西海暫く靜謐し鯨波の聲收めて原野三春の和氣を仰ぎ狼烟影絶て關山一片の閑雲を鎖す士民堵を安じ人物化に傲つて目出度かりける世成けり同四年癸酉改元有て天正と號す

二三年は兎角して過しに其比より亦豊府何となくさわがしく士民の心暗夜に嶮岨をたどる如く赤手に熱湯をさぐる様にぞ恐怖しける人々穴淺間敷亂世亡國の先表ぞと思ひながら聞て憚つて言葉には不出して過ける如何成事に斯く有ぞと尋るに偏に宗麟の行跡を傳へ聞に文藝人に越度量類を出て士を撫て民を恵み財を惜まざる事は當世無双の大將たりしが近き比は引かへて非をかざり練を塞き讒を信じ欲を縦にす家臣の面々異見を申得ず身を恐るゝ耳ならず亦如何なる世にもや成ぬらんと氣を屈せぬはなかりけり世亂れ國危かりし時には家臣等にも心を賦り萬事を打任せて頼まれける故に下の異見も聞入身の慎も深かりしが今既に六ヶ國を掌に握り慢心出來けるにや一族家老の面々をさへ近く寄付ずえもしれぬ小冠者原佞諛の族を近付て淺間敷事共を宜しと思ふぞ落情けれかりける程に義者は次第に遠のき姦者漸々に進み罪なくして咎に逢ひ功あらざるに賞に預り榮枯一時に地をかへて思の外の事共多かりけり而かのみならず異國本朝の珍敷調度を好み色々の道具を求む凡兵具は武士の重器綾羅は富貴の人の衣服なれば左も有べし何の益もなき珍器異物をすき好て價を不限買取其費幾ぞや唐船を豊府に付らるるも此心より起れり誠に翫物器志の金言も今更思しられたり富て驕るは世に有る人の思出かは傾國の基戒めても猶戒の深きは好色の道なり宗麟此比は色にすさめる事再發

し語るに言葉も不及書ども筆に盡し難くぞ見へたりける都より遊女を召下し自國他國より舞妓の數を集めては春の日暮安く秋の夜も短しと戯れ遊れける是は扱置又傾國の買人百姓等が娘迄眉目能をば押取て城中の侍女とし既に夫ある女をば其夫をそれとなき罪を云付其身を追ひ放し或は殺し失て其妻を奪取てけり近習の侍共は美女の有る所を見立て聞立てゝ告知らする事第一の忠と成ければそれとなく尋求ざる里もなし娘を持たる者は今もや召取るゝと安き心も無りけり其比宗麟の伯父肥後國菊池左兵衛尉義武入道々間をも由なき事に追失ひ彼妻美人の聞へ有しを召取て一萬田彈正に預け置宗麟ひそかに艶書を送忍び々々に通はれけり頓て何者か落書をぞ立たりけり

人の妻も義鎮しげと召さるれば世間の者はをぢ切ている
斯る亂行の事數々なりしかども諫むる事もならざれば世の末如何に成行らんと嘆かぬ者はなかりけり

由原宮放生會事

吾朝は昔より神國として尊も賤も佛神を尊敬せしめ二世安樂を祈るなるに近年豊府の侍は佛

神をも敬ず堂社佛閣を没倒する有様前代未聞の事共なり是に依て何者の云出しけるにや祝吏
神主巫子山伏など前々よりの社頭等を没取せられ悲歎の餘りに宗麟並に田原紹忍を調伏する
由沙汰しけり紹忍是を聞いて急ぎ宗麟へ申ければ大きに激怒して神職に携はる程の者共を一々
に誅伐すべき由紹忍へ下知せらる一門家老の面々此は以の外の儀なり罪科一等を宥免候へと
一同に申したりければ宗麟も尤と思はれけんさらば領國を逐ひ出すべしとてさまで稠しき
沙汰は無りけり毎年八月十四日十五日には由原八幡宮の放生會恒例の祭禮なれば三所の神輿
を飾立生石の濱へ御幸なし奉る處に俄かに天搔曇り大風夥敷吹出雨はげしく降て俄に抜川の
水みなぎり往來を絶したり生石の濱にて御輿の入らせ玉ふかり殿吹倒し青茅の吹き草竹木に
至る迄少も不殘海中に吹入けり加之屋形の棧敷とて三十六間に作立たる假屋其外諸士役人の
棧敷まで一軒も不殘倒しぬ磯打波高くして商賣の店汀近き民屋まで引浪につれて海中に入に
けり如何なる事にや有けん三所の神輿は途中にて俄に重く成せ給ひ地にすわり進まざれば御
幸難叶はなれ木の坂より十四日に還御成奉る斯る不思議は上代にも未代にも有間敷と諸人肝
をぞ冷しける抑此御社を由原山一宮賀來の社と崇め奉る由來を委しく尋るに淳和天皇の御宇
天長四年に比叡山延曆寺の上人金龜和尚と申けるが豊前國宇佐の宮に千日參籠あつて妙典秘

法を勤行して靈感を仰ぎ奉る所に靈現新にして其貌八足の白幡と現じさせ玉ひ豊後國大分郡
賀來の庄の楠の木に飛懸り玉ふ則影響の地なればとて此所を宮所と定めける造營の材木をば
大分郡阿南の庄倉木山にて星漫々と降りける其光二葉山より倉木に相續て照輝く事白日に不
異夫よりして彼所を星嶽と名付高岡山妙見大菩薩とあがめ奉る由原山の神事卯酉の年大神法
會ある時には彼星嶽山に三所の神輿を御幸成奉て御一宿にて還幸也それより幸野とも申なり
扱又倉木山に於て速見郡の境に異國降伏の鋒立り此故に其所を鋒の峠と云へり世は未代と云
共上一人より下萬民に至る迄神慮の威光を仰ざるは無りけるに如何なる世の末なれば南蠻宗
渡海して佛神を助け萬民のあだと成ぬるこそ不思議なれ

物怪事

天正五年の夏の比宗麟或時不例の心地にてやすらい居られしに天井を見れば血の付たる大な
る足形有宗麟常に筒様の事心に懸ぬ人なれば少しも不騒予が煩頓て平癒してさか立んなど狂
言して居られけり亦或時座敷の扉より小松生ひ出ると見しが俄に大木と成て枝を垂れ葉を並
ぶ皆人不思議の事に思ひ守り居たりしが此松次第にほそく成て幻の如くに消失にけり是をこ

そ希代の珍事と思ひける處に或夜宗麟の坐せられたる壘の間より六七尺計の屏風出しが暫く有て失せにけり是而已ならず種々様々不審共多かりけり是偏に佛神の祟りにもやとあやしみて空畏しく物待心地ぞせられける

肥州伊萬里軍并貝瀬合戦事

爰に龍造寺隆信は汗馬の勞つもりて威勢を肥前に奮ひ猶國郡を伐取んとぞ働さける先同州平戸の守護松浦民部大輔を旗下に成んとて天正五年の六月に彼地を差して押向ふ民部是を聞て大友に加勢を乞ければ大友より同國波多尾張守筑前國小田部大鶴等平戸に相向ふべしとの催促あり隆信此事を聞てさらば油斷すべきに非ず加勢の來ぬ先に急ぎ松浦を攻落んとて松浦が領内に討て入る松浦堪へ兼て伊萬里と云處に打て出で散々に防ぎ戦ひけり同國唐津の城主波多尾張守は兼て松浦方にて有けるが俄かに野心を起して龍造寺に與力しける間松浦忽ちに打負て漸く小船に取乘て平戸の城に引籠る隆信續て寄すべかりつるが迫門を渡すべき船無して延引す亦同國大村の城主大村丹後守純忠幼名を新太郎と號す入道して理事と稱すは大友の幕下にて有けるを隆信人數を差遣し彼が領内に働しが純忠は極めてすゝどき弓取なれば龍造寺が人數彼杵と云處迄寄た

りける夜雨風烈しかりけるを願ふ處の幸と悦て二千餘を相順へ曉方に彼杵に押寄せ喚叫んで切廻る隆信の勢不意の事にては有雨風は頻なり途方を失ひ討る者三百人殘る者漸く小田と云ふ處迄延き退く隆信は大村發向の爲加瀬の庄迄出たりしが先手敗れて小田邊へ退き來るを聞き以外の腹を立て急ぎ馬に打騎り僅五百餘人を召具し彼杵に馳て行けれども大村は昨日の軍に打勝て早々貝瀬と云處まで引入ぬ隆信やがて貝瀬に押向ふ松浦肥前守番船を出し後藤貴明伊萬里家俊以下一陣二陣として馳せ蒐り火水になれと攻戦ふされども城兵不屈していつ果べきとも見へざりけり鍋島加賀守直茂彼浦人共に金銀を與へ或夜城邊の青田を悉く刈取らしむ其時隆信は淺生山の頂上に陣し敵陣を見をろしてぞ居たりける斯りける處に敵多勢にて突出て先手の勝屋勝一軒に打て蒐り面も不振戦ける勝一軒が一手崩れなだれして見へければ隆信田原伊勢守尙明を直茂に遣して勝一軒破れたり速に救ふべしと有ければ直茂是を聞敵の勝誇りたる矢前に向ふ事一行なくては利あらじと總勢を一手になし追手より攻懸る敵切先を相双べ防戦天を掠めけり直茂其しを合を見澄して兼て勝れし兵を搦手に差廻し單兵急に攻入り案の如くに搦手は油斷を成して有つるを副島太郎兵衛倉町直清木下四郎兵衛成松遠江守於保賢守入道等究竟の兵共南の手を一番に攻敗る倉町直清深く働き入て討死す木下四郎兵衛其

敵を討取ぬ成松遠江守信勝縦横無碍に討戦ふ武藤丹後守貞清は間道より忍入り總勢を嚮導す
増田太左衛門江副兵部左衛門秀島甚左衛門相浦河内守水町彌太衛門諸岡惣右衛門等分捕高名
數を知らず杉町刑部と云者直茂が直先に立て屏の手を打破り直茂を引入れけり此時成富十右
衛門茂安は東南より火を放ち城郭を焼立て烟塵空をくらませり隆信も自ら鎗を相接へ強勇の
侍十五人を突伏せて其身は疵も負ざりけり純忠終に打負て成松遠江守信勝を頼み頻りに降を
乞ければ隆信是を宥免し純忠が娘を隆信が次男江上家種が室に定めて幕下の約を成しにける
自是雄勢盛にして向處の戦に勝利を得ずと云ふ事なし大友方の者共を追拂ひ討果して其領地
を家人共に宛行ふ松浦も其勢にをそれて伊萬里千町を隆信に差出し旗下にこそ成にけり偕又
高來の有馬修理大夫も叶はじとや思けん降を乞ふて隨身し深堀純賢島原純豊神代貴茂等も同
く來り降りけり

卷之七 大友島津鉾楯事

扱て天正六年の春の比より大友と島津と鉾楯に及ぶ其濫觴を尋ぬるに大友は先祖代々九國の
探題なり近代亦義鑑義鎮先蹤を繼で探題職を給はりしに義久近年探題別揆の御教書を蒙つた

りとして大友に屬せず天文年中に義鑑不慮の害にあひし比義鎮未だ弱年なりしかば國士等此を
輕じめ己が國々黨を樹怨を結び豊後の下地に從はざれば義鎮義兵を擧げて豊筑肥の騷動を鎮
めける其時島津方には根占肝屬隅州に亂を興して相戦事數月にして義久終に打勝しかば其勢
ひを以て薩隅の二州を治め取日向の内へも手を入れしかば國人等恐をなして大略家人とぞな
りにけるが宗麟は島津が別旗を立るさへあるに筋なき探題がほこぞをかしけれと常々遺恨に
思ける扱こそ近年は大友島津兩屋形として九國の總司と仰ぎける去共島津は領國僅か二箇國半
然も遠國邊鄙なれば其威勢大友には不及大友は正しく九國の探題職を承り領國六箇國半壹岐
對島の二島に至る迄彼命に不隨と云事なし故に五畿内中國迄も九國管領と稱せぬはなしは大
友島津威を争ふ始なり又去ぬる元龜の比より宗麟神社佛閣を破却せし事又は好色亂行の事共
世人普く譏あへり中にも島津此事を傳へ聞て大友家滅亡の時至りたり島津九州を治ん事疑な
しと悦び心あらん人々は惡逆無道の太友に順ふべからず當家隨身に於ては後榮を期すべしと
ぞ沙汰しける是を尤と思ふ族は義久に内通して時の變を待居ける者も多く聞へければ宗麟も
怒を含む折節に宗麟祕藏の鷹あり豊後の國鷹峯にて取得たれば名山と名づけて無雙の逸物に
てぞ有ける或時此鷹放れて行方を不知宗麟祕藏なれば殊の外惜しき事に思しに此鷹日向の國

宮の久保山が在所にて居取たり頓て豊後に注進せば宜しかるべきに義久に贈りて隠なき逸物の由を云遣す宗麟此事を傳聞て總じて我恩の下に身を立ながら島津に内通する族有と常々聞たる事なれども疑しきは戒しめ難し今久保山を其儘に置くならば旗下の國士何を以てか制すべきとて數多の軍勢を差遣し久保山治部を召取本莊帶刀に預置ける義久此事を傳聞て使者を豊府に遣し件の鷹を返し申越けるは此鷹を大友屋形の祕藏と兼て承り候はゞ義久も止め置べからず況や久保山も存知たらば宗麟へこそ進ずべきに彼も知らぬが必定とこそ存候へ彼者が罪をば義久に免ぜられ候へと懇に云遣す宗麟彌怒をなし義久士を救ふ本意の程は斯こそ有べき鷹は正しく名山鈴板争て無るべきしやつ切て捨よやとて久保山を引出し件の使者の前にて首を刎ける義久に兎角の返事もあらばこそ使者は度方を失てぞ歸りける箇様の事共重りて近年は音信不通に成にけり

伊東入道與島津合戰事

爰に日州縣の城主伊東三位入道島津と領地を争ひ合戰度々に及びしかども伊東も八千町の領主にて一方の強將なり然も要害の地に居すれば島津も中々持あくんでぞ見へにける天正の始

の年島津兵庫頭義弘一萬三千の人数にて押來る三位入道も城より打て出野外に於て勝負を決すべしとて出張す伊東權守が異見に敵は一倍の人数なり引請て戰はゞ利あるべし野合の合戰は心元なしとぞ云ける三位入道是を聞て島津と勝負を争ふ事既に六箇度也去共一度もをくれを取速に行向て打散すべしと打出る島津が先手諸縣飯野へ押出れば伊東が一族合て六千人入亂て防戰す三位入道の内に米良伊豫守と云者兵庫頭と鎗を合せけるが兵庫頭已に突伏せらるべし見へける處に兵庫頭が郎黨馳付て押隔りければ義弘危き命を助けり島津七組散々に敗北せり伊東方の先手共大きに島津を侮り島津千人に伊東が棒一本などゝ匂りけり翌日は各々具足脱て其近邊河狩などして油斷しける處を兵庫頭急に人数を出して戰を始めしかば伊東方散々敗北す三位入道常々兵道に賢く孫吳が法を必とするものなれば法を重くし義を専らにせし故にや此度先手の二十五人芝居を去らずして討死したりけり先陣の大將福永野村が敵を侮過して敗北しける事三位入道大きに怒つて出仕を止させにけり兩人も先非を侮て詫言しけれども不聞入既に三年を過し福永野村逆心を企て薩州へ内通して島津勢を引入此彼に隠し置相圖の時分に成ぬれば島津勢八千餘まだしのめの曙に鬨を嘩と作りかけ一度にばつと攻入ば思もよらぬ事なれば伊東もこは何事ぞと云ふ處に兼て隠れ居たる人数共四方に火をかけ十

文字の旗押立四角八方に馳廻る討たる、者數をしらず入道辛々命を全ふして豊州さして落行けり残る者も行方しらずちりぢりにこそ通行けれ入道は豊府近き處に暫く牢浪しけるが如何もして本領に歸らん事を思ひ攝州式部允を頼み今度某本國を退出候事重代の家人等島津に心を合せ手引せし故に一戰に打負たり流浪の身と罷成候兼て存掛なき事なれば手もろき敗軍弓箭の家に至て偏に面目を失ふ事是に不過候可然は御威光を以て本國に安堵仕度候と折々申けれど宗麟始の程は聞も入れず有りけるが其後田原紹忍を頼て申入けるは此度本意を遂るに於て本領半分を奉るべし偏に貴老を頼由頻に申しければ紹忍元來欲心深き者なれば宗麟へ伊東入國の御加勢を頻りに勸申ける宗麟は常々紹忍が申す事萬づにたがはじと有し故に進發せらるべきにぞ定めける是偏に紹忍が心より大友の亡ぶる端とこそは成にけれ仍て齋藤鎮實申けるは今度日州進發の事伊東に頼まれ彼に本領を取らせん爲の軍なればぎりの一戰と紹忍は取成候由承る尤も武士の道は義を先とする事なれば斯こそ可有事なれども此度の弓箭は全く義の當る所にあらずとこそ存じ候へ其故は當家九國の探題たりと雖ども此近年は島津が持國に於ては曾て御旗下の役をも不勤さりとて弓箭を以て從へ斥らるる事もなく捨置るるは探題職の弱きにては候はずや然るに今年伊東が本領を半分差上御幕下に參り候べしと申すに付御

勢を出さるゝは頼もしきいぢにても候はず今當家の富貴を以て何ぞや伊東が僅の領地を食せ給ふべき亦退ひて案を廻し候に毛利元就すどの軍に負し事嫡孫輝元無念に思ふ事骨髓に徹して覺候如何にもして父祖の本意を遂んと支度仕り近き比拵へて候長府の城は九州進發の根城の爲と承及候若今度の合戰を思召立候はゞ俄に勝負あるべからず二年も三年も挑み争ふにて候べし島津までは恐るるに不足候へども輝元時節よしと窺ひ豊前筑前の間に亦多勢を差向ん事は疑ひ有まじ左あらん時は豊筑の國侍等先年の如く毛利に語らはれ變儀有べし況して謀略第一の肥前士龍造寺を始め輝元義久に手合可仕候然る時は日州長陣難成引入より外は候まじ是等は遠き慮也先近く物を案ずるに今度島津と御對陣あらん時六箇國の旗下を始め無覺束候尋常も上には當家を崇敬する體なれども内には殊の外さみし申と聞へ候何れか軍忠を勵み候べき大方勝負を兩端に窺ひ自然味方の弱り目と見及候はゞ裏切を致さん事鏡にかけて見へ候其上屋形近年の御政道何事も只紹忍がはからひと思召候故に譜代の家の子とても思入たる體も候はず旁以て今度の御弓箭を思召留らせ玉へと再三諫め申しけれども紹忍強て勸むる上は自餘の宿老の議論を用ひざりけることをほいなけれ

大友家臣軍評定事

大友勢日州進發事既に極り幕下の國々へも催促有ければ家臣の面々吉弘左近大夫鑑理が宅に打寄て軍の評定などありける其後に鑑理申けるは田原紹忍と云俊人を屋形殊の外崇敬有て加恩身に餘り威勢諸人に越行末何事も彼が思儘に有べきとやかゝる大事をも進め申すらん屋形の御誤り有る事も仰せらるゝ趣に任せ諫申事もなく何事に付ても御心にさかはざる事を本意とし吾身の榮華のみを計り國家の危をも不顧吉岡宗觀臼杵鑑速在世の間は政法いみじく上下さながら禮法に違はず廉恥を懸賞罰に付て人の恨みも無りしに彼等なく成て後は諸事に紹忍のみと覺さるれば己に諂ふ者には忠なきに賞を與へ己に疎き族をば小科をも刑に行ひ父祖重代の功を積し者共田原に押すへられて眉をひそめ巧言令色の輕薄者共したり顔に時を得て上下の作法亂りに成もて行事淺間敷次第也さればとて各々我々が申事は御承引なし御一族同紋の人々も誰かは田原が擧達する事を申留らるべき總じて當家の依頼共なるべき戸次鑑連は中國大事の押とて立花に在城せらる彼人爰にあるならば是程迄はあらしを鑑連をば六箇敷者に思ひ中國の押へを事の幸と立花には被遣つらめ何に付ても君臣共に極運の末哉と泪を流し申

ければ齋藤鎮實を始め皆々感心大方ならず重ねて鑑理申けるは御承引もなき我々は御大事に命を捨候べきが無二と思入らるゝ人々心元なしと有ければ鎮實大に打點頭て噓と笑て各々座敷を立けるがこの者共日州耳川に於て討死をしたりける志の程こそ哀なれ亦田原方の者共は紹忍宅に寄合軍の評定と聞へしが其列座の内には耳川にて戰死の者一人もなく聞逃見逃したるも多かりけり

宗麟日州進發事

かくて日州發向近付ぬれば鑑理鎮實以下一紋宿老の面々は日々夜々に會合有て美膳を盡し酒宴茶の會隙もなし是唯事に非ず今度の軍とても涉々しからじ左有ん時は討死して名を後世に残すべきと存究ての最後思出とは後にぞ思合せける天正六年戊寅八月十二日宗麟豊府を打立ける相順ふ者には吉弘左近大夫鑑理同加兵衛鎮信同越後守鎮益戸次左近大夫鎮連同左京大夫入道玄珊臼杵民部大輔鎮良同宗五郎鎮永志賀河内守鎮行同兵庫頭鎮隆田北相模守鎮則同治部大夫一萬田近江守入道宗慶同彈正少弼清田參河守鎮辰木村數馬を始として一族三十一人其外齋藤吉岡田原朽綱小佐井高橋高山利光宗像奴留湯大鶴蒲池津留原竹中佐伯攝津坂本古莊足達

安東永松和田淺岡を先として重代の士大將足輕大將百四人總勢參萬五千餘とぞ註されける軍神の首途なればとて由原八幡宮へ足輕を掛させ社頭を取巻て関を作り散々に射させける凡軍勢の押行道に切所堀沼あれば寺社をこぼちはめて人馬の通路とす扱て八月十九日日向の國武志加に着陣す爰に暫く逗留有て國々の軍勢の來るを待けり幕下の國士毎日引も切らず馳集りける程に兩三日の内に總勢五萬餘と成にける頓て手分有て宗麟一萬餘にて武志加に本陣を居らる國々の集り勢二萬餘人田原紹忍を大將として搦手へ向らる追手は吉弘齋藤白杵戸次佐伯田北志賀一萬田小佐井吉岡以上二萬餘人八月晦日武志加を立隅州の高城に發向す路次に鳥津方より構へ置たる長手大江の城を燒拂ひ人民を追ひ拂てぞ通りける

鳥津中書乞和事付高城軍事

扱て總勢五萬餘騎檜越と云ふ第一の難所を五日にこそ通りける人馬疲れ諸勢揃はざりしかば後れし勢を待調へて九月十八日高城に押寄ける彼高城と申すは後に高山峨々として雲千仞の嶺に聳前には河水漫々として岸百丈の岩を削れり深谷を隔て、城郭を構へたれば四方嶮岨にて坂を登る事五六町なり豊州勢八十梟に思へども攻取べき様なし寄手先陣屋を構へ竹束板楯

を拵へてこそとて各陣をぞ取りにける九月廿七日の早朝に城主鳥津中書より田原紹忍方へ使を以て申けるは今度各々出馬の事當家に對し御憤有に非ず伊東が本領の嘆を申に付て思召立れたる由に候彼伊東に於ては鳥津弓箭を取る間は忘るまじき多年の意趣候へば安堵の儀思も不寄候へ共大友屋形御馬を出さるゝ所をなどかするしなくては候べき飢肥千町の地を貴家に對して伊東に返し申べし御勢をあげられ候へと云ひこす紹忍大きに悦び急使に對面し御返事をば是より申すべしとて使を返し置き頓て諸將を招寄て鳥津使者の趣を語て申けるは此上は武志加に人を遣し屋形に此由を申すべし中書既に和を乞ふ上は此れをしをに御勢を入らるゝにて有るべしと云ける其座の内に白杵新助申けるは紹忍の仰も去事なれども中書が使の趣を退ひて推察するに全く豊州方の武勇に恐れて和を乞ふにては有べうも不覺只謀にてぞあるべし夫を如何と申に新田殿の赤松圓心が城を攻んとせられし時圓心欺て義貞に使を遣し播磨の守護職を給て降らん事を求むるに義貞繪旨を申下し赤松に送る此使節京都往還の間に圓心城を拵へすまして手の内を返す様なる繪旨何かせんと嘲りぬ義貞程の大將さへ圓心が謀に落玉ふ未代の龜鑑に非ずや鳥津が使の趣を武志加に申越其使往還彼是の内に義久の後詰を待請内外より捫合せて打出んとの行偏に彼圓心が日數を送らせ將軍の上洛を待合せたるに少しも違

ふまじ若亦然らずば各々此山を引取り時弊に乗て打て出追懸討取べしとの行此二つの外を不可出所詮鎮次に於ては今日も早く攻落か若叶はずば討死せんところ存究て候へと云紹忍重で申けるは尤鎮次の申され分其理有と云へども今度の弓箭島津を亡さるべき爲の出張に非ず伊東が本領だに取返さるれば夫迄の御安利也此城の體を見るに四方岩石にて谷隔り峯多し寄手何程矢竹に思ども輒く攻ほすべきにあらず幸ひ中書飮肥千町を相渡すべしと云なれば相違すまじき證文を取り早く引取べし亦當陣引拂時敵方より付來べきとの儀思ふに此城小城なるべし味方は大軍也何條去事あるべき若誤て付出るならば殿は某仕らん心安く思われ候へと有しかば一座の人々如何思けん口を閉て居たりける鎮次彌怒をなし吾等如きの度量各に及べきに非らず只豊州を罷出しより討死して君恩を報ぜんところ思ひ設けて候へ方々は當陣を引拂はれ命を全ふし玉へと云も果す座敷を立て己が手勢計を引分て高城に押向ふ斯評定破れしかば列座の人々も座を立とひとしく城際に詰め寄せ兼て用意したる竹束板楯をつき寄つき寄數日隙もなく攻めたりけり城中には弓鐵砲を以て防ぎ弩弓を放ち懸しかば寄手も若干討たれにけり去ども寄手の諸將名を得たる老功の者共戸を爰に曝さんと期したる軍なれば打共射れ共不疼晝は山々より多くの木を伐取束ね合せて城の西に當る巔の上へ運び上嶺より谷に轉ばし

落て埋草とし夜は楯をつき寄切岸近く攻寄せける五三日の間は埋草の功も見へざりしが數千の人數を以て二十四日埋ければ一の尾二の尾とてさばかり深き谷二つを嶺と齊く埋て城中城外同じ平地と成にけり寄手是に機を得て塀下にひたひたと付て手詰の勝負ぞと喚き叫んで進む程に難なく切岸の上に構へたる塀は半引破りけり城中の兵も爰を破られじと防ぎ戦ふ内より突出す鎗を外より奪取外より突入れば内より是を奪取互に奪合程に鎗の柄折れて鶉の首もなき柄を握り石突もなき鎗を以て突つ突れつするも有太刀長刀も打折て差添斗りにて打合者もあり敵合遠き所こそ弓鐵砲の勝負はあれ是は僅に切岸の塀一重を上らん上せじと争ふ戦なれば胃の鉢と鉢を雙べ鎧の袖と袖とを振り合せ組づ轉づ追込時もあり追出時も有一日一夜の谷戦に内外の勢互に疲れてぞ見へにける齋藤白杆兩手の者共二の尾に攻登りけるが其夜しも風悪くして然も敵の方風下なりしかば近所の本草を伐集め火を付て上が上に青芝を取懸てふすべける程に烟城中に吹掛て防ぐ兵目を開くことを不得城中此烟に退屈やしたるけん防ぎ勞れて二の尾の丸を開て本城七曲の丸に引入けり扱こそ鎮實鎮次二の尾を一番には乗取ける

義久後詰事

高城既に難儀に及ぶ由聞へしかば後詰せんとて島津修理大夫義久薩隅二州の勢を催し日州佐土原迄著陣せらる大友宗麟此事を聞扱は義久是迄出張しけるよな今度日州飲肥の地に於ては彼方よりこそ扱を入れ和を乞ふべきと思しに還て合戦を以て出陣するに於ては某九州の探題として撓を見する處に非ず一戦なくては叶まじ乍去高城いまだ落去せず彼城の寄手共敵に通路を塞れ道筋に搔上城の一所も取れなば引取がたかるべし耳川邊にて待合戦にすべしとて高城の寄手共を悉く耳川迄引せらるあはれ今一兩日の程義久出馬延引せば高城は落べかりしを運強き中書哉とぞ申ける斯て十月二十七日豊州勢菱刈耳川の北に陣を取りしかば義久も十一月五日に耳川の南に勢をまとめ陣をぞ取りたりける耳川の南北に鎮西の諸士數千の陣屋を並べ家々の旗旗を立たるは項羽成阜に挑み義貞武藏に打出しも斯くこそと見へて夥し就中島津方の陣屋軍神の祭と覺しくて假屋の棟毎に四五尺計の白木綿を立てけるが川風に反翻しては偏に白雲の下り覆ふかとぞ見へにける大友方の先手吉弘齋藤より武志加に使を立て宗麟の旗本を耳川迄被寄候へ田原紹忍は其儘をはすべしと云遣す宗麟自餘の意見を尋る迄もなく紹忍思はくに不如とて終に出馬せず武志加に扣へてぞ陣しける吉弘齋藤を始め何も悔み云ひけるは抑もあの紹忍何國にて如何程の武功あつて今各が沙汰する事を悪しからんとは申ぞ餘の義に

於ては如何にもあれ軍慮の道に於ては吾々を差置紹忍が謀略を能と思召るゝ御心こそ大友の極運遠からざるかと口惜けれ本陣の後楯なくては國々の集り勢一足もためず崩れん事は疑なし左無だに弓持ても矢をはげず太刀を佩ても柄を不握人の進めば進み人の引ば先立て逃行勝負を心に掛けざる集武者何十萬あつても用に立つ不可然れば粉骨を碎き我々先をかくるとも後を守る勢なくて雑兵の氣撓まん事如何すべきと嘆きけり扱しも置べき事ならねば鑑理鎮實亦相談し重て宗麟へ申越けるは義久昨日耳川迄寄來て候へ共寒天にて候へば耳川を渡してはよも戦ひ候はじ其上小勢と見へて候へば備をしめて待合戦とぞ覺へ候扱又此間高城に於て敵方和を乞候を此方より破て戦候へ共彼城いまだ落去も無き内に義久打出候故まさほくして引取候へば聊か彼が利に似たり耳川にて味方一戦も不仕猶も引入物ならば島津彌弊に乗て日州を一圓に治取るべしと思可し味方は豊州を後にし臼杵郡に人數をまとめ陣取稱る程ならば島津勢引も懸らず日州にて日數を送るべし其時誰ぞ一頭に肥後勢を指添へ肥薩の堺小河内邊より和泉村に働せらるゝものならば義久元來小軍にて方々手遣程遠しては叶はじとて日州を引入より外は有まじ敵引入者ならば味方亦高城邊松山の近隣迄も焼つめて働べし左有んに於ては敵方退屈すべき事疑なし其上敵は小軍にて方々の手遣なり味方は大軍にて高城の合戦に

能程鹽を付候へば敵方より和談に可仕若合戦に及候へ共必定勝利なるべし唯今は大軍にて候といへども國衆の心不揃雙方の強弱を浮足にて窺候へば頼むべきに非ず右の如く仕掛候ひて味方少し勝利有と見及候はゞ人々の心勇べき事日比二十倍なるべし國衆變儀無に於ては猛勢を以て明春は薩州迄御打入候べし然らば當陣を引揚當冬中に肥薩の境に小城を構へ人數を指し置れ候はゞ明春敵を追込べき事掌の中に御座候とこそ申遣ける宗麟又此儀をも不用是程に取詰たる敵合に軍をまはして芝居を敵に踏ん事思も不寄との返事なれば吉弘齋藤も力不及して偕は今度の合戦に尸を日州の耳川に曝して忠の偽りなきことを知らせばやとぞ思定ける

耳川合戦事

去程に義久には島津兵庫頭同中務大輔同圖書助伊集院左衛門佐祈菴院來入五大院新納武藏守を始として一族不殘會合有て軍の議定しけるは抑今度の合戦は敵方より仕掛たる弓箭なれば味方より強て進所に非ず幾度も敵の破り來らんずる處を防ぐべし乍去機を見て變に應ずるは兵法の常なれば此川を強敵の渡を待つべきにも非ず時節能ば此方よりも渡して勝負を決すべしと衆議一決して旗の手を下し足輕を川表に進ませ胴勢一手一手に引合馬を跡に引かせ専ら

合戦を持て十一月九日早朝より終日備を立たり豊後勢も同く備を張て川をさかうて矢軍少々あつて其日は一戦もなかりけり其夜吉弘鑑理豊州の諸將に申しけるは敵は一定合戦を持て備たり明日は必敵方より川を越て馳るべし味方は川端より三町程隔て備を立敵川の半を渡ん時味方川端に馳寄て勝負すべし國々の勢は固より別手也今比川に添て下り横鎗然るべしと申亦佐伯惟定申しけるはいやいや川を渡りて馳る敵は小勢にても勢ひ有て留難し亦敵を待て川端にて勝負をせば渡す敵を揚じとするに味方打交り扱て川中の鎗場成べし川中にては懸引不自由にて思敵に逢難るべし惟定に於ては義久が押付を見ずば生きて歸まじと思定て候へば明朝早天に川を渡りて討死せんと存候如何有可しと有ければ皆亦是にぞ同じける今度利を失ふに於ては生きて歸らじと各思切たる體なれば誰々も先手をぞ望ける去共老功の勇將にて諸軍を司る士は鑑理鎮實を左右の先手と定め白杵佐伯志賀一萬田小佐井は二番戸次田北吉岡萩野は三番也川上を渡す勢は田原一黨朽綱清田木村奈田大鶴宗像山下利光此外國々の集勢一手一手の働なり明日辰の刻川を渡りて一戦と相定各陣屋に歸りける中にも吉弘は齋藤が陣屋に人を遣し明日川を渡すべき折柄は諸事申合べし時刻の事も彌辰の刻に究められ候や相圖を能々諸軍に觸送るべき由申ければ鎮實が返事に某未だ時刻を究不申候御邊の渡さるべき折柄重て人を給

り候へとさりげなき體の返事なれば鑑理思咎めて誰々も同じ心と云ながら就中鎮實は思切たる風情前に見へて有しぞかし重て竊かに事の様を見て參れとて亦一人を遣す案の如く鎮實は今夜を最後と用意しけるが手の者共を召集め今宵は殊更寒氣ぞかし酒を出し各も呑候へと有ければ畏て冷酒をぞ出しける鎮實怒て時もこそあれ此寒氣に間酒こそ飲べきに冷酒を出すこそ奇怪なれ周章たりと申しかば薪が御座なきと申鎮實聞て是に究竟の薪こそあれとて乗替の鞍を破せける近習の者共是は如何に御秘藏の名作の鞍にて御座候と申鎮實聞て何條作の鞍にてもあれ命有ん時にこそと破て酒を暖めける斯て酒も半の時鎮實共々に申けるは明日一番に渡つて敵味方の目を驚す程の軍をして名を揚よ凡河を越ての軍には乗入る場より向の揚り場迄の善悪を見るべし揚り場悪しければ跡勢にも越られ敵にも安々と討るゝぞ川より前にて馬の足並を早め其勢を以て乗入べし陣取の時川端より五町三町引退て備を立る事は川を越へ來る勢尤留がたし五町三町退て備を立川を渡り揚りいまだ備を設ざる所に押驅追崩すものなり渡り揚る時急に敵かゝる共動べからず堅固に支へ押行べし渡す合戦には泥障を解て力革に結付よ腹帯を馬氈の上に引出し前輪に引上げ駈としめ手繩を左の手に取右には鎗長刀の類を手綱に取添て持べし手繩を強く引けば馬あをのけに返すなり馬は四足のとゞかず所にては竿

立に成て跡足斗りにて渡る跡足もとゞかぬ時はつと沈んで頓て浮上る者也乗手不案内なれば馬の頭を出す時策打事も有馬は頭計を出して遊ぶぞ亦乗手すはだならば鞭を口にくはえて我も共に遊び馬の足立と見れば鞍壺に乗直るが能ぞ馬を勞らかさじが爲なり冬は綿馬氈水にしみて悪し板馬氈を用べし明日は既に敵合に及ばゞ各手柄も無益首取べからず一騎なり共懸通義久に近付勝負をせよ者共とぞ語りける鑑理が使是を聞て走歸て斯くと申す鑑理聞てさればこそとて用意して手の者計竊かに出立せ十一月十日の夜未だ明ざるに耳川の上の瀬を舟にて押渡る鎮實是を見て鑑理に出抜れ先をせられけるよな早打立者共と耳川の下瀬を馬人さつと打入て渡ける島津中書爰を上じと二千計にて渡口に馳せ合せ矢軍にも及ばゞこそ鎗長刀を揃へて川中に追はめんとす鎮實が馬廻千餘人面も不振喚て上り川端に立渡たる敵を一町計りまくり上たり大將鎮實は眞先に進て驅上り敵の中を一文字に裏へ割て通んと懸廻る實にも采配を持たる骨柄尋常の武者共見へず天晴大將と見てければ中書が軍兵共我先に討取れと馳合す鎮實究竟の手さゝなれば五騎迄切て落しける去共多勢透間なく取懸しが馬上より組て落上を下へと返す處に敵共落重り終に鎮實を討てけり鎮實が士卒共主討れぬる上はいつの爲に命を惜んと敵の中に割て入飛かゝりて組んで落落ればやがて落重り死ぐるいをぞしたりける二番備

志賀一萬田小佐井三番備へ田北吉岡何れも川を渡つて島津中書新納武藏守に驅合せ火出る程相戦ふ左備の大將吉弘鑑理上の瀨を渡したれば後より續て打て驅る二番備佐伯臼杵三番備戸次萩野も同く渡して伊集院祈塔院が備に打てかゝる田原朽綱其外國々の勢は川上を渡つて横合に馳合る大友總勢四萬五千島津勢二萬五千餘の勢と懸合せて卯の刻の初より未の終迄七八度の合戦に討れる者數を不知義久の士卒戦勞れければ豊州勢勝色に成てぞ見へたりける義久是を見て急に觸遣し申の刻斗に總勢を引上て二里計退て猿の馬場と云處に陣を取せける豊後勢も終日戦勞れければ其日は續ても不寄手負を養育し箒を焼て陣を堅く守り明るを遅しと待居たり

豊州勢敗北事

明れば十一月十一日島津の一族薩隅の大將凡て二十五備何れも一手切に備て待合戦にぞ定らる豊州勢は都て三十一備の中昨日齋藤鎮實死す殘の三十備吉弘鑑理大將にて追手の濱表より驅つて追つ捲つ切つ切られつ呼喚んで攻戦ふ搦手は田原紹忍大將にて國勢どもを司り遙の西に備を立追手の相圖を待て攻戦ふ大友島津の兩家今日限りの争ひ九國二島の諸士上下拾萬餘

剛臆毀譽究戦なれば進ては屍を曝す共退ひて命を助る者はあらじとぞ見へにける中にも吉弘田北戸次佐伯臼杵は義久の旗本に驅て必至々々と馬より下り立て手に手に鎗を以て無二無三に突て入義久の旗本は來入山口伊勢三千計にて備たりしが突立られて半町斗り引退くさしも武勇の薩摩勢逃足に成て義久の馬印左に靡き右に歇て旗本以外の外さだけの處に大友家の極運にや一方の大將田原紹忍味方勝色に成たりと不見して義久の馬印小旗共が西を差て披き靡を此方へ進み驅ると見なして旗の手さだち引用意と見へければ島津勢是を見て時分はこゝぞ田原が備を驅崩せと喚き叫で突て入る紹忍是に仰天し是非なく馬を引返し跡をも見ずして逃にけり宗麟の代官とて紹忍が旗本に立たし大友の襄葉の紋付たる大旗頻に引退きければ幕下の國士一支もせず一手一手に退とぞ見へし大軍の崩れ立たる僻なれば名を惜む勇士も立られて心ならずぞ引にける是に利を得て島津勢鬪を作り懸て追驅る大友の一族紋葉の人々大略は敗北とこそ聞へける一手の寄手悉く崩立ければ追手の勢も友くつれに成にける其中に吉弘右近大夫鑑理臼杵新助鎮次田北相模守鎮則佐伯惟定小佐井吉岡山下等以上八頭は踏止て面も不振攻戦ふ去れ共味方一手も返し助ざれば勝ほこつたる大敵に前後を包まれ一人も不殘討死す逃行勢も右往左往に追立られ途に迷ひ方角を失ひ此の詰り彼のはざまにて討るゝもの數を不知

過半耳川の深に追はめられ溺れて死する者もあり人馬の死骸は川原の石よりも猶數増りてぞ見へにける

戸次治部大輔兄弟事付宗麟歸陣事

爰に治部大輔鎮直舍弟右馬助鎮榮は從弟の右近大夫鎮連が手に候けるが胴勢に引立られ三町計落けるが鎮直弟の右馬助を招て云けるは今度當陣に於てさせる高名もなく引取ものならば多年の粉骨徒に逃たりなど、嘲弄せられんはいと口惜かるべし、いざ取て返し一軍せん尤とて手の者僅七十餘人を左右に立て追驅る敵の中に割て入當るを幸に四角八方を切廻る追來る勢五百餘僅の人數に切立らればつと崩れてぞ引にける兄弟が手に懸能敵數多討取たり若黨も過半討れば今は是迄なり今日に限る軍にも非ず其身も深手薄手數々所負ぬ味方の勢も早落延たるらん引取ばやとて近付敵あらば取て返して戦ひ返しては戦ける間後に慕ふ敵も無りけり斯て田原紹忍は是非なく武志加迄逃來り味方敗軍の由を告申す宗麟聞て合戦の勝負は期し難し悔ても益なし何様時節を待て鬱憤を散ずべし爰に一日も逗留せば敵若し寄來る事も有べし急に引取べしとて朽綱一萬田に殿させ討殘したる一族宗徒を召具し武志加を立て十一

月十四日豊州の白杵迄引入にけり

蒲池宗雪忠死事付椽原伊東事

今度耳川の合戦に大友の一族紋葉の人々重代の士大將其數を盡して討死す先追手の大將吉弘鑑理齋藤鎮實其外田北鎮則白杵戸次萩野鎮信佐伯惟定小佐井吉岡山下清水蒲池此人々を先として足輕大將以下は數ふるに際限なし島津方に討取首數三千五百餘とぞ聞へける今度討死の内に蒲池近江守鑑盛入道宗雪は大友家重代の家人にも非ず筑後柳川の城主にて豊州幕下の國士なり其先祖を尋れば坂東の紀の黨宇都宮の後胤とぞ聞へし今度日州の陣に付て幕下の國衆催促に應じて出陣す宗雪は殊に筑後二十四人の旗頭也其身は老體にて遠陣叶ひ難しとて嫡子右衛門尉鎮連を指越ける處に鎮連肥後迄出陣したりしが落馬したりとて偽りて歸城す父宗雪大に怒をなし云甲斐なき者の所存哉君一日の恩下に百年の命を忘るゝは武士の本意とする處に非ずや況や多年主従の約をなし此事の大事に家を忘れ命を惜むべきやいで某出行んとて白髪頭の甲を載き手勢八百餘人引卒して耳川の眞先渡して身命を捨て戦しが其日は恙なくて次の日味方敗北すれども一足も不退合戦數刻を移して見れば手勢僅かに討なされ吉弘以下の

諸將も大方討れぬと見へしかば在家の一村有けるに走り入心靜に自害をぞしたりける其際迄相順ふ者共八十四人同く腹をぞ切たりける楠正成の湊川にて自害せられしも是には不過とぞ思知られける嫡子鎮連は老父を戰場に遣し居眠すると諸人に惡口せられしが翌年龍造寺が勢を筑後に引入隆信幕下とぞ成にける斯る所存を内に含んで父にも知せざりけるよと後にぞ思合せける亦同國の住人椽原と云ふ士耳川にて准分の働したりしが吉弘以下討死と聞てあつばれ武士の本意哉手の者も皆討せ一人逃延たればとていく程の命かはとて或る辻堂にかけ入腰に差たる笛を取出し音取一聲を心靜に吹ならし其後自害をしたりしは平生嗜ける故ならんと哀にも諱ふぞ聞へし又或落書に

奈田清田頭貳にさも似たり耳の當りを這ひ廻りつゝ

是は豊州にて宗徒と云はれし奈田清田の人々耳川の敗北に川原を這廻て逃たりと沙汰しける故なるべし斯て伊藤三位入道は頼む木の本に雨もる心地して重て斯くと云ふべきにも非れば京都の邊に知るよしありて牢浪の體ながら兎や角と世路を營み終に老病にて死にける也舍弟民部大輔學文を好み武藝にも達し器量有者として後に大閤秀吉公召出されて本領の内少々安堵してけり

龍造寺岩谷柑子嵩軍事并大友幕下諸士叛逆事

大友宗麟は先年龍造寺と和親せしかども如何にもして隆信を亡さんと時節を待て居たりしが日州耳川にて島津に負しより九國二島の旗下共一時に蜂起して各我意を振舞ける宗麟大さに憤激して此上は先強敵隆信を攻亡さんとぞ計りける鎮信は近年國中に威を振ひ近國を討夷けんと思設て居たりけるかゝる處に大友が催しを竊に傳へ聞よりも先ずる時は人を制するとは今此時なるべしとて幕下の兵卒を精り先づ江上又四郎家種に一萬餘騎を相副へ筑前に差向ふ戸次入道道雪肥前勢を入れ立じと諸勢を指麾して合ひ戦ふ去れども家種は勇氣大剛の驍將なれば士卒を勵まし氣を一致にし獅子奮迅して討て蒐る道雪が軍勢其死傷若干なりしかば叶わじとや思けん立花の城に引籠る大友宗麟は龍造寺の一族筑州に出る由を聞しかば白杵鎮富小佐井大和守鎮直を遣し敗軍の勢共を馳り集め鎮信を防んとて處々に手分をしたりける先づ高橋紹雲をして岩谷の城を守らしめ白杵小佐井には柑子が嵩の城を鎮めさせ其外宗徒の兵其城々を相守り守衛を調へ待居たり茲に筑前の住人重松對馬大信房と云者有しが初より隆信に心を通じ此時檄を肥前に飛して佐嘉の兵を筑の内野に引入ければ小川武藏守信景を兩先鋒とし

て神代曲淵等筑州に發向し本名村に陣を取る龍造寺和泉守長信同下總守信房松浦波多草野等を伴ひて怡志麻の郡に出張し筑紫秋月は各手勢を精り内野を差て押寄せ鍋島加賀守直茂は筑後の兵を召し具して岩川に屯し龍造寺安房守信周は西肥前の士卒を引ひて早良郡に馳向ふ二筑肥前の勢都合四萬三千餘騎隆信是を下知して岩谷柑子が嵩其外の郭等一向に打圍み息をもつかず攻懸る又筑紫秋月に命じて岩谷寶滿立花の通路を切り夜を日に繼て攻打ければ臼杵鎮富小佐井鎮直矢砲を飛し劔戟を振ひ討戦ふ龍造寺の先陣小川武藏守納富能登守江上又四郎并に其臣執行越前守を魁首拔群の勇將等十死に向て一生を顧みず大城戸を討破る納富能登守傷を蒙り家種が士西刑部丞同新助戦ひ死す空閑參河守は城中にかけ入て小佐井和泉守を生捕ける執行副島神代曲淵しころを傾け倏ち本丸に乘入り處々に火を放ちければ猛火盛んにもえ上る臼杵鎮富力つき直茂を頼みて城を降る隆信其城を修覆して自ら此城に居住せり怡志麻那珂糟谷の郡吏等各兵馬を卒して隆信が先手の兵鳥飼を追ひ回し博多を打順へ箱崎を討なびけ茲に馳せ彼處に廻つて働きければ豊勢散々に打負け命計をのがれ去る龍造寺の軍勢勝どきを揚げて徐々と歸陣す時に高橋紹雲岩屋の城に有けるが隆信柑子嵩の城を責め破り急に岩屋に押寄る其勢かくれなく城中の小勢にて寄手に對せん事卵を以て泰山を打に似たるべしとて

援兵を大友に乞ひけれども耳川の合戦に軍將數を盡して討死し生き残る輩は臆病の名を取て辛々命を助りし者共なれば援兵の用に立ず城勢次第に氣を落しあぐみ果てぞ居たりける斯りし處に龍造寺の猛勢雲霞の如く打圍みひしひしと責蒐る城中の者共も身命を顧みず爰を先途と打戦ふ死傷若干なりしかば城中彌戦ひ勞れ保ち兼て見へければ筑紫廣門あつかいを雙方に入れて筑前國を東西に分て肥前豊後の支配たるべしと相決む隆信是を許容して使ち兵を開き處々の城郭を修革して家臣を主將に居定め隆信は豊前の國を從へんとて其勢五萬餘騎六軍に相分ち豊前を指て發向す隆信の弟安房守信周先驅の將として豊前の國に打入高橋元種を味方と成して馬ヶ嶽の城に入り意氣快然とこそ見へにける是に於て豊前の侍長野三郎左衛門鑿辰城井常陸介鎮辰并に規矩田川京都仲津の郡士我も我もと參陣して隆信の幕下となりければ龍造寺信周を且く豊前に居へ置き國中の支配をさせ隆信は肥前に歸りけり是よりして大友旗下の諸將等意を異にし怨を同ふし各逆謀を企て城井千手長野上野原田杉麻生宗像を始として筑前豊前の國士大略は秋月筑紫に心を合す是のみならず肥後の國には宇土伯耆左衛門尉行直一名顯秀城越前守合志詫摩赤星隈部等己が城々に引籠り大友の下知に不順斯く國々噪動しければ逆心なき輩も己が居城に氣を遣ひ一人も豊府に參ぜざりければ何の國へ誰を討手に向ふべ

しとも見へず只忙然たる計にて兎角過ぎける程に天正六年も暮て立回る春にぞ成にける

卷之八 義統大友家督事

天正七年己卯正月十一日大友左衛門督義鎮入道宗麟去年日州の敗軍を思煩ひけるにや家督を嫡子豊後守義統に譲り其身は退休の體にぞ見へける門葉の人々參會して探題家に傳れる儀式先例を引て種々の作法有つれども舊冬耳川にて老功の諸將然るべき宗徒の侍多く亡びしかば世の末いかが無爲アツキナク思ふ人も多かりけり時しもあれ其日悦びの猿樂有ける半ばに見物の衆志賀道輝が若黨と警固の足輕共口論を仕出し雙方の荷擔數十人互に太刀を抜て切合ける程に猿樂も半に止にけり家督の始め不吉の表事とぞ見へし是れのみならず二月四日境町と云所より失火出來て高崎の城本丸迄焼失す此後終に高崎の城修復はなかりけり

筑紫秋月巖屋表出張事

天正七年正月始より秋月筑紫兩家の軍兵を催ふし岩屋表へ寄來るの由しきりに聞ゆ此岩屋城は吉弘左近大夫鑑理が二男主膳兵衛鎮種高橋の家を繼て元龜元年に此城を賜つて入城しける

筑紫領分と岩屋の麓は境目なれば雙方の侍共里々に住居しける輩は一家の如くに朝夕會合しけり折しも高橋が家臣中島右京が宅に筑紫が手の者帆足五郎兵衛入來し鶏の料理などして酒呑居ける處に岩屋より觸來れるは仔細有りて筑紫方と手切になり早々妻子をも引連れ登城すべしと有けり帆足も中島も不慮の思をなしあされ居たりしが五郎兵衛頓て座敷を立程に右京暫く打送り道すがら云ける扱も定めなき浮世哉今日より後は互に敵とならん事こそ薄情ウダマテけれ但明日にも出合事の有ならば御身が首は我等が取るべきぞと戯れける五郎兵衛別に答話も無てさればこそ取るか取らるゝかにて有るべしとて立別れけるが翌日先づ筑紫家より手切の爲め人數を出し岩屋表に打出る岩屋より駈合せける其中二人もこそ多きに彼帆足五郎兵衛に中島右京が行合けるこそ不思議なれさて雙方詞をかけ合せ莞爾と笑ていざよれ組んと云儘に引違へてむずと組けるがちから増りてや有けん右京上にぞ成にける然れ共兼ての因みなれば生捕にせんとて引立けるを續く味方是を見て右京組返されするよと心得て大實の鎧を右京が肩の上より指越して五郎兵衛が口の中へ突出ける是に依て無是非帆足が首を中島討てけり昨日雜談したりける事のがはざるこそ哀なれ是を手切の始として同月中旬の比秋月筑紫兩家の大軍岩屋表へ出張す今度は豊州に至て手切と云ひ亦は立花高橋初ての敵合なればとて大勢

にて向けれども取詰たる合戦はなくして互に挑み居たりしが敵方より近郷放火せしめ既に城下迄焼詰ける是を見て岩屋の城代屋山三助勢を拂て打て出で無二無三に切て驅る秋月筑紫勢大軍也と雖ども屋山が猛威に辟易して宰府邊迄引退く屋山が兵勝に乗て追懸敵兵數多討捕り猶も追行けるを三助下知をなして岩屋を差て引揚るまゝに太宰府天満宮の社壇に社家共不殘取籠りける間其縁を慕ひ在所の土民等まで社内もせばしと揉合ける本より秋月種實は軍令正しく政罰強くして社中には手指者もなかりけるに如何なる時節にや當りけん近隣の小屋より火出來て無程社壇に吹付しかば神殿回廊其外諸堂まで殘なく只一時に灰燼とぞ成にける社人堂坊憤怒して猛火の中へ飛入しが秋月家七代まで惡靈と成て祟り絶さんと惡口してこそ焼死けれ種實も社壇焼失の儀以ての外に無興して小屋より火を出せし者を穿鑿し火あぶりにこそしたりけれ天の各神の噴を可止ためとて筑前夜須の郡栗田村に天満宮を勸請して宮居を淨め社人を移し日々の神拜祭祀まで無懈怠を勤めさせける斯て秋月筑紫が勢も手切計りの働なれば先可打入とて引取ける此時岩屋の城代屋山三助今度の働無比類事なれば時に取ての褒美とて紹運より加領並に感狀ありけるとぞ

廣門出張付關内記働事

今度筑紫秋月等高橋紹運と手切の弓箭より以來は筑紫家よりも岩屋へ向城を付け秋月も境目に要害を拵へけり紹運も米の山龍が城其外所々に砦をかまへ人數を籠置けり或時廣門出馬して岩屋表軍の模様を見しかば屋山中務少輔城中の役所堅めなど申付け人數を集るところに關内記が長刀持鞘を迦して持出けるが何とかしたりけん實淵勘解由と云侍の頬さきに引かけ血の流るゝ事夥し勘解由以外の外に腹を立て既に大事に及びなんとす然共内記元來思も不寄事と云ひ殊に下人の過ちなれば是非堪忍し玉へと斷りを盡せ共更に承引せざりける處に内記が父善虎入道聞付て驅出唯今日の前の弓箭に御身も誰人も御用に可立身を無詮私事に彼是と口論候勘解由とも不存内記若輩に候へば對善虎ひらに堪忍候へと詞を盡し理を詰ければ漸々堪忍したりけり善虎悦で内記を誡め云けるはあれ程多き敵の首をば切らずして味方を損ずる事言語道斷の次第と高聲なり内記謹で申様御尤に候然共吾等の所存に候はず若輩が不慮の過にて候へば不及力と申す善虎聞て夫とても其方が連々不覺悟故也いまだ敵合にもならぬ先に早や長刀の鞘を迦させけるに依て也いつも敵合近くなつてより打物の鞘を迦し敵の首を

切候へと父の威光に任せて申しかば内記元來少しもたまたま氣立なれば折返して申様所詮親にてましませば何の申分も不入あゝの敵の首切得まじき内記と思召候やいで切てみせ申さんとして長刀を取て弓削平内が役所の山城戸を無理に破て駈出ししかば常々内記と云合せし若侍三十騎計内記討すな續けやとて喚て出既に敵合近くなりければ先鐵炮を打かくる敵も此いさゝひをみて少し其場を立退とぞみへにける其時内記長刀を水車に廻し眞先に進み何國までもとて追驅る所に筑紫が旗本より大返しの貝を吹立ければ人數を立返さんとす内記是をみて少も不騒幸橋と云ふ小さき橋を前に持芝居に脆づき近付敵を待懸たり敵も一同に驅らんとすれば路只一筋にて左右は然も沼なれば大勢馳合する事成難し十人計先立て爰を先途と攻戦ふ内記元來剛強無雙の兵が父に恥しめられ思切たる事なれば長刀の祕術を盡し向者の眞額細腰胴中唐竹割と云ふものに八方をかられて切廻る其の中に土肥半右衛門と云者生年十八歳なるが透間を伺ひ刀を以て内記が高股を膝の上まで割付たり内記が兄關平兵衛是を見て半右衛門が甲の鉢巻かけてしたゝかに切ければ其儘に引退く其外雙方手負討死數しれず内記は疵を事共せず猶も敵の大勢を遙に追拂ひ長刀を杖に突き閑々と引たりしは殊更勇々敷ぞ見へにける其比竹馬に鞭打童も關内記が幸橋の長刀打とて烈しき事に語合ける此時内記に手を負せたる土肥

半右衛門は後に江州澤山に於て石田治部少輔より三千石の領地を賜はりて侍大將と成しなりかくて筑紫方此勢にや恐れけん別に行もなく其儘にて馬を入にけり

隆信勢筑後入付白鳥合戦事

龍造寺家晴鍋島直茂を大將として一萬餘人寺井の渡りを越へて柳川の城に入れば筑後の國中大友味方の國士各々肥前勢と防戦す去に依て今年の春より龍造寺家晴鍋島直茂神代高木横岳以下の士大將共柳川に在城して田尻鎮種蒲池鑑廣三池鎮實等が領地に打出々々働さける程に彼等は小勢也隆信方は大敵也次第々々に攻付られ籠城にこそ成にけれ同年五月五日筑後山下の住人蒲池志摩守鑑廣が才覺を以て肥後の國關山の城主天津山河内守同國和仁の住人和仁丹波守を語らひ兩家の勢を筑後の國松延と云處迄出張せさせける筑後勢には田尻蒲池三池豊持豊鏡黒木齋藤大鳥井等兼て相圖を定め人數を出し瀬高の庄に陳を屯す柳川よりも龍造寺勢各々打出る白鳥と云ふ所にて終日に攻戦ふ肥前勢は一致の軍兵也筑後方は諸方の集勢なれば合戦しどろにてひた引には引共一步も先へ進者なかりしかば肥前勢に乗て追詰々々散々に攻たりける蒲池志摩守是を見て大津山和仁が陣に使を立て申けるは軍の胴勢と云事は味方の後

を黒めて先手を働せ戦勞したる時は代つて助けんが爲也味方は程に崩れて候に各々にも一鎧突れてこそ是迄出陣の甲斐とも申べけれ但鑑廣に於ては今日の軍に負け瀬高川を東に向つては渡るまじさと兼て存じ究めて候と告たりければ肥後勢何れも尤と感じて大津山和仁二千餘人川を渡り助け驅かる肥前勢も終日の合戦に入馬疲れたる上亦肥後勢に向て二度の鎧難叶とや思けん遠負に引て行處に田尻鑑種嫡子鎮種二男親種鷹尾の城より白鳥の邊迄張り出肥前勢を横合に遮留んとす龍造寺勢是を見て始は足並早く退けるが田尻が横合の勢を見ると如何にも靜かに引て通り又先勢大略行過ぎて後陣白鳥を過る時一度に鯨波を噛と揚げ跡勢より返して突てかかる田尻父子家人には小柳西原中尾野村等七八百人命も不惜入亂て攻戰ふ此時筑後方諸手一同に懸りたらば肥前一踏も怵るまじさに諸方牒合せざれば何事もそろはず田尻一手は小勢なれば力なく大勢にもり返され白鳥と高尾との間に家人若干討れてけり日既に暮ければ兩陣互に引入ける

豊後勢秋月筑紫挑戰事

秋月種實は九州に於て弓箭を取て名譽を得たり其上豊前の國士多く手に屬せしかば勢に不足

もなかりしか共戸次鑑連高橋紹運に恐をなし思の儘に他所へ働出る事を得ず其比上松の城に麻生民部丞と云者を大友より入置たりしが彼の民部秋月に語らばれ同國宗像彈正原田鑑尙と手合して敵の色をぞ立にける天正七年の夏の頃迄は秋月筑紫計にて豊前筑前の郡主誰々同心したると云事大友にもいまだ慥には知ざりけり依て先づ秋月を攻むべき爲め且は軍勢催促の爲とて志賀河内入道道輝豊後を立て筑前岩屋に參着す斯りける處に秋月が人數石坂に出ると聞へければ志賀道輝小田部民部大鶴式部彼是二千餘の勢にて石坂に押向ふ宗像麻生原田が方へも出陣すべき由道輝より催促す彼等三人は兼て秋月と一味成ければ三方同時に起合せ志賀小田部大鶴か後を遮んとす志賀道輝を始として各々案に違ふ事なれば急ぎ勢を引入れんとしけれ共早や敵後ろの道を塞ぎければ前後の敵に圍まれ難儀大方ならざる處に高橋紹運岩屋より打て出て石栗の巔にて秋月と散々に攻戰ふ戸次鑑連は立花より驅付宗像原田麻生が勢を方方へ追散らす秋月勢も紹運に駆負て彌須郡に引入けり此時に宗像麻生原田が事分明に知れければ今は秋月を急に攻る事成がたし先づ麻生原田を没倒せよとて志賀は岩戸に陣を取り紹運小田部大鶴各々用意をぞしたりける斯りける處に筑紫廣門打て出小田部民部少輔が荒平の城大鶴式部大輔が鸞が嶽の城に至て働ける秋月も又出張すと聞へしかば紹運三笠郡にて對陣し

日々に攻合たり齋藤宗像が勢高取の城を攻落さんとす城主毛利鎮實は大友方なれば戸次鑑連鎮實を助けて寄手を追拂ふかく方方の軍なれば汗馬の足ひやす間もなく士卒の休ふべき隙もなかりけり

鑑連與宗像等合戦付麻生逢害事

天正七年八月中旬宗像麻生原田杉など言合て筑前箱崎表に働く立花より鑑連軍兵を出し兩日二度の攻合あり鑑連敵の人数を咬留置て從弟の戸次右馬助鎮榮國士に薦野三河守兩人に三千餘の勢を相添敵方に知れざる様に多々良川を夜の間に越させ麻生が居城上松に押寄る上松には麻生出陣の留守なれば抄々敷兵もなく女童老士の外防べき者なかりしかば戸次薦野即時に城中へ亂入手々に火を放て焼拂ふ射伏切伏ける程に老若男女途方に迷ひ呼叫事限なし戸次薦野は上松を即時に煙となし民部が妻子を生捕て立花に引來る去程に宗像麻生原田は遙に上松の煙を見て箱崎を引拂ひ早々上松に駈付けれども行程六里半の山道を過る間なれば心計は飛行けども爲方更に無りけり扱も麻生力なく宗像と共に許斐の城に籠けるが妻子を取られ心憂事に思しかば不義を御赦し給はゞ降參仕り無二の忠を盡すべしと様々詭言をぞ申ける鑑連

返事には左有に於ては此方より人数を出す時宗像秋月出陣すべし其方も兵を出すにて有べし其時可然郎等を殘置さ許斐の城に火を懸させ裏切せよと約しければ麻生降參の上は心得たりと領掌す此事深く隠す間宗像夢にも知ざりしに麻生が運や盡たりけん九月上旬の事なるに此使夜半に忍て歸りしが許斐近邊にて山賊に逢て切殺されたり夜明て宗像が家人此の死骸を見付あな不便やとて能見れば麻生が譜代の士也偕懷中を見れば念比に封じたる文あり披て見れば戸次道雪書簡にて然かも返忠の志神妙也先非を悔ひ當家隨身に於ては大友の勘氣をも申宥むべし然ば何日に此方出陣の砌裏切りの趣其期を失すべからず民部少輔殿へとぞ書たり家人共急ぎ此文を宗像に見す彈正大きに驚てさらば麻生を討やとてひし／＼と押懸る麻生も同じ城中に居ければ頓て此事を聞き爰に有ては叶ふまじとて主從二三十人城中を走り出立花指して落て行く宗像は遁さじと追驅たり麻生は徒歩也追手は馬上なり終に光行と云ふ所にて追攻られ麻生討れにけり抑此麻生は尊氏公の時より筑前の麻生原田とて世に知られたる武家なりしが立花と光行村と其間三里なり今少し走延たらば助るべきものを立花にも此事會て知らざれば出て救ふ人もなく闇々と討れ遂に家を亡ぼしけるぞ憐れ

鑑連紹運誅原田事

天正七年九月十八日鑑連紹運兩家出張して宗像原田が城の近邊迄焼働く去共秋月は豊後勢田河に出ると聞て豊前へ勢を遣しければ筑前表には働かず原田鑑尙は如何思ひけん返忠すべき由志賀道輝に云遣す道輝さらば急ぎ城を渡すべしと返事しければ原田城を開てぞ道輝に渡しける同年十月上旬秋月討手として豊後勢各々出陣すと聞へしかば道輝も筑前岩戸を立て豊前に越ける此折から原田鑑尙己が居城に歸入の事を訴訟す道輝より鑑連紹運へも此事如何可有かと相談すいや／＼原田は宗麟一代中に敵と成事既に二三箇度なり此後とても彼がつら魂心を宥し難し慈悲も時にこそよれ當時是程の亂世に表裡の奴原一人なりとも討て捨るに不可過今召込たるこそ幸なれ誅伐せらるべしとて鑑尙遂に切れにけり

隆信勢筑後表度々出張事

今年龍造寺隆信度々筑後表に働出ける間豊州幕下の國土肥前勢を防しか共大友より加勢とも無りしかば隆信多勢を以て國中を思ふ様に働ける程に黒本草野江上豊持何も隆信に隨身す

去共高良山の座主良寛僧都田尻鑑種山下の城主蒲池鑑廣各々居城に引籠り曾て降參せざりけり隆信勢押寄れば城に引入て堅固に持支へ引取れば亦打て出る隆信も彼等を急に攻落さん事は案の内なれ共味方若干亡ぶべし若又豊州より大勢にて後詰をせば味方前後を敵に圍まれて合戦難儀なるべし唯城中に追込置て兵糧を盡させよとて指て急には攻ずして國中の作毛共隆信方へ悉く押さへ取にけり

高橋秋月挑戰之事

天正七年の十月龍造寺隆信自身は肥前に有ながら執行越前守太田兵衛尉を大將として六千餘人を筑前へ差向けて岩戸鷲ヶ嶽荒平に至て働せける三箇所の城主は皆豊州幕下なれば隆信勢と度々挑戰ひける筑紫廣門肥前勢と一同に岩戸表に打出れば大友方の高橋紹運小田部大鶴と心を合せ岩屋の城より打て出づ是を見て隆信勢如何思ひけんやがて肥前へ引入にけり去共筑紫廣門は踏留て十月下旬より十一月十六日迄日々夜々に攻合たり筑紫が數日の合戦意得ずと諸人不審しける處に秋月と内通し紹運を數日つり留め岩屋の留主に行をせんとの謀略とは後にぞ思合せける同十七日の暮方に紹運留主居屋山中務より注進しけるは秋月が勢四千餘に

て宰府表へ唯今寄來候急ぎ御歸城候へとぞ告たりける紹運是を聞て速に岩屋表を引取ける筑紫が勢五千計にて屬來れば紹運も輒く人數を揚る事成難くみへしに成富左衛門と云者馬引返し申けるはその儘にて御透し候へ爰計は我々殘留て屬來る敵を追返し候べし不叶は討死たるべし命の有ん程は敵を後へは通すまじと云捨て驅出す其氣色誠に思切たる體亦なき剛の者とぞみへにける土岐大隅守萩尾麟可など云者共五十餘人成富を討せじと續て競懸り筑紫勢を半町計追返す此間に紹運は岩屋を差て引取りぬ案の如く秋月勢五千計にて御苗嶽の麓迄詰寄たり紹運是をみて様な有らせど唯突て驅れと下知す高橋越前守福田民部を始めとして各々馬より下立て千餘人の勢只一隊に成て眞黒に突てかかる岩屋の城より屋山中務五百餘人を前後に立て笠より下ひて切てかゝる秋月が勢矢庭に百餘人まで討れしかば岩屋を乗取るべき謀略も相違して種實兄弟彌須郡にぞ引入けり立花より戸次鑑連野田邊まで出陣して有しが岩屋表合戦の由を聞て一騎駈に駈來る筑紫廣門多勢にて成富土岐萩尾等が僅の勢の中に取込散々に切結處に鑑連谷尾村の西に打出關を噓と揚て押蒐る廣門是を見て一支もせず筋違に中田上原を馳通り肥前基肆郡に引入けり鑑連駈付ずば成富なんどは擒たるべきに危かりける事共也

飽田合戦事

天正七年秋の比より肥後國中の郡主等大友に背ける中にも城の越前守親賢と云者始は山鹿郡城村と云所に居城したりしが父親冬が時に至て菊池政隆を荷擔し赤星隈部と合戦し永正六年に彼城を追落されしかば舅の鹿子木寂心を頼み隈本城に候ける寂心幸に長子なりしかば家を附屬して其身は心を風月によせ世を詩歌に謝して一向遁世者とぞ成にける越前守隈本城主となりて年月を歴けるが宇土託摩とは領地界なれば互に爭奪絶へざりけり然に大友の武威日々に衰へ行事を量りけるにや宇土八代隈庄など一味して内々は島津に心を寄けるとぞ又大津山小代隈部内古賀などは何れも縁座なりけるが云合せて龍造寺が手に従ひけるとかや御船の城主甲斐宗運ばかり猶も大友方にて有けりかく一國三方に鼎立して界目の争ひ互の遺恨家を立威を募らんと日々戰爭止事なし此比の世の習とは云ながら昨日まで親しかりし朋友も今朝は敵と成り累代恩を蒙りし主人も一旦に引分れ親は子を疑ひ婿は舅を欺く淺間敷かりし事共なり斯りしかば大友宗麟より甲斐宗運が方へ肥後取々に騒動し島津龍造寺内通する由以外の事共なり急ぎ味方を催し二心の者共を討從ふべし功の淺深によつて恩地を加ふべき由申越

ければ宗運元より無二の大友方なればやがて阿蘇が家人田代木山片志田などを語ひ天正八年三月四日隈本の城へ押寄んと託摩原に陣取てぞ居たりける城も此由を聞て宇土隈庄へ加勢を乞ひ處々の手當を今やくと待居たり其身は城に有りながら一族出田讃岐守入道一要に八百餘人を相添へ城の表府の町はづれに陣をぞ張らせける伯耆左兵衛尉顯孝は千五百計を卒し城が後詰せんとして砥川原半田表へ出張す折しも其夜は春雨しきりに降て目さすもしらぬ闇夜なれば軍は空晴てこそと油断し竹筒の酒など取出し酩酊に及て枕を並べ前後もしらず臥居たりけるを宗運帷幄の中にて遙に察し嫡子親秀を召しいざ打立や者共不覺人共の睡を驚し慰まんと下知すれば總勢一丸めにして馬人枚を含んで駈出す其間五十餘町を只一時に押付まだしのゝめの曉に白川且過の瀬を渡り馬物具を堅め旌旗を正しくし先づ嫡子親秀八千五百人を卒して出田が陣へ打向ふ宗運五千餘人を三隊にし一手は伊津野山城守田代紀伊守を將として先驅たり一手は片志田左衛門光永攝津入道を將として後乗とす宗運二千人中軍に備へ金鼓を鳴らし一同に鯨波の音をぞ揚たりける其聲山に震ひ川に響き坤軸も頽れ天關も摧るばかりに夥し伯耆も出田も思寄ざることなればなじかは驚かざるべき東西にくれ前後に迷ひ馬にはのれども物具せず胃は着つれども太刀帶かず赤膚にて逃るもあり大童にて出るもあり寄手は得

たり賢し罅間あらせなと抜連て亂入切伏突倒し散々にこそ闘ひければ城方の者一たまりも堪へず蜘蛛の子の如く散々に遁んとするを追詰め責詰め一人も餘さじと働くほどに河水に追はめられ岩岸に轉び落て死亡する者數しらず見苦敷かりし有様なり或は城に籠るもあり或は宇土を指して落つるもあり四角八方に逃散す宗運は凱歌三度作らせはや引取や人々勝て胃の緒をしめよと足早に本の陣へぞ飯りける

託摩原合戦事

然るに城越前守親賢は宗運が一時の謀に落ち味方多く討せけるこそ安からね此方より逆寄して勝負を一戦に決せんと四月十一日出田讃岐入道に三千餘人を指添へ先手とし其身は一族與力二千餘人引具し御舟を差て發向す宗運此由を聞て二千餘の勢を引卒し託摩原に扣へて待居たり其日合志伊勢守親爲も城方にて宗運が後より寄すると沙汰ありしが宗運兼て用意やしたりけん阿蘇山にて獵取りし狼を三匹迄生畜しを合志勢の來らんずる道筋に結付置せける合志大勢を引來しに道の傍に狼の啼吠ぶを聞て其儘馬を引廻し人數をも引入けり後に傳聞すれば親爲が父獵に出狼を殺せしが其日より病付て終に死ければ狼は不吉の物とぞ覺へける惣じて

此親爲は物忌多き者にて假染に出るにも曆を見方角を占ひける一生北に向て坐せず北に向行路は頭を脇へ向けるとぞ簡程の者戦場の門出に三匹の狼の吼ければ何にかは忌まざるべき今日の軍抄々しからじとて引返しけるとなりかゝる事までも思廻らせし宗運が智慮の程こそ淺からぬ去程に託摩原にて城と宗運と日の中に五度の鍵合せありしが城は多勢なれば宗運負色に見へしかども宗運子供一人に貳百の勢を進退させ三人の子供三備に立て我身は千五百計の勢を七手に分け自ら太鼓を以て引廻す一陣破るれば二陣續き前隊崩るれば後列代る聚散離合の約束違はず蒐れどもまばらならず引共遠引せず終日の合戦多勢に糅立られけれども陣場を踏留てこそ居たりけれ城方が兵戦疲れぬ日も黄昏に成ぬれば勝負は又こそ決せんとして悉く引拂ひ面々が居城へぞ飯りける

肥筑諸士背大友事

筑前表には秋月種實筑紫廣門寶満岩屋の城に數度取懸るのみならず隣國遠境までを驅催し大友の幕下を離れ疎む國士共多成て爰彼こに騒動す豊前には城井長野大江齋藤千手筑前には宗像麻生杉原田皆秋月に同心し中國の毛利を語らひ薩州の島津に手入をし己が家々を立んとこ

を謀りけれ近年大友の政道理に背き法に違ひしかば諸人の恨國家の傾く端なりと心奪ものは預め嘆き思ひしかども武威の盛なりし程は其色も見へざりしに日州敗軍の後は旗下の國々悉く下知に隨はず我意をのみ振舞けり去聞甲斐宗運豊府へ申入けるは肥後國中の者共御下知を不守面々に爭奪し弓箭止む時なし阿蘇益城に於ては敵に手を指させ候はず國中に打出んとし候へば惡黨等一揆して多勢募合候あはれ三老七家の内一兩人も遣はされ候はゞ宗運先手を仕候べし豊州の御勢に對揚すべき者は覺候はず質を出し降を乞か城を開き退かより外は候はじ只今の如くならば肥後は不殘阿蘇の奥まで逆徒の爲に奪はれ候べしと再三申入しかども耳川の軍に懲りて他國發向の儀は思ひも寄ざりけり抑此宗運と云者は先祖甲斐守武本とて菊池の一族なりしが兄隆盛早世して其子時隆と家督爭論に依て終に關東に留り甲州に在りしが四代重村に至て將軍尊氏公の命を受け甲斐氏に改め肥後守に成て下國せしかども菊池武重に追出され薩摩に入り日向に赴て土持榮綱に屬して年代を送ける永正の比阿蘇大宮司惟豊日向へ没落の事有けるに宗運が父甲斐大和守親宜に邂逅し父子が計略にて再び阿蘇に還住しぬ是より君臣の約をなし阿蘇の南郷を領し住けるが大友と阿蘇は縁座なるゆゑに此勳勞を賞し又は肥後一國のをさへにもせんとして益城郡御舟城四百五十町を加恩しけるなりその後親宜卒し

て嫡子民部大輔親直家を継ぎ入道して宗運と云けるが勇智相兼て當時の名將なりし故彼が一
代は薩摩勢豊後へ入事を得ざりけり

大鶴小田部戦死落城事

筑前の國早良の郡荒平の城主小田部式部少輔統房那珂郡鷲嶽の城主大鶴彈正忠鎮正入道宗秋
は大友味方として數年籠城したりけるが筑紫廣門龍造寺など度々働ける間天正七年の夏秋
に至り兵糧乏しくなり已に籠城難儀に及ぶ由立花の城に訴へければ戸次入道雪聞て大友方
の城二箇所迄落されし事を本意なく思ひ是を救はんそのために糧米二百餘石を小荷駄に負せ
て九月八日の未明に小野和泉守を相添へ早良郡にぞ遣しける龍造寺方より守りたる内野の城
に此事聞へて小田常陸介政光執行越前守枝吉長門守以下究竟の兵三百餘人朝霧の裏に内野を
出て脇山邊に待受けて此兵糧を奪はんとぞしたりける小田部大鶴兩將共に城を拂て突て出て
小野和泉守と一手に成て互に刃を交へ命を捨て搏戦ふ大鶴宗秋頻に突て廻りけるが肥前方古
賀右衛門尉と云者に討れけるこそ無慚なれ右衛門尉が嫡子古賀權右衛門と云者は大鶴が臣半
田能登守を組て伏せ終に其頸を取り父子一時に功を顯はす其外宗秋が一族土生宗觀をば枝吉

清兵衛鎧付して青木九郎右衛門走り寄て頸を打其外青柳太郎兵衛重松四右衛門江上左近允小
柳清右衛門高木式部左衛門今村右衛門佐光安三兵衛等分取高名取々にて残る人數を追散す肥
前方にも光安刑部同彦四郎を初として手負死人多かりけり爰に執行越前守人數を指揮して云
けるは小田部彼こに控へたり戦に時を移しなば必定立花の城より道雪後詰に来るべし戦勞れ
たる人數にて新手に向て戦ん事無覺束遲滯するな者共とて鐵炮少々討かけつゝ即ち人數を
引上げる如按道雪は數百人を引牽し馬に鞭打て來りしかども肥前勢は早や内野の城に繰入
れければ手を空して歸りけり此時隆信は筑後國山下に左陣して執行越前が送れる首共實檢し
て功士の勞を賞しけり扱又小田部入道承宅は今度の鬱憤止まざれども小勢なれば力なく同國
曲淵河内守房助は承宅が一族なりしが近年隆信と一味せしかば先づ房助を招き寄せ利害を説
て共に肥前に打て入今度の耻を雪んと謀を回らし様々にすかしけれども房助曾て肯はず依
之承宅甚だ忿をなし房助が館に打入れと已に人數を出しける房助も某機氣を兼て察せしかば
承宅が來る道際に人數を伏せ置き不意に起つて安々と討取り首を隆信に獻じける是より荒平
鷲嶽の兩城隆信が手に入て勢隣國に揮ひけるとかや

卷之九 豊前田河合戦之事

天正八年二月上旬豊府より田北紹鐵朽綱宗歴戸次鎮運一萬田宗慶等を大将として一萬餘人豊前中津に打出頓て同國田河に陣を移す是は城井長野千手浦上等秋月に同心し當國の領地旗下の居城をも妨をなすに依て遠境の儀は暫く指置く共豊前は豊府近隣と云亦は筑前味方の城々通路の障と云旁以穩便なるべからず如何様城廓の二三ヶ所も乗取て一鹽付べしとの儀定也秋月は此事を聞て方々の味方と牒し合せ敵の様子を聞居たり豊州の先手志賀道輝は舊冬筑前より當國に移て待居たる事なれば今度出陣の勢と一つに成合以上五頭一萬二千餘の勢を以て豊前京都の郡長野が構し寶森の城に打寄一日一夜に乘崩し三百餘人切殺同月十八日に楮藤に陣を取半は秋月勢を押へ半は春の城を攻んとぞ備へける其夜は雨夥敷降て餘寒殊に甚しかりければ諸卒備屋の中に焼火などして各々具足を脱竹筒の酒など暖て旅軍の疲を休め夜更ままに居眠し或は肱を枕として前後も不知伏たりける處に秋月種實二月十八日に古所山を下り千手と云處迄押來る風雨頻に降りければ是も其夜は千手に陣取て居たりしが種實かしこき者なれば夜半計に宿老の者共呼集め霄より晴間なき風雨なれば旅軍の事にては有草臥て睡居べ

し油斷の處に不意に押驅てこそ利は有べけれいざ打立んと云ければ何も皆尤と感じて人馬の食事を関にしたゝめ橋山江利を先手として都合六千餘人目口も明ぬ風雨の夜に楮藤にぞ寄りける曉方に成しかば時分は能どとて東西より鯨波を嚙とぞ揚たりける案の如く敵陣には思も不寄ける處に鯨波の音に睡を覺し驚駭事不斜秋月先手の大将より敵は油斷したるぞ唯切驅れと云程こそあれ會釋もなく切て入しかば豊州の大軍一戰の行もなく我先々と遁迷ふ名を惜む若者義を思ふ勇士五騎三騎所々に返し合せ防戦といへども猛勢の崩立たる事なれば押隔られて討るゝ者若干也夜も次第に明ければ豊州勢名人々の旗の紋明にして東を差て引を見つて橋山民部坂田市之亟江利内藏助吉田上野芥田衛藤など云種實が下に名を得たる士共遁さじと追懸二里程追討にこそしたりけれ豊後勢は第一の小荷駄を悉く敵に取れ兵具も多是能々周章たりと見へて乗鞍置たる馬を其儘置徒にて逃たりと見る陣屋も有り裸馬に乗て逃たると見へて鞍を捨置たる所も有夜深に驅し事なればいまだ今朝の食事もせず敵に追立られ息を切て七里の行程を逃延しかば各々勞果飢寒て辛々中津の城に引入ける見苦しかりし有様なり秋月方に打取首數八百六十餘田河の路に切懸てぞ歸ける此後は秋月彌威を振ひしかば筑前豊前の間にて六七郡押領し取出の小城七ヶ所迄ぞ構へける

日州淺岡軍事

大友方には去年の春より日向表は島津の押へ大事の持口なればとて志賀親安朽綱鑑康田北佐伯を遣し置く去年冬の比より島津圖書助大將にて度々日向表に働ける間豊後より兒湯諸懸の兩城に加勢を入所々取出を構ける然れば今年天正八年三月上旬より島津圖書助新納武藏守八千の人数を同國宮崎に遣す豊後勢是を聞て城々より打て出兒湯に出陣して島津と對陣とぞ見へにける豊州より利光越前入道魚を使として云けるは今度島津勢宮崎に出張の由相構て味方より進て合戦を致すべからず各々城々に引籠り恐るる振を致すならば敵方人数を分て働きの行をなすべし臼杵郡までたぶくと引入よ其時義統馬を出手強く合戦をして先年の耻を雪めんと云遣す爰に淺岡の城として少き搔上あり戸次山城守鎮秀入道宗榮が籠たる城也去頃豊後より加番の爲義統近習の足輕大將足達左衛門尉を指遣す然るに宗榮は志賀親安と以の外の不快也親安今度の大將なれば宗榮親安が手に屬せん事を無念に思ひ兒湯には不行して其儘淺岡にぞ居たりける乍去足達は加番なれば兒湯に行れよと申す左衛門云けるは其儀に非ず宗榮當城の大將我は與力に付置るゝ上は宗榮の向ひ玉はんずる處には水火の中なり共參ずべし留玉は

ば我も留るべし宗榮に随べき身也後日に屋形より如何様の折檻もあれ夫とても宗榮と同罪にこそ逢可申とて同く城を不出して居たりける彼淺岡の城は兒湯の郷より三里南にて島津の陣場より一里後なり圖書熟々思ふに淺岡城を其儘にて置たらば後の通路の煩ひなるべし爰を引て先淺岡を攻取べし其時豊後勢後詰をせば返して平場の一戦を遂べきなりとて八千の勢を引揚後の山を越兒湯の川上を渡り淺岡山の麓に押寄る戸以宗榮足達左衛門兼て心得たる事なれば城中靜返て居たり此城は僅四五町の丸山を續の尾崎を掘切て塀一重塗たる許にて城の構堅固ならずとはいへども四方の坂急にして輒く登る事を得難し依て四方を打圍鬮を揚て攻登る然れ共城中より鐵砲の一つも打出ず敵に二重の堀切を越させ矢懸能く近付て戸次足達持口を走廻りすは時分は能ぞうてやと下知して鐵砲をつるべ立て放さする竹葦の如く立双たる勢なれば浮矢の一つもあらばこそ表に進む雜兵ひたくと打倒さる詰かへ放つ鐵砲にさしもの島津勢打しらまされて颯と崩て麓に勢をまとい寄手も此城容易に攻取がたし其上兒湯より後詰やられ暫く敵の様子を見よとて中の郷杉浦二陣をぞ易にける戸次足達僅四五百の勢を以て八千餘の大敵を防返す事無比類手柄なりと諸入申あえりさ依て義統より感狀を賜りけり

兒湯合戦事

淺岡山の軍は天正八年四月九日の事也彼城と豊後勢陣取の兒湯とは三里に足ぬ所なれば鐵砲の音山彦に答て手に取様にぞ聞へける左無とも程近き味方の城を攻らるゝ事しらざるには非じ親安こそ不快ならめ自餘の四頭其の勢も七八千に及ぶ事なれば遅々すべき處に非ず去共親安は今度日州表の總大將屋形の名代なればとて各々遠慮して後詰せぬこそ本意なけれ淺岡の城を支たる事なれば早速豊後兒湯より付來るに於ては島津勢必定大崩なるべきを左も無て餘處に見て止まるは是非なき事にぞ有ける其後島津勢は杉浦に陣を取城をも不攻兒湯にも不驅大友勢も淺岡に加勢をも不入杉浦にも不向只惘然として日數を送りたる許也同四月十七日義統より日州在陣の士大將へ使を馳て今度其表の事に付て利光を遣し申含る處の儀を不用各々城を出兒湯に於て對陣し其上淺岡の城小勢にて然も淺間敷要害なるに大勢取詰ける處に後詰をだにせず第一謀計を不知第二臆病の至り言語道斷なりと有ければ親安以下相談し此旨偏に面々のをくれなり何様一合戦して豊州への面目に備へずば其聞へ不可然とて同四月廿五日志賀朽綱田北佐伯木村五頭國勢を加て一萬餘人中の郷にぞ押寄ける島津方は待軍大友方は

寄戦なれば島津が勢備をしめて鐵砲を打立敵破て驅所をば鎗武者を一面に立突退け引ば鐵砲を放懸備をくりかへく防戦しける程に豊後勢懸る度ごと追卷られ一備も破りえず本陣兒湯の川下に引返る斯りしかば淺岡の城も小勢にてしかも兵糧運送の便を失ひしかば始終持支がたしとて宗桀足達城を開て出ければ總勢も何となく臼杵に引入ける此後は薩州強大なる上に大隅より人數を招寄島津圖書其年の十月迄兒湯に在陣しける程に日向の國中え大友より手を指事もあたはず那河宮崎諸懸皆島津の手にぞ入にける

田原紹忍調肥後事

去年の春より肥後の國中所々の取合幾度と云數を不知阿蘇の邊に甲斐宗運只一人大友味方として有けるが豊州より人數を向られずば薩摩より阿蘇をも攻傾け豊州へも打入なん宗運かくて有ん内に早く御勢を越し候べし老衰と申すとも某甲先陣仕り大軍を引廻さば又々御旗下に屬せん事案の内に候只居ながら敗亡を見ん事も口惜く候と頻に申遣しければ先こしらへ見べしとて田原紹忍を肥後國田原と云處迄差越國中の郡主前々の如く幕下に參られよとの扱有三月より六月迄滞留して種々こしらへけれども郡主給人等一人も點頭せず剩國士十餘頭起合紹

忍を討べき行の由聞へければ田原は急ぎ豊後へ歸りけり其比豊府に武士の俵あつかひ似合ねば耻かき原を逃てこそゆけと秀句の狂歌をぞ立たりける

筑後之郡主等乞大友加勢事

同年七月筑後の國田尻鑑種蒲池鑑度三池鎮實等が方より豊府に使節を立隆信が勢數度出張し防戰頻繁なるに依り今は我々人數も薄く兵糧も乏く候へば籠城難叶覺へ候是非御加勢を給り候へ左無に於ては下城の外は無之候とぞ告たりける大友家老の面々寄合如何すべきと評議す近年旗下の國々騷亂に依て旗本の諸士も所々の知行に取離れ衰微困窮して侍をも扶持し得ず馬をだに持ぬ輩多ければ豊府の勢も年々に減少す今慥に當手の國としては豊後の外筑前の國端を添て漸一國半許也何も争の國なれば彼此の城々左番境目に人數多費たり當年に至りて日向表も敵案に屬し肥後の國も手を除されたり筑前の内立花に道雪岩屋に紹運領内堅固に取鎮め敵を縮て有と雖龍造寺秋月筑紫の大敵を三方に受て數度の合戰有けれども一度の加勢もなし此方より豊前表に人數を出せば道雪紹運は境目迄も出張す彼兩人に對してだに御手に不及筑後の士は一族紋葉にも非ず當時幕下と云許なり加勢有べき處にさへ向へられぬ勢を遣すべき

やと云中にも志賀道輝申けるは幕下の衆を見繼るゝ事一族紋葉を差置ても專一にすべき事探題職の前なれ共當時方々の押へに御勢大半減少す若筑後に勢を遣さるべくば一萬の内にては難成隆信自身出る程ならば二萬五千は有べし夫に僅五千三千人數を遣し邪心の事仕出し面目を失んよりは唯捨置んより外は有まじと申しかば各々此議に同じて使を空しく歸しけり是に依て筑後衆大友には捨られつ隆信には強く攻め立られ難儀爰に究りぬ其比薩州勢肥後水原に出る由沙汰せり天草郡志岐民部丞天草伊豆守木山彈正忠是等三人は去年より島津に屬したりと聞へたりさらば此方も島津を頼より外は有まじと田尻蒲池三池三人云合て薩州に使を立て向後旗下に可參候條加勢を給り候へと申遣しければ島津安き事に受合て薩州甌島の住人甌相馬允右の志岐木山天草を差添て筑後の加勢に差向る比人々と何も大船小船十餘艘に兵糧積て各々肥後の内三角の泊戸迄押出たり

隆信筑後出張事

隆信は豊州勢筑後に出る程ならば何様一合戰と兼て用意しけれ共大友より筑後五郡を捨る上は其儀に不及今は一向我手に入なんとと思ひける處に思の外引替て遠島津を頼む由聞へしかば

扱は忽緒にすべからず急に捫崩せやとて天正八年九月上旬自身筑後へ發向し住吉と云所に陣を取士大將共を方々へ指遣し城々を攻させける西久留米の城郭には隆信ぞ向ける三萬計の勢なれば十重廿重に取巻半時の内に乗破り男女四五百人切殺し頓て高良山に取懸りける座主良寛法印迎も叶はじと思ひ久留米表を一圓に隆信が手に渡し寺内先規の領知計を乞請て降人にぞ成にける山下の城には神代熊代高木馬場四頭に三千餘の勢を副て差遣す此勢山下より半里計西に暫く陣屋を打て逗留し後れつる人數を待調へ四五日を経て山下に押寄たり蒲池鑑廣五百餘人にて楯籠り身命を捨て防戦す竊に案内者を少々出して敵の陣屋に火を懸させける肥前勢は城の麓に押詰たれば件の小屋には守の者ども少かりければ鑑廣が家人走り廻て一々に焼立しかば黒烟天に覆て夥し肥前勢後を顧てこは如何に敵後に廻りたるが田尻三池より後詰ばし遣したるかと云程こそあれひたひしめきに聞て堪へ得ず大塚邊迄引退たり去共鑑廣小勢なれば打出て追打にも及ず只暫時の謀事とぞ見へし同國田尻鑑種は隆信當年は筑後を平均に治取べしとて多勢を催し自身出張すと兼てより聞及しかば此間構置たる津留濱田堀切江浦四ヶ所の搔揚を引拂本城鷹尾に籠り島津の合力を今や〜と待居たり此城の寄手には龍造寺家晴多久與兵衛を大將にて八千餘の勢を差向け二十餘日ぞ攻たりける龍造寺筑後の國に望て働

く事既に三年不思議に今迄も堪へたり去共今度は城中運を開がたくぞ見へたりける

大島船軍事

斯りける處に薩州より田尻合力として軍兵糧米等舟にて差越由隆信方にも聞へければ島津勢を入立なば由々敷大事なるべしこなたよりも兵船を出せとて田澤大隅守を船大將として三十餘艘に取のりて九月十日高尾の南海に押出す其日島津の加勢舟も肥後の三角を出高尾を差て馳けるが風惡敷して漸日暮方に同國大島の浦にかゝりける明れば十一日田澤大隅守早朝より艤して蘭槳薄を截彩旗日に耀し舳艫を並べ櫓聲を調へて大島指て漕出る島津方志岐甌も舟押出し行ほどに沖中は元より大船小船俱に糧米を積ければ船足深くして進退自在ならず田澤が船は偏に兵船拵へにして櫓數多く立て近付舟をば熊手長鎌を以て引寄突立遠き舟をば弓鐵砲にて射伏打伏ける間志岐天草が舟に三艘ぞ乗取ける殘る舟共は散々に追卷られ漸元の三角に漕戻しける島津勢不慮の軍に討負て手負討死多かりければ此儘にて亦押向べきやうもなく各々三角より引入けり右て隆信は筑後在陣五十餘日に及けれ共筑後より後詰もなく島津も國を隔たれば重て合力の儀もなし筑後五郡の輩も爲方なくて命計を乞受何も下城にこそ成にけれ

隆信は降人共の人質を取て肥前を差て歸陣せり扱降人の國侍は本領を取上られ別に僅の地を
下行せられ其中に田尻鑑種同鎮種は弓箭の道に長ぜり隆信他國に働かば殊に頼思間味方にて
忠を盡されよとて本領を返し與へける凡筑後國侍の内蒲池左衛門尉鎮漣草野長門守重長黒木
兵庫頭家實は最初より隆信に隨身す此度降參の士は田尻鑑種同鎮種蒲池鑑廣同源十郎三池鎮
實高良山の座主小身の者には齋藤美作守都地民部大鳥居共なり其外豊後より置處の給人江上
豊饒持等は逃て豊後へ歸りける

星野門注所屬秋月事

同年秋の頃より筑後生葉郡井ノ口の城主問注所治部少輔鑑景秋月種寛が旗下に入て大友を背
く同國星野黨の内に中務大輔吉實是も秋月に同心して嫁家星野丁虎と云者を賺出し妙見屋敷
に秋月人數引入たり筑後國中には問注所刑部大輔統景が長岩の城を守て大友方をする計也秋
月ばかり方々を味方にかたらふ上は如何にもして近邊の太宰府を手に入ばやと思へ共彼高橋
紹運が岩屋實滿に支たる故に輒打入がたし様々に武略を運し兼て敵案を窺ふに紹運が家臣北
原鎮久と云者勇はあれ共智なくして貪狼の心深き由を傳へ聞てひそかに彼が方に使を越謀を

語らひけるとぞ聞し

鎮久逆心露顯事

斯て天正八年庚辰八月下旬比北原鎮久秋月に語らはれ實もと思ひ或時紹運へ申けるは大友殿
日州の一戦に敗亡めされしより以來國々の武士幕下を背き其上豊府旗本の歴々も大半討死に
て今は皆若手計にて他國出馬の事は扱置又豊後一州さへ難治みへ候然ばいつを待共なく實
滿岩屋に取籠り諸方に敵を受け籠鳥の思をなし終には實滿の岩のはざまにて可及餓死事口
惜く覺候然れば豊州御一味を被替て時代に御順ひ有て天の時を御覽ぜん事可然とぞ申ける紹
運聞て我は是大友の親族にて今高橋の家を繼實滿岩屋を給りしかば恩を戰下に報ぜんとこそ
思に争か心有べしとて同心の色無りけり鎮久度々申けれ共後には耳にも聞入す却て心をぞ置
にける依て鎮久所存には元來我々が望むに依てこそ高橋の家をば繼たまへ時の變を知ぬ主君
に同心しては家も斷名字も絶ん事歴然なり所詮ケ様なる偏屈の主君を頼まんよりは只見時に
は不如とて彌々秋月に申合せ紹運父子をば豊州へ返し送り高橋一家を別に取立物をと思ひ立
けるこそ自業自滅の時至ぬとは後にぞ思合けるは兎角延引して不可然時日不移秋月に牒し合

すべしとて家の子に用藏主とて墮落の僧有しを使として鎮久企の趣申遣し候へば秋月不斜悦んで向後疎意有間敷旨懇に返答す彼用藏主いかゞ思けん伊藤源左衛門へ竊に叫けるは御存知にて候や北原殿逆心を企秋月と云合せ近日岩屋へ引越べしとの行也屋山中務事は元來父子の契約なれば一味なき事はよもあらじ然れば彼城より使を立紹運父子をば豊州へ歸國せしめん異議はならせられ難く覺候其子細は只今の進士兵衛は嫡子也和殿も子分なり今村黨は眞方も其外の者共も鎮久再興の家なれば誰有て同心なき事不可有若於相違は痛からぬ御父子に御腹召させ候はんとのおくみ最中なりとぞ語りける源左衛門聞て大きにをどろき猶も念を入一定の處を聞けるに此儀疑なきの由誓言を以て申ければ能こそ聞せらるゝ物哉紹運に至て甚忠義にて御取合を可申必しも他言有べからずと口を堅め置ぬ扱源右衛門心中に思けるは此儀披露するに於ては鎮久誅戮は無疑れば親方を殺すに似て不義也隱密せば主君を不忠也如何せんと案じ煩けるが所詮父にてもあれ何にてもあれ叛逆の人に同心はすまじき物をと思究め紹運の前に罷出右の趣き密に申せしかば紹運をどろきて兎角の沙汰にも不及早々成敗すべきにぞ極りける古よりかゝる不義の者天誅を通れ事なればあさましき哉鎮久は用藏主が返忠をば夢にも不知動もすれば用藏主を近付て双方の密談しけるぞ憊なけれ何事も鎮久が謀ることろ去

夜の事は早朝に伊藤方へ告知す去共鎮久再興の家なれば侍の儀は不及申町人百姓等に至る迄鎮久が下知に不順と云事なし然れば此度の儀は要大事の儀也とて先討手に萩尾大學内山田下野兩人をぞ究め置ける彼等は元來飽迄剛強にして勇力人に越武功も度々に積りしかば常の人をば虫程にも思ふまじき者なるが安からぬ事とぞ思ひける鎮久兼ての覺悟には十月二日岩屋へ引越使を以て右の段々可申入に相究め居けるが思案相違して十月朔日の晝登城せしめ唯今岩屋へ罷越候如何御用は御座なく候やと機嫌を窺ければ紹運對面有て岩屋へは何の用有て越さるゝや鎮久返答に久敷境目の儀も不承候條可參とぞ申ける紹運も俄の事なれば件の討手相違せしめ千里野に虎を放たるにて有べきに此者を何とぞ明日まで留むべきと思ひ折節境目より初嶋到來したれば幸料理すべし是を賞味有べしと也仰せ背難く忝き由にて留まれり若も強て可參と申さば紹運手討にと極めてぞ有ける兎角して料理出酒など數献の間に日も夕陽に及しかば岩屋の者明日こそ罷越候半とて退出す是に依て萬事の議定こそ思ひの儘にぞ成に行けり

鎮久最後付嫡子進士事

鎮久最後付嫡子進士事

天正八年十月二日の朝天に鎮久岩屋へとて出立ける處に兼て討手に定し萩尾大學内山田下野も時分を計て出けるが紹運館の下にて行合たり鎮久頭巾を取て何も登城かと挨拶する處を下野上意なるぞ覺たるかと詞を懸拔打に正面をしたゝかに切たり鎮久も流石に刀に手を懸何事をするぞと一段低處に飛下けるを萩尾大學鎮久が道具持の鎗を奪取て上より見下し三鎗迄突ければ樊會を欺く鎮久もやみやみと討れける大學下野は其儘館へ登城し鎮久事存じの儘に討取候と申入しかば紹運出合兩人の手柄の程今にはじめぬ事共也就中今度の働無比類旨感悅不斜けり去ば鎮久代々の主君に至て不義の働さをなしけるが遂に最後に己が持鎗につらぬかれて死にけるこそ不思議なれ是に付て如何成事やらんと上を下へと周章す鎮久が嫡子進士兵衛は一族與力被官共を集め鐵砲を構楯を双既に大事出來ぬと見へける處に紹運兼て神文を調し事なれば進士が小舅今村美作を以て申けるは鎮久事は不義の企に依て成敗せしめ候進士事は格別の儀に聞届候條忠貞の覺悟に於ては無相違召仕べきの由右神文被下しかば進士を始め一族與力被官等に至る迄仁忍不淺別心を存ず間敷と誓紙を捧ける間頓て無事してけり互に心置合けるとぞ見へし

北原進士以方便討取秋月勢事

斯ける處に秋月種實より計策の狀と思敷て進士が方へぞ送りける進士此狀を披見せず封儘伊藤を以て紹運に差出す神妙の至り角こそ有べけれどて封を切て是を見るに鎮久事手延し殺害に合せぬる事種實面目を失候鎮久へ談じたる首尾と云貴方に至て向後疎略に不存候急と此方へ引越るべしと懇に書たりける仍て源左衛門申けるは秋月より度々當家を亡ぼすべき手立を仕懸候今度は此方より些と以計略方便寄悉く討取可申と云ければ紹運も此儀可然如何様にも知略を廻らすべしと有ければ伊藤と進士相談し進士が被官田中八兵衛土岐主水兩人に云付て秋月に差遣す彼にて談じけるは内々是よりこそ申入度存候つるに還て御心入不淺候父にて候鎮久事暗々と被殺無念類なく候彌々近日其表に立越此憤を散じ度候しかしながら紹運より今に於て心を不許候へば某一分として立退き候事難叶候當山の麓迄御人數を忍ばせ御引候はば可忝なかと右兩人隱密に申入ければ板並左京と申出頭の者を取次ける種實信用不淺古老中老の歷々を呼出し兩使にも對面し委細聞届進士を迎取の行共評儀具に申含めつゝ先當時の引手物として古金作の丸鞘に腰取出し兩使にぞ引れける兩使謹て頂戴し暇乞などして立けるが

左の腰の物は忍て參候へば人の見あやしむ事も候はん近日進士此方へ可引越間其時可給とて板並に預置てぞ歸りける是に依て秋月家彌々心を解けるとなり此左京と申は秋月にて勇才双ぶ者なく近國にも無隱者なるを思の儘に方便たる兩使の心底譬て云ん方もなし斯りしかば進士迎の相圖を十月十八日とぞ定めたる前の日より土岐主水田中八兵衛秋月へ差越迎勢の儀頼入ける處に種實申けるは鎮久事も紹運を思こなして不念よりこそ面目を失つれ進士に於ては無越度様迎取鎮久が孝養に可報人數を丈夫にはからへとぞ申付ける依て宗徒の兵を勝り出し三百騎雜兵千餘人彼兩使を案内者として術るゝとは夢にも不知我先にと急ける年の歩ぞ儂なけれ寶滿にも宗徒の勇士大勢を差向長尾の峰續き切所を前に當て隠し置敵を思ふ圖に引受可討捕行左も有べくは見へける秋月勢は兩人の案内を先に立て押來しが餘り深入に候條吟味所かと申者も有けれ共極運の集にてや有けん以下の沙汰取上げて用る者もなかりけり兩使申けるは進士寶滿を忍出候にも男女數多の事にて候へば思儘にはなかりかね候はん早夜も明方に見へ候間今少し人數を寄られ候へ左無物ならば大石本堂寺より取出を付立候に於ては難遁候はんと言を巧にし次第に押寄て夜の明方をぞ待居ける相圖の時刻にも成しかば早足に進士參たり御取包候へと申にぞあやぶみ居たる兵者共皆切所をぞ越にける斯て大勢を思圖に引受すま

して伏を起して鬨と揚しかば秋月勢將基倒れをぞする如く必至々と崩て親は子を捨親を不助方々散々谷峰ともなく足をばかりに逃迷ふ然に進士方は案内者なれば爰のつまり彼の難處に追詰攻付二里許追討にしたりけり大勢の崩立たる事なれば歴々の勇士共一返しも返しえず此彼にて討れけり中にも並木彌平次と云者其名をや重じけん關内記に名乗懸鎗を振て渡合ぬ内記は元來無双の勇力なれば長刀を以鎗をかなぐり捨ければ亦太刀を抜き打てかゝる内記長刀の柄を取延持て開を打ほどに二つになつてぞ失にける立寄て是を見れば武具の出立尋常にして系圖の卷物を首に懸たり是を取て秋月方の一族に返し與へけると也紹運も寶滿の走松と云處に出張して討取たる首共實檢せしに秋月家の歴々雜兵共に三百二十餘とぞ註しける凱歌を取行て歸城せり今度の武略は源左衛門進士兩人の粉骨無比類とて源左衛門には國綱の腰の物進士には景秀の刀をぞ與へける時の面目自他の名譽なりけり秋月には一家の歴々數を盡して討れしかば進士至て種實が鬱憤甚だ深かりけり此後は紹運進士君臣の間隔なく九年の籠城にも武功の忠臣とぞ成にける

卷之十 島津勢肥後出張事

天正六年より八年迄既に三年の間島津勢肥後の國に働といへ共去年迄は宇土八代彼手に不屬水膜佐敷にて支へ度々合戦して終に國中に入立ざりしか共薩州より色々方便を廻しければ終には叶難き大敵なり彼方より和睦の手入有を幸とや思けん去春より八代の城主相良修理大夫義陽島津の幕下と成りにけり去秋相良を先手として宇土隈莊に働ければ彼等も手に屬し又今年三月上旬より島津勢二手に成一手は伊集院左衛門大夫を大將として一萬餘人小川表に打出相良を先手とし阿蘇が家臣の益城郡城々に働く矢崎の城主中村伯耆討死す三舟の城主甲斐宗運は元來無二の大友方なれば去秋よりも相良義陽と取合を始日に勝負を争ふ一手は島津兵庫頭を大將として一萬餘人川尻表に出張し宇土を先手とし合志菊池を攻しむ隈本の城越前も此時迄は兩端を持して居たりしが此猛勢に辟易して終に島津幕下とぞなりにける所々燒働などしけれ共竹迫内古賀隈部山鹿の城々何も要害に取籠り堅固に持支へければ急に攻べき様もなく方々手入なんどしけるとなりされ共泛々の輩一郷一莊の領主等は中中對應すべき事ならねば皆々旗を卷て降を乞けるなりこれより島津勢川尻に取出を構て肥後で一圓に治べき行をぞ廻しける

相良連歌法師事

去程に相良義陽は肥後にての本身也ければ多年島津と取合て幕下にも降せざりけるが如何にして去比俄に島津幕下と成けるぞと委しく是を尋るに義陽が方に京方より來るとて連歌法師一人有けり萬の事にうとからず弓箭の道をも手馴ぬ者は見へず義陽面白き者と思ひ常に近付伽となして語らせける此年月島津相良鉾楯の間に義陽種々の謀を廻らすといへ共敵方一度も行に不乗却て八代を惱しければ義陽も困窮に及びけるが件の法師島津が問者にて八代が行を密に通じけるとは後にぞ思ひ知れたる彼者常に義陽に物語しけるは熟世の中を思按候に九國の諸士大友を背事各々が咎に非ず唯天の致所なり大友は政道理に背家の舊式をも取失ひ弓箭の古實にも違へり家運正に盡なんとす龍造寺隆信は歳々猛威をまし弓箭を取て謀こと深く多くの敵を靡すといへ共剛強に過たる大將なれば長く終りたもつ事難かるべし然れば行末とても頼母敷からず扱其外の郡主城主何れか九州の司とも成べきと目に立人更になし島津は數代弓箭を取て其名高く氏姓も歴々たり近年までは小身なりしかどいつとなく向所順ひ行處なづひて薩隈の二州を治取剩先年耳川に於て大友の大軍を追崩して日州をも手に入れ勇名九國

に普く遠國迄も其名を稱すと承り候今又肥州に働くを餘所ながら其家風を窺ふに政法正しく軍法嚴重也賞罰理に當れば人恨べき様なく慈愛深きに依て士卒恩下に命を輕んずされば島津こそ筑紫の管領とも可成人と存じ候へ敵對の人終に其鋒先にこたへまじ與力の士は末も頼母しからんなどと餘所の様に云沙汰しければ義陽も始の程は思寄ざりつるが度々の攻合に利を失事多ければ彼が常々の言義も道理なりと思あたりて始め隆信に誓詞をつかわしてしたがひけるも打捨てゝ終に島津にこそ降參したりける

相良義陽最後事

去程に天正八年三月下旬島津方の先手として飽田郡には宇土顯孝上益城郡には相良義陽二手に分て働ける甲斐宗運例の子共を引具して五千餘の勢にて御影野迄打出て義陽と對陣す島津方は義陽を大將として一萬計の勢なれば宗運も疎忽に懸り得ず暮方に遠負して三舟の城にぞ引入ける斯て五日を経て後宗運并に子共六備にして御影野に張出て義陽と取合を始既に矢軍始まりて暫戰けるが宗運散々に討負て又御舟の城へ引入ける義陽始の程は宗運を侮にくしと恐をなしけれ共二度迄軍をまわしたれば今は心にくからずと思ひしかば御舟の城を乗んとぞ

ひしめきける四月二日相良先手の勢甲佐豊内の城を一時責に攻ける程に城主伊津山城守討死し殘る兵方々へ逃散又義陽此由を聞て大に悦び直に御舟をも追崩すべしとて旗本僅に三百餘人にてひゞき野の原に打出先手の注進を待居たり宗運は此間態と敵に弱氣を見せ敵の意所を見すまして討べきと竊に間者を入置敵の模様を聞すまして山より北を押廻り旗を卷靜々響野西へ打出る義陽は斯るべしとは思も不寄近付勢を見て宇土より加勢や來ると云程こそあれ宗運三千計の勢旗を擧鬨を作てひたひたと突て懸る義陽が近習其外の士卒も爰を最後と戦けれ共銳卒は皆先手として今朝より甲佐に遣しぬ後陣の薩州勢は數里隔りたり義陽が近習者多くは若き輩或は老武者共成ければ一騎も不殘討たれにけりいたましや義陽は今角とや思ひけん一足もたじろかず床几に腰を懸居たりしが宗運が郎黨諸方喜造と云者懸寄て大將と見候御頸給らんやと云ければ運命ぞよつて取とて頸差のべてぞ打せける大將既に討れぬと聞へければ御舟の寄手も悉く敗北す宗運が一擧の功に依て島津勢も宇土川尻を引拂ければ顯孝も飽田表を引て居城に籠り暫く軍は無かりけり抑此相良義陽と云る其祖は大職冠鎌足公十一世の孫遠江守爲憲之助たるに依て子孫相繼て工藤と稱す五世の裔左兵衛督周賴遠州相良の莊にて采地を給りしより相良と改む周賴四世の孫莊司四郎賴景建久九年に右大將家の命を得て鎮

西に下向す其子三人有けるを嫡子三郎長頼は求麻城に居す次男四郎宗頼山鹿郡に居し内田相良と稱す三男五郎頼平玉名郡を領し山北左衛門とぞ稱しける長頼が子孫繁榮して近代球摩葦北八代三郡を領しけり長頼十餘代の後從五位下宮内少輔義滋其子從五位下右衛門大夫晴廣其子從四位下修理大夫義陽に至て勇名近隣に振へり其頃九州の士には希なる位階に叙し果報いみじく國中に武威を振ひしが宗運が一時の謀に落されて自害せし事本意なくぞ覺ける

隆信肥後出張付赤星没落事

頃年龍造寺隆信勢ひ漸く強大になり天正七年五月より肥後の國へ馬を出し和仁大膳亮が和仁の城を責落し夫より小代親忠が梅尾の城に取詰防戦甚だ急にして親忠城を下り父伊勢守親傳入道宗全を人質に出しける隆信其老人たるを憐て宗全を返し遣して師を國に班しけり其の比隈本の城主城越前守親賢も人質入て降參す爰に同國山鹿の城主隈部但馬守親永が家の長臣有動外記と云者を使節として天正八年の春隆信へ申し遣しけるは近年九國の内豊筑肥の間は大友の旗下にて下知を受來り候へ共宗麟不思議の行跡のみ多して諸國共に背き家の子共も疎みはてける殊に先年日州耳川にて島津との合戦に不覺の負を取しより武威悉く廢し滅亡久し

かるまじと存候この頃は島津こそ打出べき由風聞候へ共邊土よりいかに思共叶まじく候只今九國には御弓矢に及ぶ者誰か候べき當國は就中小身の輩面々に旗を立威を争ふにて候猶々御人數を向られ候へ先手の案内を仕り不日に一國を打從へ候ひなんとぞ申させける隆信對面して國中の地理領主の賢否迄委細に尋問ていしくも申越されたる者かな頓て人數を向へなん恩賞は勳功によるべし先時の禮儀とて白銀百枚太刀一腰を隈部に贈り使二鞍置馬一匹ぞ引たりける其頃隆信は筑後へ働んと思ひける故二男江上家種三男後藤家信甥の多久家久を大將にて犬塚馬場など云者都合五千餘を肥後へ遣し山鹿邊に屯して先づ菊池の城赤星を攻べしと擬しけるに赤星が家司星子中務と云者長坂と云處に在城し是にて一支へ支へんと待懸たり肥前勢山鹿を打立二子塚の上に登り星子が城を直下し人數を賦り手當を定る處に合志郡主藏人親爲赤星を見續んとて雜兵二千餘人にて長坂の後詰にぞ來りける肥前勢是を見て此は後詰の勢と覺ゆるぞ足なためさせぞ追崩せ者共とて三千餘人只一文字に二子塚を馳下中村瀬を渡り堀田村の脇へ出張す合志が一族道覺明存一專とて三人の法師武者千餘人を引率し白金村に陣を取て有しがなじかわ堪ふべき早鐵砲を打かけ二放ち三放ちし放ち捨拔連て切て蒐る肥前勢も心得たりと打て出る敵魚鱗に突破らんとすれば味方鶴翼に包んで一人も漏さじと攻戰ふ東

西に靡け左右に開て未だ勝負見えざりけるに隈部嫡子山鹿彦次郎親安を大将にて有動が一家千五百餘人横合に驅付散々に切廻る肥前勢も此に力を得て進めや者共續けや人々と呼き叫んで懸る程に合志親爲が本陣より崩立て東を指して敗走す有動備を崩して追討にする程に纔か半里計が中に雜兵五百餘人打取る道覺一專兩人共に討死す肥前勢も二百餘人討れけり是に依て星子も堪へず翌日城を明け隈部へこそ落行けれ即ち城を有動に渡し肥前勢は先本國へぞ歸りける角で隆信は猶肥後の國を治めんとて翌天正九年四月九日長男民部大輔政家（時に名鎮賢）を先陣の大将として龍造寺安房守信周、同彦右衛門尉家俊、同越前守家就、同備後守鎮家、高木左馬大輔盛房、内田肥後守兼信、倉町左衛門大輔信俊、馬場肥前守鑑周、同中務少輔鎮周、出雲兵部大輔信忠、姉川中務少輔信安、同彈正信秀、横岳兵庫助鎮貞、同下野守頼續、神代彈正忠空閑重松本告宗犬塚鹿の江堀江副島德島嶋打八戸諸岡等是に従ふ後陣は隆信が二男江上又四郎家種なり波多參河守鎮、龍造寺和泉守長信、後藤善次郎家信を始めとして松浦豊前守（陣代）松浦肥前守鎮信（陣代）等列をなして相従ふ藤津の郡士兩吉田兩嬉野、久間、永田、原、鹿島、犬塚彈正忠、上瀧志摩守等は鍋島豊前守信房に屬して莊津鹽田津より舟に乗て高瀬大島邊に押向ふ西郷刑部大輔、同右衛門大輔、神代、森山、糸岐、多良宇良上野介等も船を揃て

自武崎出船す大村丹後守純忠は同氏左兵衛尉、同左近大輔同左衛門大輔同又八郎及び士卒を出して軍役を勤めけり島原純豊深江安德其外高來彼杵の郡士は數十艘の兵船を促し高瀬、大島、猫宮、三池、黒崎の浦に著岸す筑後の國人には蒲池彈正少弼鎮並同兵庫頭鎮運田尻丹後守鑑種、黒木民部少輔鎮連、草野長門守鎮員、西牟田播磨守鎮豊、高良山の座主兄弟麟圭良寛三池河崎隆饒安武或は自ら出或は勢計りを出し各軍形を正して同月十日大津山に著陣す此時筑紫上野介廣門が陣代として筑紫新介増門も來り従ひ都合其勢五萬餘騎陣を押し隊を列ね法令益々嚴重なり山城守隆信は諸將の權を幸つて其身は未だ肥前の佐嘉に居り敵國の封疆に守衛を配り肥後出勢の根を固ふす同十一日政家陣を山鹿に進む是に於て小代親傳入道宗全隈部但馬守親永同源次郎親泰を初め大津部原山下の諸將參陣し肥後筑後の軍勢走せ集て名を發し忠を顯んと願ふ者風に偃す草の如し此時隆信も來て下知をなす鍋島加賀守直茂も筑後の酒見より參陣す即ち直茂に二萬の勢を授け日の大将として同十三日赤星統家が籠りたる隈部の城を取圍む隈部は元來隈部但馬守親永が居城なりしを中比赤星に攻とられし其舊怨を散ぜんとして親永進んで今度の軍に功を勵む城主赤星壘を高し溝を深し矢砲を飛して相守り鹽合見て切て出で防戦火花を散しける鍋島が従士副島太郎兵衛松田彌兵衛島原大學中野監物など云者一面に

突き懸り四角八方に切て廻る鍋島直茂同弟小川武藤守信俊采配を揮ては諸軍を進め鐘を取ては堅を碎き短兵急に交はつて即時に塀柵を乗破り已に町屋に火を懸ければ餘烟城郭にせまり赤星も防ぐに手立盡果て詰の城にぞ取籠る此時鍋島が手に討取首三百餘級なり味方も手負死人多けれ共乗越乗越一時に詰の城に責め著けて櫓多門をこぼたんとす爰に於て赤星頻に降を乞ふ隆信赦して寄手の勢を甘けり此日三船の城主甲斐民部大輔入道宗運合志常陸介親爲從屬し及び隈本の城主城越前守親賢鹿子木已下參陣して隆信の威風龍の雲を得るが如し角て赤星は責口のゆむるに怠て人質を出す事延引す隆信忿て同廿一日又彼城に押詰下村生運と云者を使として質の遲きを責めたりしかば赤星甚だ罪を謝し其子新六郎當年十一歳に成けるを質とし甲を脱て城を出ければ隈部親永己れが舊跡としてしきりに望みけるにより城を親永に與へて赤星が妻子を合志山に移しけり同廿二日隆信陣を内久我に寄せて内久我の城を圍む内久我こらへず降參す是より天草の城主志岐豊前守鎮經を始め肥後國の堀伯誓狀を捧げ人質を先立て招ざるに來伏して皆龍造寺の下に立んと乞ひ願ふ隆信政家其求に應じて各幕下の約をなし軍を佐嘉にぞ班されける此時肥前筑後は一圓に筑前肥後豊前の内も手に入て五州の太守と號し佐賀城邑の繁昌は時を得てこそ見へにけれ

蒲池鎮並最後事

筑後の國柳川の城主蒲池彈正少弼(或は民部大輔或は左衛門尉)鎮並(或は作連)八坂宇都宮の末流蒲池近江守鑑盛入道宗雪が嫡子にて拔群の英雄なり中頃大友が麾下として隆信にも親く交りたりけるが隆信大友と矛楯たるに因り宗雪隆信に同心せず去ぬる天正六年薩州耳川の出勢に鎮並兵を引率して肥後の國迄出けれ共伯父田尻鑑種が勧めに因て柳川に引返し志を隆信に通じ隆信が幕下となり度々功を顯せしが天正八年の春反逆の色顯ければ三月十日より隆信是を取圍み挑み戦ふ事數月に及ぶ斯て城兵防守の方便盡ければ十一月二十八日に鎮並已に下城して頻に先非を悔る故其罪を宥免し舊地を與へて置けるが又野心を舍の由隆信聞て腹を立て方便よせて討ばやと思近臣田原伊勢守西岡美濃守に密旨を含め柳川に差遣し去年隆信須古(佐賀城を西に去事六里程)の城に隱居せり此新館にて饗應し互に數寄の事なれば猿樂を興行せんといと懇切に言送る鎮並是を疑ひ所勞と稱して肯はず田原西岡知辯を盡し伯父蒲池左馬大輔と鎮並が母の(田尻監種が姉)許に行鎮並公の御所勞はさまての事も不相見疑心有と覺えたり隆信黒心なきの由矯て起請を書此上承引なきならば隆信必ず立腹あるべし然る時は

鎮並の御爲に宜しかるまじと様々に口説ければ母人も左馬も應諾し鎮並に斯と告鎮並漸く領掌し兩使と共に打連て柳川の城を出て肥前にこそは赴きける爰に豊後國大木城主大木兵部入道宗繁は蒲池の親族なりけるが此事を聞よりも馬を飛せて駈付け其外の一族も聞付相集り今度の招に應じ佐賀に行ん事鬼の窟に入に似たり彼計謀に落されなば蒲池の滅亡斯時にて臍をかむとも甲斐あらじと涙を流し諫ける鎮並云けるは各が申所至極せり我も又其心をしらぬにわあらざれ共此度肥前に立越ずば又大軍を差向け取圍んは必定なり其期臨むものならば千に一も助かる事はよもあらじ今萬一死に趣なば却て一生をたもつべきかとて妻子親族召し集め最後の盃汲かわし必死に究めて出ければ宗繁を初めとして宗徒の一族老臣も涙と共に分れけり頃は天正九年五月二十六日蒲池左馬大輔鎮並安を初として其外從族三百人鎮並に相従ひ肥前の佐賀に赴さける政家大に悦て城の北に當りて本行寺と云る茗藍の有けるを旅館とし茶の湯猿樂興を替城中に相招き饗應尤叮嚀なり鎮並は夫より須古に行んとて同二十七日に本行寺を打立けるが與賀明神の社の前を通とき隆信より伏置し小川武藏守信俊石井が一黨同時に起り犇々と取包む鎮並馬を控て左馬大輔鎮永が面を屹と見たりしかば鎮永大きに赤面して今此害に逢事は偏に我が智の足らざる處なり責ては二心なき事を目の前に見せ申さんと花表の

前に馬を立て向に進む兵を三騎まで射落しける鎮並が從士には蒲池左近大輔並安大木鎮照田尻種教中山掃部助本郷中務同彌七郎原對馬守大木越後守同忠五郎丸野外記大谷式部同與三兵衛小溝藤兵衛内田内藏助西川縫殿助今村源右衛門岩井九郎鳥巢勘解由香土左近已下究竟の兵其切先を揃て打戦ふ肥前方には石井參河守同四郎兵衛同次郎右衛門中島將監水町彌太右衛門澁谷善右衛門秀島隼人大塚勝右衛門分捕高名數々なり島内新左衛門同右近群を出て打死す大木忠五郎は短刀を以て石井四郎左衛門左右の股を打拔しを四郎左衛門是を抜捨て終に忠五郎を打取ぬ其間に鎮並はあたりの小屋にかけ入て左馬大輔に防矢射させ主の老女に湯を沸かさせ心靜かに浴して主從三人差違てぞ死たりける鎮永は屋根の上にかけ登り差とり引つめ射ける處に鍋島直茂が使江副兵部左衛門と名乗て立文を差出す鎮永取て是を見食裂て打捨箆の上矢を拔出す兵部左衛門是を見て返答は其矢なるかと云も果ざるに能拽てひやうと射る兵部が股に中れ共兵部少も不退鎮永二の矢を不射故直茂に知らせんとて靜々と歸ける鎮永矢種盡ぬれば刀を抜て飛て下り大勢の中に割て入巴の字に切て廻しが數箇所の手疵蒙て堤左馬にぞ討れける其の外鎮並が郎從共死狂に働て一人も不殘打死し肥前の土となりければ續て柳川の城に押寄妻子從類打滅し龍造寺家晴を入易て當城の主とぞ成にける

矢原合戦事

去年の冬より筑後問註所治部少輔秋月に屬しける故に秋月が人數度々生葉郡に働さける長岩の城に問註所刑部少輔統景、町野與兵衛が籠て大友方をするといへ共大敵に對應せん事難叶に依て豊州へ飛脚を立加勢を乞事頻也さらば刑部少輔を助けんとて加勢を指向る兼てより日田球珠警固の爲に遣し置たる朽綱宗曆を大將として三千餘人日田より直に生葉表に押出す天正九年十一月に宗曆井上城に取懸り問註所治部少輔を攻たりける秋月種實是を聞てさらば後詰をせよとて打出る筑前上座郡麻氏良の城に三日逗留し方々の味方を召集む其勢七千餘人同國針目と云所まで陣を寄る大友方にも秋月定て後詰あるべしと兼て用意しければ田北一萬田千餘人豊府を立て是も生葉に打出宗曆と一つに成て井上を巻ほぐし志和の瀬矢原の川原に備を立て待掛たり秋月勢は筑後川を境にして暫鐵砲を打合ける十一月八日の早天に豊州勢の中より野上一閑と名乗て只一騎川へ颯と打入ける敵味方あれば如何にと見處に三奈木野上川中にて木彌平次と名乗て只一騎川へ颯と打入ける敵味方あれば如何にと見處に三奈木野上川中にて押雙て無手と組て落河水の中にて互に刀を拔差違て共に空く成にけり是を軍の始めとして大

友秋月兩家の勢筑後川矢原の瀬に雙方より打入て南へ追上北へ追歸し呼叫て戦しかば死人は水に漂ひ血は波の色を變じ雙方七百餘人討れて軍は相引にぞ成にける其後秋月勢は麻氏良の城に引籠る豊後勢も能士ども數多討死しければ續て強き働もなく井上をも取得ず寒氣も甚しければ各々日田球珠迄馬を入れてけり今度豊州の士大將數人打出ける程に何様井上をも攻落し上座邊にも押出目に立程の働も有べしと見えけるにさまで仕出事もなくぞ打入ける去年豊前田河にして後を取今年もかゝる事なれば秋月方の者共大友勢恐るるに不足と悔りけるも理りなり

鑑連紹運嘉摩穗波出張事

戸次鑑連高橋紹運は豊州勢筑後に出張の由を聞兩家の勢六千餘人を率して嘉摩穗波へ出陣す何れも秋月領地なれば境目警固の爲取出の小城三箇所迄構へて兵を込置けれども鑑連紹運無雙の勇將なれば種實自身出ぬに自餘の小城より幾備出たり共對應の合戦難叶とや思けん出合者も無りけり鑑連紹運思程に焼働して十一月六日に引取ける秋月方にも平場の合戦は六箇敷かるべし引入れる時山道の切所にて人數の配備の廻らぬ所を見て追詰て討果すべしと相

究豊前筑前の城代とも七八手牒し合せて同時に打出跡を追てぞ驅りける鑑連紹運是を見て扱も婀娜き敵方の行哉と少も騒ぬ體に見せて思圖に敵をおびき寄よとて足輕を後陣に立て遠矢を防せ閑に引てぞ見せたりける秋月勢是を見て敵は引兼たるぞ追詰よとて急に付て競かゝる鑑連紹運は敵を近々と引受すまして石坂と云所にて旗押立させ南向に馬を立れば先陣後陣一度に噛と返して切かゝる秋月家臣并に長野千手城井後藤彼是八千計入替攻戰ふ鑑連紹運の士共息をも繼ず眞黒に突懸れば秋月勢も國士も堪兼て後へ颯と引退けるを立花勢勝に乗て追詰追詰討ける程に一里計の内を敵方一度も返し得ず今は長追なせぞとて土師村より引返しける鑑連紹運兩手に討取所の物數三百二十餘とぞ記されける

筑紫廣門岩屋城取懸事

筑紫上總介廣門は高橋が穂波出陣の由を聞て岩屋は定て無勢なるべし能き時分なれば此留守を乗取んとて廣門勢を盡して押寄ける案の如く岩屋には城番の爲兵少々殘置けれ共廣門が大勢を防べき様は無りけるに致仕宿老或は十五六の童共皆鎗番筒古弓等を持出布や白帷子とさ散し竿の先に結付旗の如くに押立させ出ければ寄手案に相違やしたりけん少し色めきて見

へけるを長松掃部など云者精兵の射手にて有ければ矢種を不惜散々に射たりける依て筑紫方より入江隼人入道と云者驅廻り早人數を引取れと下知を成す處を許斐三七鎗を打振て驅りけるが如何したりけん隼人が大太刀に切拂はれ疵を被りて引退く二番木野大學餘さじと飛て懸りけるが是も亦手を負ぬ三番に上原民部渡し合せ暫く打合けるが終には民部に首をぞ取れる法師頸にて有ければ口到手を入引揚んとしければ竿を持って口を割はなしける其指久しく痛ぬること不思議なれ斯て筑紫勢も雪頼引に引退を見て若侍共勝に乗つて追討せんとしけるを許斐宮内武功の者なるが味方の小勢を見侮りて寄手大返と云者に取て返し付入にせんとの行と覺るぞ早々人數を引取と走り廻り制止して城を堅固にぞ持支へける敵方も案に相違して覺へければ其儘にぞ引入ける誠に味方小勢と云其上留守の事なれば筑紫が掌に握けるも理なり去共留守居老功の者共各心を一つにして身命を捨て働けるにより敵を追退する事莫大の働なり軍の勝負は勢の多少に不寄とは箇様の事とぞ覺へける

大友失武威事

大友方には去ぬる己午の兩年日州兒湯合戰豊前田河の働筑後生葉合戰何れも利を失ひける故

分國所々に惡黨多起て敵と引合一揆を起し様々害をなし大略秋月種實又は筑紫廣門が與力と成にける是に依て大友義統豊前筑前筑後何れの國より成共手寄次第に馬を出し取鎮むべしとの評議に依て右三箇國の味方に氣を付べき爲なれば頓て出馬すべしと觸ける實にも大友家當時衰微せりといへども昔より九國の管領なれば人數も多く一族宗徒の士大將五十餘人此大勢を引率し義統自身出馬有に於ては利に屬せぬ事は有間敷と兩筑豊前の味方衆頼に思も理なり去共日州表肥後境に至て様々事多く又は一族家中にも種々の異議共出來て彼に障是に懸り延引せし程に兩年が間義統出馬も無りけり依て秋月は彌蜂起し又筑紫龍造寺の族迄近國に威を振しかば大友味方の國士年月々に力を失ひ人數を損じ或は兵糧に逼り防べき便りもなくして城を開て逐電するも多かりけりされば大友家衰微せし事は唯是宗麟の心より出たり諸事に付て無道なる事舉て難計其上正道を宗とし諫をも云べき古老の族は何となく疎遠け機嫌を窺ひ萬に付て蹈廻る族を近習第一の出頭とし國家の政道をも此者ならてはと思ふ故に外様の諸侍新參の者共或は藝能の族に至迄こびへつらひを專として機嫌を取廻る程に先祖重代の家來より上さまに成行家中の作法先祖の家風を亂り万故實を失へり是大友傾敗の基なり殊に近年は譜代相傳の侍所領を沒取し勘當せる者數多有之中にも吉良修理允高山遠江守古莊右京

進是等はさせる科もなく數代の忠功其身の勤勞争かかくは有べきやと宿老共色々詫言しけれ共宗麟も義統も聞入ず所領を取上げる彼三人の者共連々田原黨と中惡し如何様彼田原の一族共が惡敷取なしつらんと諸人申あへりき

高橋紹運米山城取返事

高橋紹運近年方々の軍に毎度敵をなびけ其名遠近に聞へける彼領分筑前御笠郡と筑紫廣門が領地肥前基肆郡養父郡とは其地入交りたれば境を論じて小攻合の絶る事なし天正十年九月下旬廣門御笠郡に亂入す紹運岩屋より打て出筑紫と五六日攻合有りかくて筑紫が勢も引入れれば紹運も本城に引取んとしける處に秋月方より忍やかに人數を出し米山の要害を乗取けり此米山と申は岩屋より秋月押の爲に構置たる取出なり折節此城無勢なる隙を窺と押寄城中の者共を追拂ひ大勢入込り紹運此由を聞て取者も取あへず米山へ出張し兵共を下知しけるは秋月勢に此城をとられては日頃の働も水に成ぞ只速に追出と呼叫んで攻懸れば秋月勢其勢に驅立られ一支も不支城を追出され摩志岐山口打通り夜須郡さして逃行たり岩屋衆二里程も追驅散々に切付ければ秋月勢太刀長刀を捨て身すがら計這々逃も有或は谷溝に倒落て半死

半生なるも有只蜘蛛の子を散すが如く四角八方へ逃散けるが討るゝ者二百餘人なり紹運は即日
に城を取返すのみならず敵數多討取て喜悅不斜彌米山の要害用心稠敷申付しかば此後は秋
月方より紹運領内に耽と働得ざりけり天正十年十月二日の事なりとぞ

石坂山合戦事

嘉摩穂波の二郡は本より秋月領分なれ共度々戸次高橋出張せしむるに戸次高橋に百姓共亂妨
の制札を請土貢米物を納ける然るに依て戸次高橋が郡代として彌長隱岐伊藤外記兩人に與力
少々相添郡中を奉行せしむ如何したりけん當年に至て彼土貢米を不納依て右兩人郡中へ夜
討を掛方々亂妨して納米奪取てけり此儀秋月に聞へしかば指置べきに非ずとて大勢を差遣し
て狼藉を鎮しむ兩郡代の者共小勢なれば隱岐討死す外記は手を負ひ又此事立花岩屋に聞へし
かば同月六日鑑運紹運兩家の人數三千餘人を引卒し嘉摩穂波の兩郡へ打出る石坂瓜生野へ陣
を居嘉摩穂波兩郡を放火せしむ秋月是を聞て五千の人數を指向て此を釣留んとす紹運鑑運も
今度は是非に一戦と相究此方に敵を引寄せ合戦すべしとて紹運鑑運二千餘騎にて小松の陰に
引隠れてぞ備ける紹運が嫡子統虎は其頃千熊丸とて生年十六歳初陣なりけるが唐綾威の鎧に

鍬形打たる冑の緒をしめ金作の太刀を帶十六指たる截生の矢筈高に負なし塗籠の弓眞中握り
馬より下て下知をしけるは敵既に近付ぬ我に隨ふ者共は此方に來れと紹運が陣より三町計隔
て陣を取んとす後見に付たる有馬伊賀と云けるは無詮殿の計ひや敵大勢なれば押隔られ叶
ふまじと深く制しけれ共統虎打笑て敵大勢なり共何程の事か有ん紹運と一所に向はゞ我に順
ふ者共紹運の勢と一同に懸引してよも我下に隨はし理を曲て我計ひに任せよと云ければ有馬
當機の理に感心し度々軍に逢し者もかゝる心は有まじきに今年僅十六歳始めての合戦に由々
敷かりける計や我命を長じて此殿の壯年の器量の程社見たりけんとして百五十騎計引分て陣を
取居たり去程に敵の大勢さしにも嶮しき石坂を息をも不繼攻登る統虎既に蒐ぬものにて候
と制し止けり紹運が勢敵を矢頃に近付直下て弓鐵砲を一度に放懸たり敵兵散々に打立られ疼
處を得たりや賢しと紹運靡取て振廻し時分は爰ぞ早突て蒐れ兵共と下知をなしければ小島彌
兵衛と云者一番に鎗を合す早雄の若者共なしかはためらふべき三百人計眞黒に喚き叫んで
突てかゝる秋月が先陣七百餘人立足もなくまくり落さる二陣の勢一千餘騎喚て攻上る紹運自
ら長刀打振て蒐合て相戦ふ統虎百五十騎筋違に驅て切立る敵の後陣是を見て不殘續て攻登
り火出様にぞ戦ける敵も大將とや見たりけん自餘の者には目も掛ず統虎が前へ一文字に切て

入る近付敵を有馬伊賀三騎まで切伏しが額にうす手負眼に血入て防兼たる處に秋月が郎等堀江備前と云し者大長刀を横たへ近付者を薙伏々々打てかゝる統虎是を見て矢取て打番ひ能引て飄と放つあやまたず堀江が長刀の柄を射削て餘る矢が弓手の腕にしたゝかに立堀江物共せず長刀かしこに投捨統虎と押並て無手と組統虎堀江を取て押へ少共働せず有馬萩尾は無かと呼はりければ萩尾大學と云者蒐合て堀江が首をば取てけり大將如斯なれば士卒の勇氣なじかは撓むべき前後左右に割立追廻し黒烟を立ててぞ鬪ける秋月勢も元來精銳なる者共特に去年寶滿の下迄謀寄られて討取れし者共の親子兄弟伯父甥等其憤を含み今度其鬱憤を晴さんと力を盡し氣を勵して防戦ける程に互の勝負はみへざりけり斯りける處に鑑連時分は今ぞと一千餘騎真下りに喚てかゝる是を見て秋月が勢叶はじとや思ひけん瞳と敗れて引退く紹運鑑連急に追掛攻詰討捕ける頸數七百六十凱歌を擧て歸陣せり去程に統虎初陣にて其日の働尋常ならざる有様を鑑連見届て成人の後は無雙の大將たるべき器量哉と感心してそれより養子の望有けるとぞ聞えける

小金原合戦事

筑前の國鞍手郡鷹取の城主毛利鎮實も大友の味方として多年籠城しけれ共領地を宗像杉等に妨られ糧米既に竭て難儀なる由立花へ告ければ戸次鑑連より糧を見次べしとて米三百俵人馬に取持せて鷹取の城に贈ける道筋敵地成ければ立花に屬したる地士薦野三河米多比五郎次郎立花の大將數多是を警固し押て行頃は天正十年十月十三日の事なればふりみふらずみ定なき時雨に染むる木々の紅葉を眺て何心なく過る處に龍徳の城主杉十郎連並道を横切て遮留んとす立花勢事共せず押破て打通事故なく鷹取に兵糧を送り届け翌日立花へ押て歸りける處に長井津留在宅の宗像大宮司が麾下の士共是を討留んと云合鞍手郡若宮吉川の境小金原と云所に前後より取包み一人も不餘と切て掛る立花の侍には戸次兵部鎮比同越中鎮直同右兵衛尉鎮實同彈正直貞同勘衛門鎮行を始小野和泉由布雪荷弟大炊米多比五郎次郎薦野三河其子彌助三河が弟勘解由十時攝津同太左衛門安東紀伊堀勘解由内田玄如稻葉理兵衛森下河内此等と先として相従ふ輩身を塵芥に比して防戦す去共敵は大勢にて然も地戦なれば郷人等まで起り出八方より取巻ける立花勢心はたけり思へ共前後の大敵に退屈してぞ見へたりける味方鐵石にあらざれば足達式部を始として討死の士卒三十四人由布美作を始めとして手負もの若干なり宗像士原孫九郎立花勢の負色を見て勝に乗進懸處を米多比五郎次郎渡合せ端的に突落し首を

取て指揚高聲に名乗けり五郎次郎今年十七歳比類なき働とて鑑連は申に不及大友宗麟よりも感状を成されけりかくて孫九郎討れ其外石松加賀守同源二郎神屋源左衛門吉田少輔六郎を始宗像家にて名をあらわしたる士五十餘人討死しければ宗像勢右往左往に色めきし處に立花方内田壹岐入道玄如馬乘廻し軍は味方勝たるぞと呼り味方に氣を付しかば負色に見へし立花勢氣を立直しわつと呼で驅廻る宗像勢是を見て一合もせず崩立て敗北す午の刻より申の終迄の合戦に互の取人夥し此時立花勢の中にも薦野三河は深川三九郎と云者を討取比類なく働ければ道雪殊に賞美したりける其外内田玄如足達對馬十時太左衛門同傳右衛門沓掛與吉兵衛池邊龍右衛門同彦左衛門此者共諸人の目を驚す程の働して義統感書を賜りける天正十年十月十三日小金原合戦とは是なり總じて此頃戸次高橋兩家近國の敵共と粥田田藏潤野原小金原許斐鷹取などにて合戦幾度と云數を不知鑑連父子紹運は當時九國に於て比倫なき強將なれば向所不破と云事なく當所不_レ挫と云事なし強將の下に弱兵なき習にや兩家の士卒何れも手柄をあらはす其中にも十時安東薦野内田沓掛由布堀高野森下足達池邊因幡後藤吉田等其名隣國に聞へし者共多かりけり

卷之十一 甲斐宗運病死事

肥後の國は近年大友の下知を背き處々の城曹格々に争ける中にも三船の城主甲斐民部大輔入道宗運は大友方にて隱なき武將成けるが兼て宗麟が非道の振廻を疎ける故にや天正九年の四月より龍造寺隆信が幕下に成て居たりしが同十年の十二月下旬より重病を受さまさまに療養しけるが今年も早暮て立歸る春の空にも寒風雪を吹て病惱は猶解やらず次第に重く成にけり七月の始今を最期と覺敷て子供を近付云けるは人の死なんとする時其言事よしとかや最後の一言なるぞ能々聞置て忘るなよ抑我は亂世に生れ若かりし時は勇猛にて心專なり氣を以て勝れ事を謀命を露塵とも不_レ思りき強年の以後は勇氣少し緩む然ども事に臨て心惑ず謀の中に利あらん事を思ふ必事に臨毎に死の恐を慎めり壯年の昔老後の今勇智の二つは先後有つれども心は壯老ともに失じと守つる也凡そ士は仁義智謀勇氣兼備はらずんば不可有つら_レ汝等が人と成を見に先嫡子親秀は詩歌の才賦税の算は弟どもに増りて見へたり二男惟義は兵杖を取て敵に向時は勇氣何れよりも勝れたり三男惟久は少し智略有と覺ゆ汝等三人品々の氣象有に親秀は我弱年の時に少し似たり惟義は我三十計の時に少し似たり惟久は我四十以後の心

に少し似たりと覺たり去ども如何なれば仁義の心父に似たる子の無やらん某が一世の間恐くは仁義を守らんと思心計は忘ざる者は汝等三人合せても我一人に不及所也斯程甲斐なき汝等なれば我死ての後家を失ん事こそ本意なけれかまへて々々仁義の道に違事不可有と常に慎み思ふべし勇力も不可好智謀も頼なし唯正理を守べし邪路に赴事勿れ角は乍云時今亂世なれば兵道を捨よと云には非ず止事を不得して軍をせば謀を先とし勇猛の心不撓若敵を取ひしがん時には惟義大將たるべし敵に城を圍れ或は敵と對陣し或は夜討伏かまり或は味方小勢にて大敵に向はん折からには惟久が下知たるべし親秀は總大將として本城を守り國民を撫養し諸の軍用を事關ざる様に沙汰せしめ弟共に力を添へ召仕處の士卒僕從恨なく困窮せざる様に下民小家迄も能々心を付べき也仁義を忘なと云は阿蘇の本家を背事なかれ我は元來阿蘇の家臣たりしを大友殿より采地を給はり家を興し身を立けれども思ふ子細あつて龍造寺に屬し人質を出し神文をも致せし也去ども阿蘇に至ての志必ず忘却する事なかれ今戰國最中なれば勢ひの盛衰は幾度も可有なり力盡たる其時は年來宗運が矢部の城に籠置たる糧米味方の勢計にては五年の用意なり大敵彌重り國中も悉く敵と成今は處々の小城も持支がたしと思はば御舟片志多甲佐田代の構を一々に焼捨て矢部の山家へ引入べし矢部の城を落さん事何十

萬の勢にても思も不寄事なるぞ斯て年月を経るならば五年の中には必天下一統すべしと思ふなり左有ん時は忠孝の道を守りし者争か世に不出べきあはれ今五年生たらば泰平の世に逢べけれども命限あれば叶難し構て々々不義の働き不可有と庭訓天正十一年七月五日に生年七十六歳にて終に空く成にけり天晴老功の武將勇謀の達人哉と惜まぬ者は無りけり宗運が末孫鍋島が臣となり今に彼家に有とぞ聞へける

宗像家之事

去程に大友の武威年々月々にをとろへしかば敵方は彌勢もまさり方々の味方募合けるほどに秋月筑紫等が鋒先日々強大にこそなりにけれ今年天正十一年癸未迄既に六年の間道雪紹運立花岩屋寶満三ヶ城堅固に守て多の敵を靡しけりそも々々筑前國宗像大宮司と云るは醍醐天皇の御宇に元祖清氏正三位に叙し中納言に任ぜられて筑紫に下り宗像三所大神奥津宮中津宮邊津宮の神事を執行してより其子孫代々神領を支配し近邊を押領し公家武に參勤して禮節勤る事怠らず後には時世に引れて専ら弓箭に携り代々武勇の譽あり此時代の大宮司をば宗像四郎氏貞と云清氏より三十三代相續き年數凡六百七十餘年に及び然るに近年は九州以の外擾亂

しけれ共氏貞はもとより其領地も廣く家臣も多く其身も武勇の性ありければ敵に侵し侮られず處々に堡障をかまへて武威を遠近に振へり始は大内家に屬し後は毛利家に従ひ終に大友家には降らず永祿二年九月廿五日宗像の端城許斐岳の城に占部壹岐守尙持を安置けるを大友方より大勢を指つかはし不意に攻て終に城を乗取ける占部は漸く遁落て同大島に渡り蟄居してありしが此度不意に城を落されし事を安からず思ひ且夕謀を廻し郎等の弘中三郎繩分彦太郎など云者を忍て敵方に遣し奉公させさま／＼計策をなして同三年三月廿七日に又許斐の城を乗取ける氏貞是を聞て占部が忠義を感ぜらる此時許斐左京亮小川彌二郎など云者平生占部に親しかりしかば力を添て謀計をめぐらし城攻の時も一番に先懸して各々能敵を討取高名をぞしたりける中にも此小川彌次郎といひし者は本姓は許斐なり父祖より許斐の城主たりしが武略計策群に超たる者なればとて氏貞これを帷幄の近臣となし常に側に置て其謀取用らる故に許斐の城をば守らず許斐の城代をば占部勤けるなり其本をいへば許斐は小川が先祖よりの居城なれば敵方に渡さん事を口をしく思ひける故に殊に此度群に拔てゝはたらきけるとぞ聞へし是より前にも所々にて武功ありて其名高く又奇代の軍勞をなしたれば氏貞斜ならず感悦して過分の恩祿を加増しけるとぞ聞へし氏貞は近年益々遠近に武威をふるひ其名四方に高かり

けり只かりそめの風の心地にて煩けるが次第に重くなり醫禱しるしなくして天正十四年三月四日行年四十二歳にて終にむなく成にける世をつぐべき男子もなく世の中兵亂の最中なれば世つぎを立べき詮義も延引しけるに其年も暮て明れば天正十五年の春豊臣秀吉九州を一統し玉ひける時繼嗣もなかりければ宗像の家を立られず數百年相つづきし三所神の社務職てゝに至て斷絶せり又立花道雪は高橋紹運が嫡男左近將監統虎今年十七歳なりけるを鑑連去年の秋穂波軍の時器量の勝れたる事を見知てより内々養子の望有けり其旨鑑連へ申入れれば再應の意儀にも不及領掌して八月十八日立花城へぞ遣しける此時紹運如何成料簡にてか有けん侍共なく中間共なく瀬戸口十兵衛と云る者只一人供してまいらせける立花一家の安堵是に不過長臣中老迄出し迎取にける

石松源五郎覺書道雪忠言事

其比石松源五郎と云し豊府の士秋月方長尾の城邊檢見の事有て來りしが道雪へ縁有者なれば對面とて立花城に立寄ける道雪云けるは豊府の老臣中へ申度子細の候飛脚をもと存折節其方被參候事幸の時也尤書札にて可申候へ共心事不殘申合る上は夫迄も及候はず能々老中へ被

申達候へとて一々物語す石松も畏て覺書を仕て老中へも具に可申達候とて口上の趣き委細に書記ける

一 舊冬生葉表より各々引歸され御苦勞に存候其以後此表一入難義仕候といへ共紹運へ申談種々才覺を以今に漸抱留籠城いたし候御弓箭差捨られ間敷候條改年に於者早々日田郡迄進發成さるべきの由年内度々仰下され候仍爰元何れも安堵の思をなし今日は々と相待處に田原親實不義を企に依て急度御退治なさるべきの由前七日の御書を以て仰下され驚入存候様體あまり御心元なく存候條御左右承度存じ急度飛脚可相越處に石松罷越有増の物語承候て先大慶に候些相過たる中事に候へども今に於者御國家一大事に相極候が浦部表御手に餘り候はゞ各々の御事も此節心地能御用に立れ名を揚られ候はんか何に一つ御大事とこそ存候勿論愚老事は頓て相果申べく候條不殘胸中源五郎へ申合候其恐不少候との事

一 宗觀鑑速死去の以後は貴國の御様體無道第一の御仕置に候其天罰に依て近年思召立れ候御弓箭一つとして勝利を得給はず候方々にて御外聞を失はれ御難義に罷成候と他國にも批判致し犬打童迄も嘲申の由に候剩秋月邊よりは御無道の條數十ヶ條にあまり書立候て近國にもてはやし候由相聞へ候定て各々も卒度は聞召及ばれ候はんが先初のヶ條に貴國の儀は申に不

及宗徒の御方々を始老若男女ともに耶蘇宗とやらんになられ寺社を破却し佛神の像を海にしづめ或は薪等にいたす前代未聞の悪行に候と書載の由に候如何様少は形もや候らん御心元なく存候其子細は御介國の中往古以來近年迄他の妨なき寺社領等を沒收せられ何の用にも不立者に宛行給の由偏く承候誠に利口過たる中事に候へども源平より以來佛神の加護を祈義理を先立正路を專にし弓箭を取候とこそ申傳候既に本條にも神社佛寺の御沙汰を專載られ候條夢にも佛神などを薪等に被成候條悪行は有間敷也愚痴盲昧の我々式が不及分別迄に候只々日本は神國と申候間公和順道を專に被成御信心にましまして天道に背かぬ様に覺悟可有之事乍恐肝要に奉存候の事

一 義統様御事若き上謁にて御座候へども政道御慈悲に御座候由承及候千秋萬歳日出度御事に候彌各々諫言を申され聊も非道の法なく候様に仁義を專に被執行候はゞ惡事は自然とある間敷候か誠に聖人賢人の上にも錯は有之と見へ申候萬一上様の御思案違申事有之候共年寄中の談合を以て縦一旦御折檻に預られ候共諫言申上てこそ可爲本意候各々の御内意には毎事不義の至とは御合點候ても斟酌計にて打暮され候事果しては御屋形の外聞不宣事に御座候是は畢竟各々御非與の至と存候今よりは能々御相談有て屋形様の御爲に宜事をば萬端を施

し諫言可被仰上事目出度かるべく候事

一親實事御退治の御議定に相究り急度人數を被向の由に候條各々馳走餘義不可有候か頃日世上批判候は物毎に紹忍氣隨を働れ宗龜存命の時より法外の勸條々有之依て親實家中の者共鬱憤を挾候處に双方純熟の儀仰談せらるゝ由に候間定て今程は相互に無異儀堪忍有べきと存候處に親實不義を企浦部表在々所々に火の手を揚足城を構楯籠の由に候然時は御了簡に不及儀に候條御退治の御議定尤無餘義存候彼仁御代々の筋目を忘屋形に對し不義の企名字の耻辱をしらず沙汰の限以外の外の振廻一門中の瑕瑾不可過之候都鄙の聞え他國の批判言語道斷の至に候然上は縦上より用捨成し宥をかるべきと候共一門中一味同心には是非上意を請れ親實切腹させらるべき事餘儀不可有候か況や御下知を加られ候事幸の儀に候間各々時日を移さず馳走を勵し候べし不及申候といへども自然御油斷遅々候はゞ彼惡黨等足城普請等成就せしめ兵糧等取込候はゞ自然は内輪より内通の者も有之か又は不圖親實に同心致候浦邊衆も候はゞ萬一御加勢に成る事もや候べき片時も御油斷有間敷候若も彼惡黨等御下知にぞくし候はゞ其響を以て方々御安利に住せられん事疑不可有候若又錯て御手に餘り申様候はゞ方々惡事増長可仕事是又必定に候公私能々御精被入御才覺目出度かるべく候中に不及なが

ら各々自身御手を碎かれ安否を決せられん事此節に候此四五日以来方々より申來るは秋月龍造寺申談し親實てに至加勢と號し種實隆信今裡一味候二三ヶ國の者共相應々々出勢致し秋月表へ馳集の由に候親實加勢のため浦邊表へ打越候共又は何方への行共校量に及ばず候若は日田玖珠邊の御人數を釣留可申行にてもやと沙汰候然ば親實不義の企は兼日より方々申合ての事に候此間親實被官津崎善兵衛入道年内付廻り亦改年にも度々秋月へ罷越秋月よりも上野四郎兵衛と江利内藏助と申者切々親實へ差越由に候條種實内縁の續を以て御詫言の旨共に候やと内々存候ところに彼惡逆を相談致し候ことは近日こそ存當候誠に無念千萬の至也當殿様御代始ての御弓箭に候條早々御取靜候て御外聞になさるべき事年寄中面々の御役と存候如此申候とて各々一身難義に究り迷惑の歎息とは少も思召まじく候愚老事も七十に及行末僅と存候其上一城預申候て名字の届に可致段は一命露塵程も不惜候只々若き上臈様御氣遣外聞失はるべき事無念さの餘りに申事迄に候事

一屋形様年内靈山の麓秋岡に御座を移さるゝの由に候西國へ出張の首途御吉方の故にて候哉殊に御簾中も同前に御座候由風聞候暫時も御座を移さるゝ處柄等の儀は各々よく御談合有べき事と存候殊に御進發首途の段は御旗奉行其外供の御人數格護衆迄も其役々筋目相定有之

儀に候間定て先例に任ぜられ候覽是以申に不及候秋岡は御吉方迄にて社候へ御宿所等然々難有候はんが如何に存候是も各々油断と存候惣じて御座所等物輕候へば諸人の心持堅固ならずと存候今度浦部表に人數を向られ候はゞ立石竈門邊迄は御自身出馬被遊候て下知を被加候はてはと存候近比忽卒の申分ながら吉凶の二つに相極り申候事を御手先にて大形に下知を被成候ては彌々可爲敵案と存候御分別の前に候事

一道輝に申候先年原田親種を御調略に付て御遺恨の旨御座候つるや正直に承り候はば其節子細可申分儀に候を御断りにも不能八朔御嘉例の進物突合せ置れ當日外聞を失候條餘りに無曲事に存其後は確と不申承候其後道易より度々御入魂に預誠に憑敷事忝候といへども一度外聞失候はば萬端不入事と相究め道易の御異見をも違背いたし候つ至今は既に國家一大事の砌に候條此節和睦し御用に立候はゞ子孫の覺にも罷成べきやと存御中直り申入事に候心參會可申事は死出の山三途の河たるべく候如此中事八幡愛宕九萬八千の軍神も御照覽あれ御静鑑の後御取合せに可預など、欲心を挾申儀に非候當城堅固に持支萬に一つ運を開き候はば各々御取合せに預からず候共諸人の覺に候條御加恩の事餘儀不可有候か若又七十に及未練を構候はば子孫も面目を失のみならず闕退させらるべき事必定に候はん千言萬口も不入

儀に候かまへて各々の御事も内々如何體の御事に候とも萬端を施し無二無三に仰談せられ此節御用に御立候て御國家の外聞をつくられ各々名を揚らるべき事後代迄目出度かるべく候近年都鄙の諸大名れき、其家を失ひ上下ともに滅亡に及ては傍輩等を主君と頼み或は牢人乞食の體に被成輩多く見へ候御存知の如く大内家の事陶相良兩人不和に成候根元は陶申所々道理至極に候處に義隆無思慮に依て無道を企候相良を最負して悉く毛利の案に入候事眼前の義に候古今の體を見合せ聞くらべ候時は火の中水の底迄も順儀を背かず屋形を重んじ申され傍輩中世話の題目等指捨られて随分國家を執し申されはと存候事

一浦部表の儀歎息の餘りに筥崎に實相院慶林と申易の上手候間御人數を向らるゝ吉凶の儀占せ候處に急に取懸らるゝ吉事の由顯然の條書付進上候天道の處に至ては疑有べからず條々千秋萬歲に候

一頃判致候は近年御心安召仕はれ候古庄右京進入道兄弟朽綱市充雄城名字の者彼是三四人勘氣を蒙り國退の由に候又一説には年寄中の御申に依て右の四人御許容をはなれ候様にも申候如何の子細に候や心元なく存候若き上臈様御析檻などこれ有共時分柄と申殊に寸尺にも不足少身の者共に候あいだ各々御詫ごとを遂られ御赦免候様に御取成有度儀に候か若亦世上批

判の如く各々御申に依て御勘氣をかうむり候はば一入心元なく候彼等以下の少身者共させる
緩怠難有候奉公の筋目仰含られ堪忍候はゞ四人事も別儀不可有存候連々御油斷故無思慮
の者どもはあかりまちに差出申迄に候右四人於筋目者無餘儀者どもに候少身とは申ながら
御代々の者どもに候條相應の御用には立可申間能々被加析檻召出され候様に御取合有度儀
に候惣じて召仕はれ候者御氣色次第代々の者共誰にても御心安く召仕はれてはの事に候御氣
色に叶申たる計を各々御取成しなど候はば上下の法例不可然候勿論緩怠の厚薄に依て遠方
よりは中々難計候事

一鎮連は申候先年長尾にて愚老手を碎候砌後に付候て遠手火失に血垂され候此節の儀は御國
家御大事の砌に候條隨分手前を相勵鎗疵を蒙り名を揚られし事不可有餘儀候自然未練の覺
悟に於ては氏神八幡愛宕摩利支天も御照覽あれ愚老詰腹いたし惡靈に罷成候て子孫を斷し
可申候構て々々捧一命被勵粉骨事目出度かるべく候事

右の趣可申入衆は志賀道運一萬田宗俊戸次紹珊志賀道雪朽綱宗策戸次鎮連白杵鎮順戸次宗
傑田北紹鐵志賀道易朽綱宗勵一萬田宗慶此人々へ委細に口上にて申候へとの事なり石松畏
りて二月十六日立花を打立豊府にかへり右の衆へ委細に申達し亦是覺書をも見せ候へば各々

披見致し一々至極の儀なれば捨置べき事にあらずとて此覺書を宗麟の御目に懸口上の趣をも
具に申達しければ宗麟一入甘心有て誠に仁義の勇者とは道雪などをこそ云べけれ侍たらん者
の手にすべき事哉とぞ云れけるまことに道雪の英才忠貞後代の義士を泣しむ此時大友の家
漸傾き譜代新參心を變じ我家相繼の爲までにて夕べの敵に朝の味方と風草の思ひをなす折節
に唯一人大敵に圍れても銳氣猶盛んに大友の政道不正事を歎き自身の滅亡をば塵芥ともせ
ず誠に忠臣と云つべし所々の合戦に勇威を奮へども前後二心なし昔は楠正成眞忠を盡され子
息長く南帝を守護して強敵を撥ひ一命を委て猶不足とこそ聞にし今の道雪の節操眼前に見
處なりと諸人皆感じけるとなり

田原親實逆心事

大友宗麟の執權田原紹忍が一類年來驕を極め諸人の恨を受けるのみならず主君大友の武徳を失
はれしも彼を用ひ政道を執行せし故なり剩今年秋田原右馬頭親實逆心を企浦邊に楯籠り秋
月と心を通はし既に敵の色を立けるこそ淺間敷けれ其由來を委く尋れば宗麟の妹有けるを田
原右馬頭に合すべき由云出しけるが如何成者の惡口にや右馬頭は矮陋無骨の男なりと申ける

を妹此由を聞て右馬頭方へは務叶ふまじきと答に云ける間宗麟も力に及ばず此縁組を止にけり右馬頭安からぬ事哉定て此も紹忍が取成しにて嫡家を亡し領地を掠め我一人に成んと思ひ宗麟の前を悪様に言ひつらんと推量して彼此恨み思ひ籠城しけるなり是に依て豊府の騒動大方ならず大友の父子相談有て遠境の徒は暫指置共藩屏の事をば遅々すべきに非ず各々馳向て攻落すべしと家老の面々侍大將に下知しけれ共日比田原が一類共威勢強かりつる故か亦宗麟の執し思はれける所をさみしけるにや有けん某進て向べしと云者無りけり田原紹忍申けるは親實事は某同姓の中にも惣領筋目にて代々御厚恩を蒙り當國に至て過分の所領候へば大勢の家來を扶持し候殊に家久敷者共にて一命を輕じ名を惜者數多候然れば輒御征伐難成かるべし田北大和守入道紹鐵に今度の大將仰付られ可然候はんやと申ければ宗麟も此儀尤と思ひ急ぎ紹鐵を召候へとあれば飛脚を以て呼出しける宗麟對面して右馬頭退治の爲人數共を指向る間其方大將として彼地へ發向可仕とぞ申されける紹鐵如何思ひけるにや兎角の返事をも不申まかり立て近習の侍清田主馬と云者を頼て申けるは只今御前にて田原右馬頭征伐の大將に越候へとの御事候此儀に於ては愚老畏り難存候此段を御邊に頼入候愚老が所存を御執成給はるべし愚意と云は我等が事先祖より數代御厚恩を蒙り候故に代々君に忠功をも盡し候

事其隱なく候某も壯年の時より數度の武功を遂御恩も不淺候實子なきに依て弟にて候相模守鎮周に家督をゆずり候へば相模守も相應の忠節を仕り日向御發向の先陣に罷向ひ戰死仕るに依て家來與力の軍兵まで一人も不殘討死仕候只今愚老隨身の者としては老衰の輩或は若年の者共にて軍用に難立候相模守養子にて候田北彌七郎統員は美統公の御近習に宮仕致させ候へば相應に家頼共付置申候去共今度は上意と申し老後の思出と云旁々以て罷向ひ一戰を遂討死仕り度事に候へ共眼前田原紹忍は日向の御陣にも御名代を承て罷向はれ候へば一命をも抛て忠節を抽らるべき處に左もなくて味方大勢の討死をも見捨一戰にも不及多勢を引具し逃かへり候大分の御加恩を蒙り多勢を扶持仕たるも何の御用にや立候べき縦上意なく共同性の不覺人右馬頭如きの惡逆無道の族をば此紹忍に仰付られ候べきと手前より進んで可申上處に存の外の趣に候今度親實討手の大將は紹忍指詰に候御機嫌を計ひ仰達せられ候へと廣言云散し駒に鞭打て居城をさして歸けり此紹鐵が居城は熊群山東岸寺と云る山寺に籠居してぞ居たりける角て清田は紹鐵愚意の趣き具に言上申ければ流石の紹忍も御前にて顔うちあかめ暫は物をも申出ず良有て齒がみをなし申けるは存外なる紹鐵めが申様かな老衰の身として右馬頭にも無道を勸けると覺候同意の逆心者故に愚意に事よせ討手を辭し申すと見候と言葉を

巧に申ければ宗麟も立腹不淺き此よりして終には讒言して失ひけるこそ淺間敷けれ

親實滅亡事

斯て親實は秋月が長臣坂田市介高橋が郎等伊藤外記其外城井長野等が勢迄招寄不日に多勢を催集合戦の用意專の由其聞有しかば大友義統云けるは斯る大逆の族を宥め置に於て當家の威風彌輕く成て家人にかろしめらるべしよし大身の者共進兼ば旗本を以て誅伐すべしとて旗本の士大將宗像掃部大鶴河内を大將として馬廻の侍二百騎都合二千餘の勢にてぜんぶがたの此方に陣を取て様子を窺見けるところに田原が家人如法寺親武秋月が家人坂田市介高橋が郎黨伊藤外記彼等三人を大將として八千計の勢にて高田がなぐゐに打出て畑統景が城に押寄川を隔て戦を始鐵砲を打かけしかば城中にも爰を先途と防鐵砲を打合ける此動搖夥しく聞へしが其朝は霧深くして物の色さだかならず掃部諸卒に向て申けるは親實一手の勢か亦秋月等が勢加はりけるか霧晴ねば見へわかずと悔ける爰に上野彌平次と云者其比勘氣を蒙り出仕を止て居たりしが黄河原毛なる馬に乗て後陣に忍居けるがつと懸出鞍坪に畏り其見て參候はんと申掃部聞いていや々々軍は大事の物にて候御邊懸向はれなば馬の足音に付て敵をそひ來べし敵に

氣を付て惡かりなん只是に控へられ候へ打出んずる處を追散すべしと制すれ共彌平次耳にも聞不入鞭鐙にて懸向敵の陣を見渡せば親實が勢と見へて朝霧の晴間より見へたり其外高橋秋月城井永野等が勢と見へて金のがひ鷹の羽のあひじるしひめき渡て思々の出立にて爰彼に打立て其勢大略一萬計も有らんと打見へて高田かなだゐに充滿せり上野急て懸戻し敵は田原秋月高橋城井長野等が勢と見へて候と云も果ぬに敵早七八千の勢にて鯨波を作て討て懸る宗麟大剛の大將なれば少も不騒二千餘の勢を前後左右に立て嚏と喚て掛合せ攻戦ふ親武坂田伊藤馳回て敵は小勢なるぞ真中に取込て討取者共と下知をなす豊州旗本の勢も中に包まじしと東西南北に割て通り追つ捲つ卯の刻より辰の終迄水になれと攻戦上野彌平次一番鎗を合せ能武士の首一つ取て下人を呼急此首を田原紹忍の目に掛よ軍の勝負は未知候へ共今日の一番首を取候と申せとて下人に渡し又大勢に懸入ける處に大鶴宗像荒手を入替喚叫て攻戦ふ坂田市介伊藤外記鎗下にて討れしかば如法寺親武戦ふに無けからして鞍懸の城に引籠る城井長野等が勢も散々に落失ければ敵四百餘の首を切掛勝鬨を作て歸陣せり其後は秋月高橋城井長野等も出ざりければ親實力を失ひ鞍懸の城にて終に腹をぞ切たりける扱も今度上野彌平次一番鎗を合せ敵數多討取り大鶴河内を我馬に乗せし事共大友の感悦不淺して則勘氣を赦免せ

しめ今度の働諸人に超たる由感状をぞ下しけるされば彌平次此間鶴見の權現に七日籠ける武勇の志神も納受有けるよと人々申合にけるかくて鞍掛の城には宗麟の三男親家を入置れけり

田北紹鐵讒死事

田北大和守入道紹鐵は熊群山に籠居したりしが田原紹忍に耻辱をあたへし事憤深かりければ色々に讒言し紹鐵事退治延引候はゞ亦々大事たるべきの由を中す宗麟も元よりにくしと思はれければ急討手を差向べしとて大將には志賀常陸介鑑隆朽綱三河守鑑康一萬田駿河守鑑實戸次山城守鎮連狭間左衛門大輔鎮秀を大將として其勢一萬五千餘にて彼地へ發向せしむ大手は小國に陣を取搦手は狭間左衛門大輔を大將として三千餘騎にて鹿路木を向ひ小狩倉に陣を取にけり紹鐵は元來無勢にて其勢百騎にも足ざりければ熊群山の要害とは云ながら防戦ふべき様はなかりけり去共難處の山道なれば寄手の大勢攻のぼるべき様もなく只徒に日を送り守り場てぞ居たりける志賀朽綱戸次一萬田などは紹鐵と他事なき間に有ければ何れも紹忍をうとみ果我々も今日角て有ばとて明日誰にか責らるべきと我身の上と思はれて宗麟の所存迄方憤しき事に恨けり去とて主命なれば是非なく責支度にて有けるが紹鐵に内通しけるは紹忍

事日向の耳川にて臆病神に引立られ大勢の味方戰死するをも願ず逃しかば屋形の勘氣も深かるべしと思ひしに存の外に引かへて結局前々よりもいやましに出頭す故に紹忍が驕慢日に倍募もて行けば國家も危く末々とても頼すくなく覺候我々事貴老に至て恨は少も無候數日の長陣難儀に及て迷惑候事御推量の外に候今度貴老事當城にて討死か亦是御自害なども候はれず共先づ一旦筑前筑後の方へ落行給はゞ時節を待て居にも逆心無事をなげき候はゞ行末目出度渡り玉はん事眼前たるべきと調略しければ紹鐵も此儀尤と思ひ夜中に熊群山を立出其勢五十騎計にて筑後の方へ心指てぞ落たりけり斯りし處に日田郡にて財津坂本等落人と聞付て大勢を以て追懸井手口松原村にて散々に戰ける紹鐵は小勢にて防べき様あらざれば是迄なりとて腹十文字に搔切て松原村の露とぞ消にける相從し五十人の者共も數刻の戰に一人も不殘討れにけり財津坂本急ぎ此由を豊府へ注進申しければ熊群に指向られし四人の大將よりも紹鐵欠落の由を注進し不殘歸陣したりけり上下共に人の上とは思はれずとて皆々悔怖れけり此よりして内々薩州方より宗麟をうとみ紹忍と中惡敷輩に内略を以て調議しけるを幸の事に思ひ親子兄弟にも深く隠して島津へ内通しけるとぞ聞へし是偏に紹忍が佞心より起ける事なれば怖し惡しなど云計なし擇子莫如父擇臣莫如君と左氏傳にも見けれ共此宗麟はいかなる

武運の究りにやかゝる不明の至りと淺猿かりつる事共也

熊群山事

右て紹鐵欠落して終に討れぬるよし聞へしかば紹忍悦び無限狹間左衛門方へ申遣けるは紹鐵居城の熊群山は當家に至て逆意の者の住し山なれば急ぎ坊屋をも焼失すべきのよしを告たりける抑々此熊群山東岸寺と申は人王七十年代後冷泉院の御宇天喜年中に奥州の貞任宗任退治の爲伊豫守源家義を討手に指下され九ヶ年滞在し康平五年九月十七日貞任をば誅殺し宗任を生捕にして都へ歸陣有けるが宗任をば豊後へ遠流せらる終に國人と成て子共數人儲しが末子に安部三郎實任と云者あり此實任日夜の隙もなく山河の獵漁をのみわざとせり或とき當山の嶺に熊共多く群集りけるを射取んと思ひ岩石を傳ひ登りければ數多の熊共四方へ逃去けり三郎思けるは尋常にて熊の加様に集り居たる事を不見聞不思議なる事よと思ひ其集り居たる處に立寄て見ければ彌陀藥師觀音の三尊出現し玉ふ實任奇異の思ひをなし三尊の像を守護し奉り宿處に歸り尊敬しける處に又或夜の夢想に老翁來て實任に告て云く我は是彦山大權現也當山に影降すべきなりとて失玉ふ是に依て實任發起信心して當山に社を建立し熊群山大

權現と崇奉れり此山は隣里遠くして人音まれなり西北の二方は殊更山高くして岩石雲に聳て立登る八葉の峰峨々たり老松古柏千年をのべて翠を重ね千仞の谷淵々たり碧岩圓崖萬代に動かずして苔むせり霞に咲櫻花岩間に照し躑躅まで佐保姫のさらす錦かとうたがはる七曲八町坂道の邊の青楓秋は紅葉の色深し雄鹿鳴なる夕霜に木の葉も漸々散積り岩間の雫凍ては木末に掛る岩すだれ峰に群たる猿の聲までも人間の境とは思はれぬ大河ふもとを廻りて東に流たり此水上は黒嶽山とて往古より人倫絶て仙家有と云傳る其巔に男池女池とて大蛇の栖なる池あり此池より流落る河なり山上の本尊は彌陀藥師の二尊也北山權現と申は彦山の影響にて本地觀世音にて渡らせ玉ふ道の邊の八社の神は參詣往來を護し玉ふとかや彌陀如來は超世の悲願新たに接取の光明專念の行者を照し玉ふと承る藥師如來八十二無比の誓を起し解脱の良藥を與へ無明の重病を救玉ふなる觀世音菩薩普現三昧の力を以て六道の衆生を化度し三有の苦趣を救ひ玉ふ瀧の護王は地藏菩薩代受の悲願賴母敷今世後世の引導哉といともたつとくぞ覺へける一の護法は不動明王利劍を帶して生死の魔軍を破らせらる斯る有難き靈驗の名山なれ共田北紹鐵久く籠居の事なれば住持の僧も何地ともなく退散す剩へ紹忍がはからひとして神社僧房一字も不殘焼失すべきのよし下知をなす然れ共此山には摩利支天の住給ふよし申傳

へて折節には天狗倒し夥しく岩嶽も只今崩るらんと思ふ程に震動す或時は夜中に時ならず嵐はげしく吹出て火王山上に飛行し大木古木も吹倒すらんと聞ゆ然ばとて夜明て見るに何の事もなし永々の在陣にて寄手の人々眼前に見及たる事なれば各々彼是に恐惟して誰有て山上に登り焼拂はんと云者一人も無りければ其儘にすて置て狐狼の伏處と成にけるこそ淺猿ければ其後は居人なければ棟梁霧に朽門戸嵐に荒果神は人の敬に依威を増人は神の徳に依て運を添とこそ承るに如何に成行世の中ぞと萬民歎悲みけり

寶陀山淨水寺炎燒事

熊群山寄手の軍兵思々に飯陣しける中に奴留湯左馬介と云し者は由布院に在て大身なり手勢三百計引具し由布院さして飯しが寶陀山淨水寺の觀世音に參詣し佛前の御戸を聞き見て飯るさに何とか思けん下人共に下知をして本堂に火を掛たり折節風烈しく吹て庫裡方丈山門鐘樓に至迄不殘燒失す佛像は申に不及佛具法具に至る迄燒失せり抑々當山淨水寺の觀世音と申は靈驗新にして一度歩を運びし輩は大慈大悲の利益に不預と云事なしと承る此の本尊は三重の有智山の觀音豊前高須の觀音と三處同一躰と云傳へたり今此時に當て如何成因縁にや跡

儂なく燒野が原と成ぬる事こそ不思議なれ其科にや奴留湯左馬介程なく熱病を請て焦死にぞ死ける子孫迄なく絶にけり當寺は人王三十三代敏達天皇の御宇に豊後玖珠郡田野の朝日長者海部郡三重の眞野長者とて富貴身に餘り一千餘町の田主たり淨水寺は朝日長者が祈願にて日羅大士とて百濟國より來朝の異人を供養して建立したりとぞ云傳へける

薩州内略事

大友義統は家督を續府内に在城しけれども年も若く父宗麟堅固なれば自分に政道を執行ふ事なく何事も白杵よりの指圖をぞ請にける宗麟は紹忍と云大倭人を股肱の臣と頼思により紹忍が威勢年々募もて行餘處には人も無様に振舞ければ家老の面々を先として幕下の大小身共に白杵への遠慮にて指圖の外は府内へ出仕も不致府内には義統父の命を重んじ國家の政道も執行はざれば威勢も軽く見へにける自國他國の侍ども紹忍を猜み君を恨み他家に心を通じける先年豊後勢日向にて殘すくなく戰死しける後は豊後方は氣をくれになり薩摩方は日を逐て威を振ふ上義久は大友を攻亡し九州を一圓に治取べしと縁を求便に隨て豊後の商賣人を薩摩大隅の内へ招寄此縁に付薩摩より歴々武道功者なる者を商賣人に作成て豊後へ差遣す牧出の

駒を思の外直に商賣しける程に豊後方には是を好事と思ひ重ては急て一段能駒を立て來れな
どして商人に引出物とらせける間是を幸の事にして彼商人府内白杵迄も出入りて城々の案内
を委細に見届人々の志をも見聞しけるが或は宗麟に恨を合又は紹忍が所存を猜て君への忠功
も絶殊に紹忍より尻目に懸られたる族は事に依て我身の大事も出來るか危思ふ人々には彼
商人猶も親くたより入て島津が内略の趣手を盡して謀ければ大友の家老大身の侍に至迄内證
は義久にかたらはれ何事も出來れがしと思へる族多かりけり

筑紫廣門岩屋間者事

天正十三年甲申二月八日の事なりしに筑紫方より茶商人を仕立て岩屋の城へ指遣し卯犬と云
物を調らべ忍びて處々の塀際櫓下又は床の下縁の端などに捨置たり城の者共思も寄らで有
けるに夜更て方々より燃出たり析節山風はげしく吹懸しかば岩屋の城只一時に灰燼と成にけ
り夜中のことにてはあり女童は烟にむせび行方を失ひ焼死けるも多かりけり昔日尊氏將軍六
波羅の館に火をかけ新田義貞の鎌倉を焼亡せし形勢も角社と思やられ物の哀を留けり斯て狼
烟天を掠めしかばすはや岩屋の城こそ焼落されぬるとて近隣の付城は申に不及筑紫家の者

共待掛たる事なれば悉々く驅付乗崩さんと叫喚て攻寄ける去共城代屋山中務少輔智謀人に越
飽まで心剛なる者なれば早口々へ觸廻し此節持口を堅固に支られ候へ若被破なば一同に焼
城を枕にして討死せよそこを少しも引なと嚴重に下知をなす是に依て流石の筑紫勢も左右な
く乗破る事不叶して互に鋒を防戰けるところに高橋紹運寶滿の城より一騎驅に人數を出し
笠の手より廻り寶滿より後詰の如勢有ぞ心安く防げや者共と高聲に呼はりければ城中の人々
是に力を得て勇み進る間筑紫勢も叶はじとや思けん棄策を打てぞ引にける城の兵勝に乗て討
て出きたなしにくし返せもどせと云程こそあれ所々つまり々々に追付攻詰散々にこそ討捕
ける中にも今村五郎兵衛其夜の一番高名なり其比の批判にも中務ことは元來勇氣智謀相兼た
る者とは申せ共就中今度の働はためしすくなき事どもとぞ申ける是に依て豊州屋形より中
務少輔へ感狀を送りける其文に

去八日寅刻筑紫以行入忍岩屋城燒立既に敵等雖一切候其方勵粉骨數百人討捕當城無異儀之

由忠義之次第感入候紹運申談一稜可賀之條彌馳走可喜悅候恐々謹言

二月十七日

義統判

屋山中務少輔殿

筑紫廣門岩屋間者事

二七五

赤星安房守含恨事

筑後の國柳川の城主蒲池鎮並が妻は肥後の國赤星統家が妹なり去る天正九年に鎮並に一族まで隆信に亡され赤星甚だ恨を心底に含ども隆信に質として嫡子を出し置ぬれば力不及打過て時節を待て居たりけり隆信も其心根をや察しけん佐嘉の城に召寄て事の實不を探れとて比は天正十一年參禮をぞ進めける赤星應諾しけれども兎や角と遅々に及びしかばさればこそ統家が返心疑ふ處なし行向て糺せとて成松遠江守信勝木下四郎兵衛昌直を赤星が館に遣しける折しも統家は他出して留主なりけれど此儘にては歸られず猶亦質を取んとて後堂に押入て八歳の女子を相誘ひ佐嘉に具してぞ歸りける隆信は是を聞き赤星が他出は我が使者に會じとの結構にと態と隠れしものならんにくき奴原が所存かな幕下の者の懲しめにせんとて人質に取置し新六郎當年十四に成けるを今の女子と諸共に筑後肥後の界なる竹片原と云處にて磔に掛しこそ無慚成ける次第なり警固の武士共憐て念佛をすゝめ西向になをしければ新六郎我面て西にな向そ赤星の父母に後を見せじと思へば故郷は東なれば斯讀けるにや哀と云も愚なり是に因て赤星は隆信を恨る事骨髓に徹れども無

勢なれば力なく島津兵庫頭が其の比八代に有けるに陸はだしにて走り行しか々々の次第にて無念と云も餘有り此上は我身を島津に任するなり如何にもして隆信を我に討せて給はれと一向に打頼み血の涙をぞ流しける義弘是を聞て最と領掌し必本意を遂さすべし心安く思へとて懇に饗應し幕下となして置しとかや

有馬叛龍造寺事

爰に肥前國高來郡有馬の城主有馬修理大夫義純入道仙岩は天正の始隆信に降參し一族島原大學士黒備中守と云兩人を質に出し亦仙岩の娘を佐嘉の城に差送り隆信の長男民部大夫政家が婦人となす是により暫く無事の交なりしが天正十年に至て又有馬龍造寺鉢楯とぞなりにける事の起りを尋るに去る九年の五月隆信蒲池鎮並を佐嘉に招き寄せて忽ち討果し直に居城柳川に押寄せ鎮並が妻子眷屬從類に至るまで悉くほろぼせしは哀れなりける事どもなり鎮並に男女の兒四人あり三人は害せられぬ嫡女は乳母に扶られあやうき命を通れつゝ少しゆかりの有馬なる修理大夫を頼んと海を渡り山を越漸々たどり着けれ共定めがたきは人の心あらはに名乗出て後悔ることもやありなんと暫らく様子を見合せて筑後方にて賤き者なりと偽て奉公を

こそ勤めける其名を徳女と申けり柳河に有し時は深窓の内に長なりあらし風をもいとひし身なれども梓弓いつしか今は引替てかゝるなげきを島原や高來の嶽に立烟り胸の思ひにくらぶれば何れかうすき夏衣馴れぬ仕へに日を重ねうきを身にしる秋立て織女祭る比になりぬ城中の女あつまりて願の糸の一筋に色々の衣を掛る徳女は獨り打しほれたる氣色なりければ何とて衣をば掛ぬぞと伴ふ人の問ければ

いざゝらば何をか借さん七夕に涙の外は身に副ばこそ

仙岩此歌を聞よりもさればこそ我始より只人ならず思ひしに歌の姿心ざま哀といふも愚なり父母は誰なるらん何故さのみ隠すぞと頻に尋問ければ徳女今は忍兼始終りを語り出て親の敵を討たき由涙ながらに頼みけり仙岩大きに驚きて鎮並の息女とは夢にも知らで過ける無禮の程こそ本意なけれ鎮並と仙岩とは本より宿縁の有けれども路海山を隔てしゆへうときを中の習にて打過けるこそくやしけれ我れ隆信を討取て汝が心を安ぜん今より後は仙岩を一向親と頼めとて簾中に傳き入れ嫡孫何某が婦人とぞ定めける是よりして仙岩は甚だ野心をさし含み隠に薩州を頼みしかば島津も是を幸とやがて許容ぞしたりける爰に有馬が一族に深江伯耆守其の子下野守は同所深江の城主なるが是事を聞よりも度々來りて諫しか共仙岩曾て不肯深

江力に不及して親族を引離れし隆信にこそ通じける仙岩安からず思ければ天正十年の十月より薩州の勢を招き寄せ深江の城を責圍む城主の守り固き上安徳島原の將曹等一つに成て相戦ひ多く日數を経る内に翌十一年の四月になり安徳の城主安徳入道宗泉俄に心を引替て島津勢と一味して深江と佐嘉の通路を断にける薩摩よりは新納刑部大夫伊集院肥前守樺山播磨守河上左京亮福島新兵衛間宮平馬助蓑田右馬允蓑田は八代の子等七千餘騎を率ひて有馬安徳の勢を助て深江の城を攻る事晝夜已に十八日城中の危き事唯線の如くなり龍造寺隆信は早く後攻を差越せとて嫡子民部大夫政家に吉田嬉野徳島犬塚原永田辻上瀧横岳安武等を始めとして宗徒の者共に數千騎を相副てぞ遣しける政家高來郡に發向して薩摩の勢に搏懸る此時城よりも切て出て篠木を削り鏑を割互に死をぞ争ける其中に深江が土村吉雅樂と云者薩摩の大將新納刑部と鏑を合せ已に刑部を突伏せけれども村吉も創を蒙て首を切事かなはざりしを横兵鎮貞が土古館播磨と云者走り寄て刑部が首を打落す蓑田平馬允も討れ河上左京は深手を負ふ城兵秀島隼人宗彦兵衛中島將監以下より戦て首をとる其外佐嘉勢はげしくして薩摩の勢を追拂ふ薩摩方終に咏へずして肥後を差てぞ渡りける政家士卒に下知をなすは有馬は小き城なれば重て責るに安かるべし先づ薩摩の勢を追んとて續て肥後に駆せ向ひ南の關を本陣として先鋒は玉

名に群り合志に屯し高瀬山鹿に相働く其勢都合三萬餘兵此時島津兵庫頭義弘も八代より出て對陣すかゝる所に秋月長門守種實來りて兩陣を相諭し肥後の國を二つに分け双方より領すべしひらに軍をやむべきよし様々取云ければ和議既に調り島津八代に歸りしかば政家は筑後に引返す隆信須古にて是を聞政家が不戰して和談しつる事を深く悔しとかや

薩州勢有馬後詰事

去程に有馬仙岩は隆信の氣象をば兼て知りける事なれば我叛心をなすからは緩々として有るべからず不日に來り責られん事案の内と思ふなり大勢に圍れなば後悔すとも甲斐あらじと先づ薩州に价を馳せ重て助け勢を給つて我が家の滅亡を二度ひ救ひ玉われと言葉を盡して云送る扱又深江伯耆守が今までこらゑけるこそ念なければいざ伯州を責潰し彼が城を乗取て薩摩の大軍入れをかば幸地の利は堅固なり隆信との合戦に餘り不足は有まじと按じすまして軍勢を相催す一族には肥後の國天草郡の志岐民部大輔天草伊豆守島原安德布津洞崎の群士等馳せ來りければ天正十二年三月半又深江の城に押寄る城には深江伯耆守同嫡子下野守を初として隆信よりの加番馬場横武一手になり爰を専途と搏戦ふ是より前伯耆守は仙岩が謀近隣の風聞を

一々に注進し深江の城を落されなば由々敷大事なるべし隆信出馬あるべしと急を告てぞ遣ける隆信は須古の城に有けるが去年政家を遣して深江の城を救はせしに薩摩勢には勝しかども仙岩が智なれば鼻に弓を挽かねて肥後より軍を班しける其親愛を打捨て又薩州と内通し重て師を興す事甚以て奇怪なり扱又島津義久も肥後分領の會盟は昨日今日かと覺ゆるに間もなく有馬にくみするかやかゝる不義の者共を討こそ道の本意ならめ先づ有馬を踏潰し直に薩摩へ押涉り鹿兒島を屠んとて急に兵をぞ集めける島津方には仙岩が使を聞一族老臣呼集め僉議評定とりくゝなり義久申しけるは龍造寺隆信と今又和平を破ん事不信の謗りを恥れども此度有馬を救はずば忽ち仙岩討るべし窮鳥懷に遁れ入る時は獵師も是を助とかや且新納刑部をば深江の城にて討せし事思へば無念の次第なりいづれ救はては叶ふまじ乍去隆信は當時無双の猛將なり所は自國の案内者勢も定めて二三萬はあるべきぞ中々に能と小勢を差向けて必死の軍可然時の行は機に臨み應ずる物なれば將の心に任すとして義弘の弟中務大輔家久を代將とし伊集院右衛門大夫忠棟新納武藏守忠元を副將とし猿豆越中守川上左京亮其外宗徒の者を精り立三千餘騎を差向る赤星安房守統家は嚮きに最愛の子共を隆信に殺されし鬱憤を散せんと骨隨に思ひ籠島津が幕下に身をよせて時節を待ちて居たりしが此事を聞よりも時至りぬと悦

び様々に巧言して出勢を相勧め己れも手勢二百人家久が手に屬しけり角て島津が軍兵は三月廿一日肥後の國八代の浦を出船し三角の迫門を通りしに折節大風吹出し風のまに／＼放されて同國郡の浦に吹きやられ續て浪風荒ければ廿一二日爰に滯留す有馬が運や強かりけん同二十三日の未の時より吹かへて東南の風になりければ悦び船を乗出し眞帆にひかせて行程に已に其日の初夜過に高來郡洲川の浦にぞ著にける三將即ち使を馳せ有馬の城に告ければ城中の者共は轍魚の雨に逢る心地して悦事限なし城主よりも价を副隆信數萬の人數にて明日城に寄すると聞當城要害堅固なり一所にて防戦有べしと謝禮をなして返答すされども島津義久は情思慮を回し使を返して船より下り所の者を呼集地形の様子を尋聞き軍配をぞなしにける我が輩僅の小勢にて城を守る者ならば隆信が大勢取圍み本國の通路を絶ち士卒の心屈すべし角て日數を経ならば兵糧矢石竭果て城は自ら陥るべし所詮今度の戦は手詰の勝負心掛け必死の軍に極むべしと志を一決し有馬の城より五六里も東なる森岳に出張し中軍の旗を立西の山際東の海邊に一千宛の人數にて三將三處に陣を布く左右の陣は旗を卷き物陰に士卒を隠しけり中務令を出して謂けるは隆信に向て尋常の如く軍しては叶ふまじ渠矢を飛し鎗を出すとも大將の下知なきに矢石を射放つ事なかれ早や討てと下知する時一度につらねて打放せ鹽合能きも

のならば二放しは放べし三放しとは打べからず二放と齊しく弓鐵炮を抛捨て刀を抜て切かれ是に依て玉藥多く持事無用なり三放は打せねども千に一つも用ある時の爲なれば三放迄は持たせよとて其外の矢柄玉藥舟の中にぞ殘しける扱て鑑合せし時左右に心を移さずして眞直に突懸り突伏せ切伏せたりとも首を取事無用なり弱る敵をば打捨て自餘の敵に突懸れ必ず組打すべからず吾馬驗を目に掛けて夫より先に出て進め此高名に定むべし敵の大將と見掛けなば無二無三に切かゝりて討留めよ馬驗の役は大事なりと究竟の卒を撰び出し打死手負の代りと數多の人數を増備ふ總じて下知を背く者味方たりとも打捨てと法令甚だ嚴重にて扱舟の櫓楫をば盡く取上げて遙の山に運ばせけり是は總軍に必死を示す手段なり兎角しける其内に夜も明方に成にけり

卷之十二 有馬合戦之事并隆信落命事

龍造寺隆信は已に有馬を討んとて旗下の諸將を招きける鍋島加賀守直茂は其頃柳川の城に在けるが急ぎ須古に馳來り隆信に申すやう今度の御出勢は御延引しかるべし尤小敵の有馬にては候へ共彼しるは地の利堅固にて味方大軍たりとも總勢をたてん所なし小敵をば侮事勿と

こそ申傳て候へ若又俄攻にするならば敵は却て窮鼠となり味方多討るべし且薩州に内通し援兵を乞し故去年の耻雪んとて後詰を遣すと風聞す必ず怒を止給へ先某馳せ向ひ軍の瀬踏仕ん公は五州の太守にてかるがるしく御出馬は以て外の事なりと頻に諫言しけれども隆信聞入らず有馬程の小城を蹴散さて置故に去年より叛逆して度々薩州の勢を招き入る旗下の者共が見こりの爲にも成なれば早く馬を出せとて陣觸をぞしたりける直茂も此上は力なく共に有馬に赴きけり角て人数も集れば總軍を三手に分け一方は直茂を大將として山の手には差遣し一方は隆信が二男江上家種三男後藤家信を大將として濱の手に差向一軍は中路大手なれば隆信の旗本にて都合其勢四萬餘騎軍列既に調り須古の城を打出て諫早に到り神代馬を寄せ有馬の城にぞ向ひける此は天正十二年三月廿四日巳の時ばかりの事なるに薩摩勢森嶽に出張したるを小勢なりと見侮り隆信の中軍沖田暁を打過て眞直に打懸る此の森嶽と申は島原の古城にて東は海邊を廻り西は高山難岨なり中路一筋を大手とす此の路左右は深き沼田にて人数を分べきやうもなく只一行に押向ふ此の時薩摩軍は敵を近々と引付て時分はよきぞと下知をなし一度に鐵炮を放しければ一つも浮矢のあらばこそ先に進む者共百七十八人弓手馬手に打倒す是に因て先手の者進兼て見えければ旗本の使番吉田清内駈來り隆信公の仰なり何故先手はひるみける

ぞ急に懸れと申ける勝屋勝一軒は軍監にて先手に有しが是を聞き士卒泥土に遮られて働き心の儘ならず敵の的とのみ成て兵士多く討るれば急に懸るべき地に非ず然共君命なり討死せよとの仰せかと云ければ清内答て尤に候と云捨て歸りけり隆信は先手の遲滯何故ぞ見來るべしと謂けるを清内私の意にて急に先手を進ける是と謂も隆信の運のきはめと聞けり勝一軒は清内が傳る所の令を聞き即先鋒小河武藏守信貫納富能登守家理を押立無理に軍を進しかば隆信三陣に差續き射共打共事ともせず死人を乗越深田を涉り森嶽の麓に攻着けり是より先隆信如何思けん後軍の諸將に使を馳せ陣列の次第を繰替しかば跡は先にと入亂れさはがしくこそ見へにけれ此の時薩摩の三將は思ふ圖は今どとて島津中務太鼓を打せ單兵急に突懸る伊集院右衛門大夫は東の村陰より新納武藏守は西の山隙より共に貝を吹き合濕雲の雨を帶て墓山を出る如くにて左右の伏兵同時に起り隆信の後備を一文字に西よりは東に切抜け東よりは西に突通り日に日あしの旗と十文字の旗入れ違へ打つ打れつ戦しが浮立たる後陣なれば同士くづれに混亂す隆信の旗本に四本鏓と名付しは成松遠江百武志摩圓成寺美濃江里口藤七兵衛三法師と呼けるは高木泰榮馬渡賢齊成富源意此等の者共は隆信の近臣にて處々の軍功九州に其かくれなき者なるが一同拔連て彼に向ひ爰を討萬死に入て奪撃すされ共後陣を斷切られ深田

には遮られ入替る勢も有ざれば究竟の者共盡く戦疲て討死す隆信も自ら長刀を振て戦けるが今は角と思取り馬より下て床机に腰を懸る時に川上左京亮三百計の人數率て隆信を目に掛け聲を揚て撃懸る隆信が前に在ける者共三十餘人又切先を揃て切て出れば川上て敢て近付得ず此時隆信の扈從鴨池新九郎隆信に向て哀哉家君の御運縮り給へり願は某事に龍造寺の御氏を許し給はゞ御一族と名乗て討死仕ん其間に御心閑に御自害あるべし某事父は陸奥守母は龍造寺の餘裔なれば不似合願にても候はずと潔く謂ければ隆信莞爾と打笑手自小刀拔持て新九郎が前髪を切落し汝邊雜人に紛去り時節を待ち我が鬱忿を散ぜよとて彼が言を不肯新九郎畏り是は仰とも覺ず候主の討死あるを見捨てのがれ行道を知らず政家公をはじめ御賢息餘多渡らせ給へば後日に御敵を討れん事は疑有べからず唯とくく某が望む所を許し給れと涙に咽んで申ける隆信も是を感じ汝がいへる所勇あり義ありさらば望に仕せんと氏を許て與けり新九郎悦び拜禮して即ち郎從七八人を召具し川上左京が馬の前に駟出て汝左京無禮なり大將と見ば何下馬して禮せざる爾馬より下ずんば我れ討て下さん角謂は隆信が一族に龍造寺新九郎生年は十六歳手並の程を見て冥途の土産にせよと戦ける向者を二三人切倒し縦横に働しか共大勢の者共鎗ぶすまを作て斯九郎の中に取籠四面より突貫き中には是を差揚しは無慚成ける

形勢なり新九郎が郎從江口竹本釘本以下力戦て一人も不殘討死す既にして川上は隆信の前に近付急ぎ馬より飛て下り御人體は隆信公か介錯に候せん某事は島津が臣川上左京と名乗りける隆信聞て爾大將の首を得る法を知りたるや左京が云く夫勇士として大將の首を得る何の難事か有んと云此時隆信眼を八角に見張り鬚鬚逆に立意氣活然とし躍揚て長刀を一卓す其勢阿修羅王とも謂つべし左京是に辟易して不覺三間許りしざりしかば隆信扈從田中善九郎に目くばせして介錯せよと有ければ善九郎即拜手して介錯し其刀を取なをし喉に立てぞ臥たりける主君を介錯しける心の内押量られてぞ覺ける隆信今歳五十六始肥前の佐嘉より起て戦ふに不勝と云事なく攻るに落さずと云城もなく遂に五箇國太守と成けれ共運命盡ぬれば小敵に戦負命葉秋ならずして一陣の風に散果けるこそ哀なれ左京は隆信の首を拾上げ日本に隱なき武功の大將龍造寺山城守隆信を薩州島津が臣河上左京打取たるぞと高聲に名乗て一同に勝鬨を發げにけり爰に江里口藤七兵衛はいまだ死ずして猶敵の中に有けるが隆信討れぬと聞よりも主の敵を討んとて首一つを提持薩摩方分捕せし者の真似をして此首は龍造寺何某が首なり家久公の實檢に入れん大將は何くにましますぞと群兵を押分々尋問ひ家久の其交一間計に走り寄り持たる首を打掛け一刀にと功けれ共餘り心や早うけん太刀間を見そこなひ家久の

高股に切先計を打込ける二の太刀を振揚んとするを左右の兵取包む家久は馬上より前代希の勇士なり助くべしと下知すれども何かは以て怵べき珠子の如に切碎く成松遠江守同嫡子又兵衛其悴者柄長左馬允成松大膳成松十郎兵衛小宮源右衛門を始として一手の兵數十輩隆信の戦死を聞いて何を待べき軍ぞと死狂に狂廻て薩兵と會戦事既に七度郎従も不殘打死し遠江守父子も手疵數多蒙り勇氣も次第に衰ければ今は是までなりとて丘の上に走上り父子目と目を見合せ腹十文字にかき切てぞ失にける龍造寺家種後藤家信は濱の手に向ひ戦しが隆信已に討死と聞よりも彌進んで切懸る家種が乗たる馬鍬を踏立て足を引ける間畔の上に下り立處を大勢にて取圍む家種鎗ををつ取り二三人突倒し殘奴原を拂打に四五人も左右の深田に打込けり猶も打て驅る敵を一鎗に二人まで突貫き中に指揚しに鎗の柄半より折しかば鎗を打捨て太刀を抜て暫く切合しが太刀も打折り亦差添を以て大勢の中に走り入取て引寄ては指殺し押えては首を搔く目を驚す振舞鬼神とも云つべし家種が臣執行越前諸岡安藝頭は是を諫漸く軍をかへさせ河原鶴田久池井等の勇士に家種家信を守護せよと云捨て執行諸岡兩人は敵の真中にかけて入て一族共に五十餘人枕を雙て討死す茲に家信が士に朝重彈助とて剛強の勇士あり處々の戦功拔群なりしが此時隆信命を殞し諸將も皆討死に極ければ今は期すべき事なしとて爰彼

しこ切て廻り濱手の方に駈出ける處に向より花やかによろうたる武者一騎從士八人ともに勇み進んで走せ來る彈助見て適れ曲者かな我に雌雄を決せよと云より早く狼て懸る敵馬を控へて左右に下知し鐵砲を放させければ彈助が横腹裏表に打洞す彈助少もひるまず近づく敵を切拂ひ騎馬の將に渡り合ひ佩楯の迦れを轟と突て馬より下に引下す敵も心得たりとて引組上を下へと押合けるが終に彈助上になり我は龍造寺の大臣に朝重彈助と云者なり其方は誰なるらんと問ければ下より云やう角の如に組伏られ名乗べきにあらね共汝只中を射抜れて事ともせざる働前代希の勇士かな今の振舞に菓れて我が名を名乗なり得ものに餘り不足は有まじきぞ我は有馬が長臣に久野彈正と云者なり早く首を取持て高名に備へよと潔く云ければ彈助悦び即ち首をかき落し慕ふ敵を追拂ひ走せ歸て家信に是を見せしとかや多久の龍造寺家久は討死せんと進みしを一族龍造寺下總守押し止め自ら是に相代り主從七人戦死す鍋島加賀守直茂は山の手の將として薩軍猿亘越中守と戦しが隆信命を殞と聞きこは口惜き次第かないざらば家久を討取かさなくば討死すべし生て二度古郷へは歸るまじと猶進み行けるを老臣等いさめけるは總軍機氣を失へば此度び家久を討事叶候まじ恐なる軍して犬死し給はんよりはひらに軍をかへさるべし家君爰にて討死し給はば政家誰を頼みて重て御馬をも出さるべきとも

かくにも始終の勝を取こそ良將とは申候へとひつ立てこそ歸けれ直茂涙にくれて此上は力をよばず我佐嘉に歸り政家を進めて日あらず敵を打滅し隆信の孝養に報ぜんものと齒咬をなし従士を圍めて引き退く猿亘が一行來て付て慕ふ直茂が兵鍋島平五郎同大膳綾部左京中野隼人小森源右衛門南里助左衛門木下四郎兵衛犬塚總兵衛水町彌太衛門北島治郎増岡權右衛門等は股肱羽翼の臣なるが小返しする事度々にて必死に成て相戦ふ其中に平五郎茂里は越中守が長男猿亘與次郎を討取り慕ふ敵を討散らす日もはや西の峰に入り誰彼時に成にけり折しも春雨降出て見惠町を過ける比行先暗く道不見敗走の軍兵混亂して敵味方も知難く自他の死生も分難し直茂總二十騎計にて漸く多比良の浦に着き渡の船を求しに海賊の棟梁田澤大隅守來て幸我船爰に在り守護し送んと云ければ直茂の家人共悦て船に乗る直茂は大隅が心を量りかね船の中にて大隅に云けるは我臣中野隼人が娘を以て爾が嫡子源六が妻に定よと婚姻の約をなさしめけり又薩摩の勢本國に返る時海上に待請て討て其功を成ならば彌忠義なるべしと懇に云含む既にして曙に筑後の國小防の浦に著ければ各船より上りけり大隅は夫より肥後の國口の津に船を乗り浮べ薩摩の歸軍を待伺て阿久彌大炊が船と數たび打戦ひ大隅額に疵を蒙る源六側に立雙び大炊が首を討落し其外の捷五十餘級取副て直茂にこそ遣しけれ是よりして

直茂大隅主従の縁を結びしとかや扱亦後藤家信は神代に軍屯して有馬勢の機に乗じ來り侵すを追拂ひ尙亦陣を取布て地を守り敵を待つ其外の軍兵は段々自國に引返す此度の戰に龍造寺の兵卒七百餘人討死せしとぞ聞へける

島津送隆信首於肥前事并葬肥後之高瀬事

島津中務大輔家久は不慮の軍に打勝有馬が運を聞きし上は高來より馳歸んと思ひけれ共手創未だ愈ざれば且島原に延引して漸く八代につきしかば隆信が首を義久の實檢に入れにけり義久喜悅斜ならず四月上旬の比町田氏某事を使者として隆信の首を龍造寺に送り遣しける介榎津に至りて先づ安内を啓しければ政家の家臣大隅安藝守并二葉次郎右衛門尉命を啣て出て向ひ先づ隆信の印しを謁ん事を請ひければ使者其頸を桶より取出し床の上に置けるを安藝守即ち拜禮して鍋島加賀守直茂旨趣を某事に含て此所まで差出し候夫れ武將の戰場に到て命を落す事は古今の習何の恨むべき事か候はん然れ共今度島原一戰の敗績は直茂豫じめ諫言申せしを更に承引し給はず只我儘の御働故親類家臣幕下の將卒迄若干の人戰死を致せし事言語道斷の至り臍を嚙も益なし直茂も此時討死すべき身の今日までながらへ候は政家を守護し大軍を

催して不日に薩州へ亂入御敵をことごとく追討し一つには幽冥の御憤を散じ一つには政家の武名を顯さんとの所存なり今御首龍府に歸り給はん事何の爲にて候ぞと謹んで謂終り又使者に對し今此の首を被送事義久の心底不淺最情ありとをばへ候しかれども受納せん事更に用なしと云捨て二人同く座を起にけり使者も此上はすべきやう有ざれば頸桶を昇せて肥後に歸りしに高瀬川を踰んとする時に頸桶忽ち重き事磐石の如なれば諸人大きに怖畏れて只忙然として居たりけりかゝるをり節に老功の人の有けるが先年島津と龍造寺肥後の國を二つに分て領せしに此高瀬川を以て境とせり我れ思ふに隆信の靈其の封疆を踰じとの示しなるべしと謂ければ此の義さもあるべし然らば私の送葬憚りありとていそぎ此の緯を薩州に申遣しければ義久聞て迺ち奉行を差し越し時宗の僧四阿彌佛をして願行寺にて送葬の儀式を執行ひ其の後塔をたて、佛事など形のごとく營なみしとぞきこへける肥前には龍造寺政家後藤家信鍋島直茂龍造寺信周等の一族會談し政家を出し薩州へ責め入り前日の耻を雪めんとて先づ廻文をまはして筑後肥後筑前肥前の幕下の諸將を麾く或は下知に應じ或は難澁する者も有りこれによつて累年旗下の諸將今以彌不相易政家をそむくまじきよし各神文をあひもとむ筑紫廣門先づ誓詞をさしげ且子新助を質として龍造寺にさしつかはず又肥前の東西筑前筑後肥後三

箇國の諸將無疎意輩は皆な午玉寶印を翻して異心なき旨をあらはしければ政家いよいよ薩摩出軍をもよふしけり島津義久鹿兒島にて是を聞き政家弔ひ合戰の爲め領國の軍兵を率して發向するよし定て大勢にて有らんとて同性兵庫頭義弘中務大輔家久圖書頭忠長伊集院入來院新納本郷猿渡等の旗頭を始として餘多の勢を差越し處々の外城をあひまもらせ防戰の用意怠らず立花道雪は隆信討死の由を聞き涙を押へて我が大友の國家彼の隆信に對して軍を交ふる事年尙し平日軍術を忘れざるは渠れ隣邦に在てすさまをかぞふる故なり今隆信の亡びたりとて我輩武備を怠らば國家滅亡せん事疑ひ有べからずと謂ければ幸に道雪は老功の人なり諺に老猫死する時は舊鼠涙を流すとは良に如斯なるべしと皆々是を感じけり

道雪紹運筑後出張事

天正十二年甲申三月廿四日龍造寺隆信討故肥筑諸士殘無島津手屬申聞ければ今は捨置難とて七月上旬豊州士大將志賀清田木村白木一萬田佐伯奈田始七頭同國日田郡より筑後生葉郡問注所治部大輔領内働出ける筑後問注所刑部少輔統景唯一人大友方堪たる計なり其外心通ずる國士一人無大友勢評議しけるは龍造寺一族黒木伯耆守家永居城上妻郡猫尾城中は當國於ても要

害佗勝殊に家永剛強武士也彼攻落物ならば餘不攻降事眼前なるべし一先黒木を攻べしとして其催聞ければ家永加勢佐嘉允政家倉町近江守久布白又右衛門尉始として其外鳥銃頭相副黒木猫尾城にぞ入にける又馬場清兵衛尉土肥出雲守兩隊高群差籠黒木力を合豊後勢待懸倍豊勢隊をなし列押生葉星野勢移猫尾麓勢まじめ廿餘日攻けれ共黒木一類其外古屋上妻あふれ者共千餘人楯籠身命不惜防戰ける間輒難落豊州勢も退屈てぞ見たりける其比道雪紹運參會云けるは今度筑後發向豊州諸將勢不少然共近年豊筑間於數不足小敵等さへ攻取えず城一落得能大將無故也然べき者共は先年耳川にて討死す今殘所の大將分は大略弓箭に鍛鍊なき若武者或は役にも不立臆病の族なり當年も筑後へ出張せしか共さして仕出たる事もなし吾等當國にして數度の戰に勝利を得大敵を靡かし味方を救ひ領内も堅固に持支ふ去ども豊後家の諸將隣國にて後れを取事を餘所ながら見聞こそうたてけれ兎ても角ても大友家を見放すまじき我々なればいざ筑後へ打越豊州勢と一つに成彼國に於て此年來異儀を立る奴原一々に攻伏て手柄の程を見せ度候道すがら敵領なれば輒く通り難かるべしよし斯思ひ定る上は峰にも山にも切登り志す黒木迄は打通るべし實不叶ば討死と定べし斯る亂世に長生して早晚をか期すべきと有しかば紹運は申に不及兩家の老臣共も尤とぞ同じけるさらばとて同八月十四日道雪

紹運立花岩屋を出て太宰府に著陣す立花には子息左近將監統虎士大將には十時攝津守國士薦野三河守米多比五郎次郎を始め二千餘人殘し置岩屋の留居には屋山中務に八百餘の勢を添て殘し置兩家の軍勢五千餘人八月十八日の夜半に太宰府を立て筑後路を差て押通る紹運案内者なれば先陣と定む黒木道中は無双の難所なれば容易通り難かるべしと諸卒も氣をぞ屈しける寶滿衆評議しけるは今宵は早夜も半過て目も傾ければ河邊にては夜明に可及道すがら敵中十餘里の事なれば夜中に凌通らるべき事如何に存候とて一同に紹運へ申入ければ道雪へ可申達の由なり然ば誰をして可申入と撰ばれ萩尾大學ぞ參りける後陣に出ると早詞を掛何事の用ぞやと云大學畏て右の趣寶滿の者共一同に言上と申入しかば礮と氣色かはりて云れけるは萩尾殿あはれ夜中にてもあれ此道雪などが打て通らんずる所に寄付敵あらば撫切して通るべきものをと高聲に言て駕物を扣立られければ是に驚て諸卒亦打立けり本より紹運先陣にて道雪後陣なれば路次の軍法行儀勇々敷如何なる強敵大敵なり共容易可寄とは見へざりけり案の如く筑後河の邊にて夜は天明々々と明しか共兩將の勢にや懼けん寄懸る敵も無りけり渡りは片の瀬可然とて瀬踏にも不及ひたくと打入りて無難押渡る斯りける處に秋月衆に芥田兵庫と云る侍五十騎計りにて星野より番代してかへりける處に此大勢を見て側に立よけ

是は何んの衆何方へ御通りぞと尋ける處を紹運近習の者にきつと目くばせしければなじかはためらうべきをつとり包一人も不洩討捕て小高き處に首をすへ置軍神に祭れとて関を作てぞ通りける夫より石垣表へ打登り後陣を待揃ける黒木は究て難所なれば由布雪荷を殿にて水繩山をぞ越にける斯りける處に兩將黒木へ發向の由筑紫秋月星野問注所草野が方に隠れ無ししかば敵の者共能時分哉と悦ふて爰や彼この切所に待請て討留べしと水繩山の難所を前に當押詰攻詰鐵砲を打掛しかば流石の紹運が者共もあきれてぞ見へたりける爰に第一の難所なりける九折の細道に大木を小楯に取て鐵砲計指出して打かくる者あり構よければ空矢は一つもなかりけり是にて手負數多打出す一度に押て通らんとすれば細道にて而も兩方谷切たれば不叶如何はせんと案じ煩處に道雪が駕物搔一人鐵砲にて打倒され駕物を礎と拖しかば道雪以外の立腹し憎き奴原哉あれを打取や者共と下知す傍廻りの者つるべ打に放しけれ共僅に顔計を指出し鐵砲を放す間なれば一つも當らざりけり道雪彌いかりををこし紹運の侍共に手垂はなきかあれを打せてんよと云遺す紹運が家人市川平兵衛と云る者下知を蒙て鐵砲を構待かけたり件の木陰より顔を指出し鐵砲を放さんとする處を平兵衛手利早の達者なれば先を越て放したり其矢不錯眉間に當てころび出うつぶしに成て伏ければ兩家の士卒一同にとつと

ほめにける亦跡より敵共大勢來て攻登りしかば既に難儀に及べかりつるを由布雪荷道雪へ使を立て申けるは只今御用に罷立候と云捨て取て返し大勢の中へ割て入道雪紹運大返の太鼓を打立らる斯りける處に道雪家人大橋柱林と申す軍配者進出て惣勢の大返し迄及候はず某に御任候へと云捨て懸しが一張の弓のいさほひと云一曲を謠揚て笠の手よりをしをろしければ敵ども是に辟易して谷底へ捲りをとされ方々へ退散すこれに依て水繩山を事故なく打こへて高群の嶺に至りしかばその日も西の山の端にかたぶきにけり士卒も晝夜をかけて殊に終日の防戦にくたびれつべし今夜は爰に野陣あつて明日黒木へよすべしとてとらげに陣どりてぞ居たりけるかゝりけるところに俄に空曇り大雨車軸をながしける間諸卒雨幕や澁紙などを張けれども中々しのぐにたよりなく難儀なりしありさまなり去ども兩大將はすこしも痛めるてひも不見諸卒をいたはり夫々にことばをつくし下知して廻りける兎角して夜もあけがたになりしかば兩將飛脚をもつて黒木在陣の諸將に只今この地着陣の由を告られける豊州勢の諸將思もよらざることなれば大にをどろきてこは誠しかず立花よりこれまで十五里の敵地を無恙通りきたらん事をもひもらず是はいかさ敵方よりのいつはつての使かとうたがはしくをもひけるところに兩將山をこへて見へければ豊後衆久早にあめを得たるこゝちしてよろこび

いざむ事不斜各々久々にての對面なればあひつものゝがたり晝夜のさかひもなかりけり義統も此よしきひて感悦かぎりなく道雪紹運今度の忠義人間のわざならじとぞ賞せられける

黒木落城事

斯て道雪紹運豊州の諸將とひやうぎして諸方の手わけをさだめ黒木が猫尾の城を十重二十重にとりまさすさまをあらせず仕よせをつけ鐵砲をつるべたて、城中ををびやかしけるほどに城中の女童ども猛勢にをそれたましひを失ひ肝をけし叫喚ける有さま目も當られぬ事ども也黒木伯耆守は其子四郎を隆信方へ人質に出し置たる事なれば捨がたくは思ひけれども眼の傍り一族従者攻殺されんも不便也日數経けれども隆信より後詰の勢も越ざればせん方なくて終に降参を乞て城を開渡しけり豊州衆相談して田北を黒木が城に入置夫より山下の城に取懸けり城主蒲池兵庫頭鎮連は兼て内通も有し事なれば異儀に不及城を開て引渡す宗像掃部をぞ入置ける夫より下筑後へ打て出田尻鎮種其比肥前に在府せしに依て持支ふべき様も無けり諸將僉議して梁河城を可攻有共此城と申は四方悉泥沼にて家晴多勢と云其上近日鍋島直茂

肥前より馳來後藤家信北野出張田尻鑑種貝津に屯し其外内田肥後守入道了佐空閑左衛門大夫家盛犬塚家廣等神代熊代加勢して籠ると沙汰しければ輒落難かるべし如何すべきと詮議まらしく成處高良山良寛僧都元來大友方志有が使して申けるは當山要害能候其上大友殿弘治永祿亂二度迄御在陣有豊筑肥治られし吉例地也是へ御陣移され候へと有しかば此儀可然返答して總軍柳川をば不攻坂東寺勢まとめて居けり道雪紹運偕可止事ならずと所々放火闕揚先道雪弟戸次右衛門大夫に八百餘騎相副城島責させける城中には西牟田新助家親とて究す、どき勇士有其勢三百餘騎政家此城守鎮定置しが此時弟新右衛門家程向て云けるは我年來龍造寺厚恩受所々軍忠精顯云一度不覺不取隆信落命後幕下諸將荒々心齷或島津麾下となり或大友旗下屬時勢云ながら無念云猶餘有我彼不義者不與今幸爾等共此城相守清軍して同討死べしと申しければ家和答云仰にも及候まじ我輩龍造寺恩顧者共剩當城預られ此一戰逢事武門冥利相叶可云死善道相守豊後勢切崩道雪兄弟が首を討取べしと一族家士指麾をなし弓鐵砲打掛鎗長刀揃大勢中割入火花散戦ければ寄手瘡數しらず道雪廻味方敗軍色見右衛門大夫打すなとて精兵遣責城兵再奮戦して且陣休けり蒐處政家援兵西牟田救とて火急寄手打拂城兵一つに成縦横無礙切廻寄手是辟易一同崩行跡慕て追討ければ戸次右衛門大夫鐵砲に中遂討首西牟田に

こそ渡しけれ初道雪は右衛門大夫討死聞しか共さすが勇將の事なればさらにものかず共せず奮ひ進んで下知をなし近邊は不申に酒美榎木津迄一所も不殘焼拂ひけり此度薦野三河守増時は統虎の後見として立花の城に残り又其子彌助成家三河弟勘解由亟は道雪の供しける増時か名代には安部六彌太と云者人数を引つれ筑後に行けり八月十九日中途の一戦に彌助先陣にすゝみ粉骨を勵し手疵を被ける其後所々の攻合に彌助勘解由亟毎度忠戦を致しける又安部六彌太は聞ゆる勇士なりけるが八月廿七日石垣表の一戦に能はたらきて首を取同廿八日西牟田城攻登して能敵を討取けるが此城島の戦に討死をぞしたりける右の趣豊後へ注進有ければ義統より彌助に感状を賜る其文に云

去月十九至黒木表道雪越山之剋於中途遂防戦被疵由に候軍勞忠儀之次第委承届感入候彌可勵馳走事肝要候恐々謹言

九月廿八日

義統判

薦野彌助殿

又安部六彌太が働をば豊府へ委細に注進し安部和泉守に對して道雪より加恩の地を賜りけるとかやかく十月三日に高良山に總陣を打入翌日四日草野が居城に押寄強く攻しかば草野長

門守重永其子親永泳兼て詰の城發心嶽に引籠る寄手頓て城を焼拂ふ夫より星野問注所が領内へ働入所々放火せしめ裸城になしてそこへに押へを置筑後川を打越て秋月領に押入甘木邊迄焼働有けり此時豊後日田より田原親家も秋月領に打て出是は高良山在陣の勢秋月込に焼働せば手合せすべしと義統より下知有しに依て出張しけるが親家いまだ若年にて弓箭不功の故むざと深働して秋月勢に追立られ這々日田へ引入けり是に依て道雪紹運も高良山へ人数を打入ける箇様に方々の合戦數日なりしかば今年も早暮ぬ諸將高良山柳坂北野村邊に陣取て越年す秋より冬に至て大友勢の働近年の珍事なりとぞ申しける

左近將監統虎守立花城事

去程に道雪紹運は筑後高良山の近邊に在陣しければ立花の城には左近將監統虎に薦野三河守増時十時攝津守を後見として殘し置城を守らせける處に秋月種實此時節密に勢を出し立花の城を攻落さんと相謀りて大勢を催して押寄る城中の老若共に騒動す統虎十時に云けるは秋月が軍恐るゝに不足道雪留守なり統虎は若年也城より出て戦事有まじと敵は大きに油断して有べし汝今霄逆寄に夜討して追散せと云けり十時も此事如何有べしと思ければ睨と領掌せざ

りけり統虎腹を立合戦は時の運に依て可勝軍に負可負軍に勝は常の習也運盡なば此城にて防共利有まじ此計ひ是非否と思なば汝城を守れ我行向て追散さんと有ければ十時も意得て三百餘人を引率して其道三里の所を急に進て押寄せれば案の如く敵大きに油断して一戦にも不及散々に敗北してけり其後は敵より城を攻んとする事は無りしか共敵は大勢にて道雪が所領に押入耕作を妨げ放火などしければ時々の小攻合數ヶ度なりしに統虎能下知しければ一度も不覺を取ざりけり

戸次高橋與波多筑紫挑戰事

新玉の年立かへり天正十三乙酉歲正月も過二月にも成しかば陽氣に付て肥筑方々より敵蜂起す龍造寺家晴は梁河を出張して西牟田に陣を取筑紫廣門は肥筑の境馬洗川に砦を構高良山を遠攻にす秋月種實は城井長野千手等と成合て兩筑の境に張出て高良山に對陣す草野星野間注所是等の城々にも秋月より加勢を遣しけるとぞ聞へし高良山の四方悉く敵陣に圍れぬれば豊後勢たゞ籠鳥のをもひをなせりしかれどもいまだてき味方うちあはせてのかつせんはなしもの見小ぜりあひはたゆる間なくぞ見へにけるかくて四月十八日にもなりしかば波多筑紫彼

是八千餘人筑後川をわたつて久留米表へをし出たり道雪紹運申けるは豊州の諸勢は秋月草野等が勢又は西牟田口の敵を押へられよ道雪紹運兩手を以て波多筑紫を追散すべしとて各々手を分て打向ふ紹運が先手伊藤福田小森野と云處にて筑紫が勢と互に鐵砲を始め暫く打合しが敵大軍なれば左右なく進むべからず且く人數を引上んとす敵是を見て勝に乗小森野より高良山の麓迄一里餘の所を波多筑紫息を切て追懸たり紹運は元來敵を平場にをびて出して無二の一戦に勝負を決すべしと兼て思惟したる事なれば伊藤福田を山下まで引取せ敵を手元にたぶくと引受成富左衛門萩尾大學と云大剛の手柄者を真先に進せ自身も鎗をつ取惣懸りにゑいゝ聲を懸て一文字に割立けり波多筑紫が勢逃る勢を追懸たる事なれば備不定浮足になつてひしめく波多筑紫是を見て敵はさまで大勢ならず備をたてよくと下知しけれ共大軍の騷立たる事なれば俄に備もたゞ右往左往に入亂れたり立花勢は北野村に人數を押出し川を渡して十三部野と云處に旗を押立敵の後を遮んと備を立つ波多筑紫前後の敵に圍れ不叶とや思けん西を指て引て行道雪勢横合に驅つて鎗を合せければ逃立たる軍の僻として一人面を向る者もなく大勢鎗下にて討れけり波多勢西久留米まで逃行しが爰にもこらへず筑後川を馳渡る處を立花勢勝に乗て追懸川を越差つめ敵數多討取て近邊の在家に火を掛たり折節風つよく

して餘烟十方に吹散じ干粟の宮に燃付て八幡の社頭も灰燼とこそ成にける道雪紹運兩家の軍功今に始めぬ事なれども殊更鬼神の集りかとぞ申ける斯りける後は取究めての合戦もなく夏に成けれども總陣尙も高良山に在陣す方々の敵共は己が城攻落されぬを幸にして互に日をぞ送ける

道雪家人遠見事

道雪紹運豊州の諸將より遠見のため打出て敵方の者に行合小迫合度々に及び手柄を顯す者多かりき中にも道雪家中の侍戸次治部十時新右衛門と云し者其外五六騎打連て遠見の爲に出たりしに秋月方より出したる斥候の勢と村陰にて礮と行合たり秋月方は百餘人道雪方は纔に五六騎なれば秋月勢競懸て早聲をかけやるまじとて進來る五六人の運命爰に極りぬと見へし處に戸次治部鎮直強弓の達者なれば心安かれ各々只一矢にをどすべしとて畔の上には走り揚りよつ引て放けるが一町餘をつと射越して敵には當らざりけり十時新右衛門是を見て今の矢は敵の上を越たり手先を少さげて射られよと云ければ心得たりと云より早く下の田へ飛をりて二の矢を放つとひとしく眞先に進んだる此矢一筋に恐れて敵共一所に心死々々と打寄色めき

ける處を鎮眞繼て打つがひ放さんとす新右衛門押留治部殿あやまれり御邊の矢種は各々が命なり敵は早しらんだるぞいざと云儘に靜々とこそ退にける敵共も又治部が弓勢に恐れて付ても追ざりければ難なく虎口を遁けり若秋月勢思切者ならば中々危事なるべし又或日の事なるに道雪家中の士打廻りに出けるが餘りの暑さとある池に入て各々水を浴居たり此間もかゝる事有しかば今日も亦水をあびに來るべしとて草野方より藪陰に伏がまりして待居たるを右の者共夢にも不知下帶までとぎ捨て身をひやしける處に伏がまりの兵一度に嚏と喚てぞかゝりける水の中なる者共亦裸なれば周章しも理なり餘り急に押かけしかば十時傳右衛門と云氣早者池よりその儘飛上り下帶だに結ばずして鎗をつ取て向敵に馳合せ暫く打合終に二人迄突伏たり此隙に池邊龍右衛門衫子計にて鎗を合す各々も次第に助來れば傳右衛門も無恙て相引にこそしたりけれ傳右衛門が振廻り古今無双氣早き働とは諸人感じけれども敵もをかしさや引たりけんと大笑にぞ成にける

戸次道雪病死事

斯て立花丹後入道道雪は老體と云多年の軍勞に氣力衰ける故にや月の半より病の床に臥ける

が切に重りしかば紹運を始め豊州の諸將寄合様々醫禱を盡しけれ共定業にてや有けん九月十一日最期近付しかば由布雪荷小野和泉守を近付様々遺言有て行年七十三にして終に空く成にけり家人は云に不及豊州の諸將紹運が郎黨などに至迄盲人の杖を失ひ闇夜に燈の消たる様にぞ覺へける殊更紹運の嘆き大方ならず今生にては行を同じ死ても屍を同苔にとこそ思ひしに先立まいらせては残りし身の行水まで如何に有しと口説けるも理哉肥前には隆信不慮に討れ豊後には道雪病死ありしかば人の心あはたゞしく何となく國郡も騒動す此に依て高良山在陣の豊後勢も不殘黒木を差て引入けりさらば紹運も筑前へ引取べきに究ける道雪家人共も同く歸陣すべきと支度す去共遺言には死骸を必しも立花へ不可遣思ひこめし子細あり高良山の麓に葬るべしと在ければ此處に納むべしと云又一方には遺言は去事なれ共我々爰に有程こそあれ筑前へ歸なば跡は敵地なり雜兵の馬の蹄の通ふところに捨置申さんは無下に口惜かるべし唯立花へ御供可申すと云も有異儀區々にして一決せず由布雪荷申けるは道雪を爰に葬し申さば争か一人此山下にすご々と留可申某腹切て泉下の御供可仕と云出したりければ此も彼も尤の申され様哉誰も死する事は恐れぬ物をとて一坐に在し人々大略殉死とぞ申ける其中に薦野彌助が云けるは各々鎮まられ候へ先立花へ飛脚を遣し統虎をも是へ迎へ進

せ御自害を進め申其後各々も切腹可然と存候其故如何にとなれば是に有合人々は統虎の御爲には在陣右弼の臣也其上道雪死去なれば各々を杖柱とも頼思玉ふべし面々不殘爰にて切腹あらば統虎いまだ若き大將の誰に便りてか遺跡をも踏留給ふべきぞや不日に敵に押詰られ是非なき死をさせ申さんより道雪と御一所にとも角も成せ給ふこそ一向ましなるべし但死を一途に究るは安く生て功をたつるは難かるべし各々より思案して生死を決定あるべしと理を盡して申ければ至極の道理につめられて座中各々閉口す立花の城に在し道雪の繼子立花左近將監統虎は其家臣十時攝津守薦野三河守兩人を使として道雪の遺骸を急ぎ立花に御供申せと云遣されければさらば理に隨ひ仰せに任せんと何れも一同してけり此時立花家人のありさま誠に良將の下に弱兵なしとぞ見へたりける斯て道雪死去の事深秘すといへども悪事千里の習にて早筑紫秋月に漏聞へしかば兩家の者共戰はぬ軍に勝たる心地して各々悦びあへりける

廣門攻取寶滿城事

去年以來道雪紹運筑後表發向の由其隠れ無りしかば寶滿岩屋は開城に成ぬとて敵方の奴原悦あへりしが兩家の運や強りけん此々迄とかくに紛て取掛ず道雪病死の由を聞付能時節なれば

此の時忍を入寶滿を攻取ずんば何の時をか期すべしとて筑紫家人千手六之允と云者に侍足輕三百人相添九月十二日の霄より寶滿へ忍登り上宮に取りかけ見れば鐵齋と云入道一人居たりしを捕へ置十三日の卯の刻に火の手をぞ揚たりける城中の人々は夢にも不知ければこは何事ぞと周章しける處に筑紫方へは今や〳〵と待居たる事なれば島田武藏わくどう山より打出村山近江は柴田の城より馳付其外所々の付城より取懸暫時に大石本堂寺琵琶の頸内山を打破り寶滿へ攻登諸口より込入ける城中本より無人の事なれば防戰すべき様もなく先統増同く母儀を神樂堂へ籠置門を丈夫に堅め伊藤源右衛門花田加右衛門上宮を差て切て登りける處に敵よりも緊く鐵砲を打かければ手を負登んとするも無力防んとするも不叶只神樂堂へつぼみ一處にいかにもならばなれと引入ける敵共競來て神樂堂へ散々に鐵砲を放けれども何れも死を一途に究め無二無三に防ぎける程に寄手も内の様を心にく〳〵思けるにや只味方を不損勝て胃の緒をしめよとて筑紫方よりあつかひを入統増下城在て城を渡され候はゞ岩屋まで無事に送り申さんと云越ける城中の人々も先此急難をさへ遁れ玉はゞ後々亦如何様にも攻かへす行も候べし敵方の扱を幸にして統増を守護し岩屋を指てぞ退にける斯て寶滿には筑紫四郎右衛門を大將にて同名良甫旗崎新右衛門帆足善右衛門など云者ども餘多籠置ける

道雪遺骸并紹運歸城事

かくて紹運は筑後の國に在て道雪遺骸を立花へ送り申すべき道すがら如何あるべきと守護の用意と見へし處に九月十三日の曉に寶滿山へ火の手揚り狼烟天をかすめ燒立しかば鐵砲の音鯨波迄も響渡り聞へける扱は寶滿は敵に乗とられたる事無疑と兩家の周章不斜一刻も早く歸城すべしとて九月十四日の酉の刻に惣陣引拂ひ道雪遺骸をば駕物に移し一族宗徒の士前後を圍て打通る御殿は紹運也是は道にて追かくる敵あらば打散すべきとの爲なるべし斯りける處に横隈の邊にて紹運が家人申けるは岩屋の儀も覺束なく候若敵案にも成候やらん斥候を遣し聞召れて可然候と申ければ最なりとて今村七郎兵衛に申付くる急岩屋に馳着まづ外城戸に忍寄内の模様を聞合せけるに屋山中務堅固にして然も統増公同御母儀共に昨夜御移りの由聞届やがて中途迄馳歸り右の趣申し〳〵かば紹運を始め家中の者まで息をほとどづきのべける中務も紹運歸城の由を聞て大きに悦打迎の爲に追々に勢を出しければ道中も恙なくて紹運は岩屋を差て打入ぬ道雪の遺骸は立花より各々出迎て守護しければ頓て葬禮の儀式結構有て二の丸の西南梅の岳にぞ納めける此砌も中務には岩屋の城を堅固に支へ紹運父子無異儀入城

忠義無比類の由大友より威狀を賜りけり

島津勢再肥後表働事

去程に島津義久は隆信を一戦の下に討取其威遠近に震しかば靡かぬ草木も無ぞ見にける是勢に乗て九州を打從へ大友を征伐し年來の遺恨をも散ずべしとぞ議したりける依是同年八月下旬より島津中務を大將とし新納武藏を副將として一萬五千餘の勢を差向ふ先阿蘇が與黨隆信が殘孽を從へんとて肥後表へ出張す爰に益城郡小熊野の花の山に小城あり先年相良義陽と甲斐宗運對陣の比島津方より此城を構へ御舟を目下に見て其剛氣を制せんとて絹脇刑部を城主として入置たりしに宗運一世の内は何とか思ひけん此の城に手をかけず其儘にして捨置しが宗運死後嫡子相模守親秀堪へかね斯程の小城を目の上の置て何まで氣を屈すべきとて弟の玄番允惟義を遣し花山の城を攻させける城中元より無勢なれば一戦に責付られ城を明てぞ落行ける其後は御舟より人數少々入置けるに今年新納武藏先手として宇土の者を案内とし此邊を打廻り地理物色を見すまして先人數少々引分稻富新介を將として此花山の城をぞ攻させける案の如く御舟よりも人數を出し後詰して散々に攻戦ふ稻富を追散し首級を多得て凱旋せん

とする處に新納兼て謀置ければ五千餘人を引卒し潜に御舟へ押寄鬨を嘩と作かけ餘すな漏すなと揉でぞせめたりける城中の勢は過半花の山へ向ひ猛勢を引受てすべき手段も無りければ力無和を乞剃髮染衣の體と成宗立と改名し人質を出して旗下にぞ降しける舍弟惟義は城へも入えずして花の山より直に矢部の城へぞ落行ける斯りしかば田代堅志田矢部津守木山の城々ぞ一戦にも不及皆々降参したりける阿蘇大宮司は代々豊後縁類にて無二の大友方なれども家人ども如此成行ぬればせん方なく島津と和談しけるとなりさらば此競をぬかすべからずとて惣勢二萬許北地を差て押行しかば合志には竹迫藏人親爲山本には内古賀鎮房共に城を明て落行ぬ隈部が一家山鹿有動も縁を求めて降参す小代下總守大津山河内守は兼て八代へ内通し旗下にこそ屬しけれかく肥後一圓に手に屬しぬれば義久又八代城へ出張し頓て筑豊へも働くべしとて人數を催しけるとなり

筑紫高橋和陸付太閤使節下向事

筑紫上野介廣門は近年龍造寺秋月と無二の挨拶なりしかば兩筑肥の内にて數郡を領しけり殊に秋月種實とは互に力を合大友に敵對する事久し然るに廣門何とか思ひけん俄に引かへて和

睦の儀を起し紹運と一味し豊州方をすべしと云つかはす紹運も廣門も豊後齋藤が婿なれば縁者也亦是屋山中務も筑家には縁類多し紹運も彼是の儀を思慮するに後は兎もあれ角もあれ先一方なり共味方といへば士卒の出入迄も心安き間和談に究むべしとて統増を筑紫が婿にと約束し互に證人を取替し無事にこそ成にければ是よりして家中の者も里下りなど自由にぞ成にける如何なれば廣門今年に至て心を變じけるぞと尋るに廣門と龍造寺は多年無二の間なりけるに隆信討死の後嫡子政家引替て廣門をば疎くし種實と熟懇しけり筑紫是を憤り且政家が行末も心元なく思ければ高橋に同心しけるとぞ聞へける去程に其の比關白豊臣秀吉公天下の武權を執て五畿内四國中國關東までも御手に不入と云事なし然れ共九州の逆徒未だ鈞命に従はず天正十三年の冬佐々内藏助蜂須賀彦右衛門尉御使として豊後國に差下さる其の趣は九州の者共私の争を止め悉く殿下の御家人と成べし然らば本領の儀相違なく仰付らるべし若異儀に及ばゞ急度征伐せらるべし天下悉く殿下の掌握に歸する上は西國の者共も異儀有べからず御旗本に召寄らるべしとなり兩使豊後に着て大友に御教書を渡し國々の領主共にも下しあたへけり去共御下知に順ふべしと云者なし就中島津義久御教書を殊外に嘲弄し秀吉と云は織田上總介が下部猿とやらんが事か其小冠者が分として旗下になし上洛せよとや當時は近衛殿

なんども左様の下知は思も不寄など惡口し御教書をも歸しけり九州二島領主餘人の中に大友義統立花統虎高橋紹運筑紫廣門只四人ぞ秀吉公の御味方に可參由御請申ける其比九國の者共沙汰せしは以前にも尾州半國の主織田上總介程なく將軍になり筑紫の士どもも旗下になさんなど云をこしたりしが頓て下臣明智に討れき今の秀吉は究めて筋なき者なるがいつしか關白になり亦我等を幕下にせんと云事のをかしさよ此遠國を征伐せんなどは能も云出せる事哉惣じて上方は今日は主と成明日は臣と成て手の裏を返すやうにあれば秀吉も信長の様に頓て滅亡すべきなど申あへり又心ある輩はいやゝ亂世には必英雄出來り天下を治る習有此秀吉は其器量寛仁大度の聞あり久しく亂たる世の中なればなどか又治まる時のなからざらん今の秀吉は亂世の英雄なるべしと怖る者も有しとなり

卷之十三 大友宗麟上洛事

明れば天正十四年正月も過二月にも成しに大友同意の人々相談しけるは島津強大に成ぬれば今は秀吉公の御助勢を申請ずしては叶ふまじ屋形父子に一人上洛可然とぞ究ける義統は若年なればとて宗麟上洛有けり長東大藏大輔を奏者として秀吉公對面す土器獻酬の禮畢て宗麟

言上申けるは大友は頼朝公の御時より只今迄連續仕り其上代々九國の管領職を玉はり豊筑前の六箇國を治候薩隅日の三州も當家の旗下たるべき島津義久探題別撥の由を申薩隅二箇國を押取て日州にも手を懸候間當家より制し候へば却て合戦をいどみ候ぬ且又肥前の龍造寺筑紫廣門筑前の秋月等も我意を構隣國の惡黨を催せしに國々の者共彼凶徒に組し方々募合恣に國郡を押領仕り候唯今當家一味の者としては立花左近將監統虎高橋主膳入道紹運此二人は始終の約を變ぜず度々の軍にも勝利を得候筑紫廣門も去冬より子細候て當家と和睦仕り候彼等三人の外は皆島津幕下に成候其故は去春龍造寺隆信を島津が手に討取其勢を以て肥後筑後を打從へ秋月長野等隆信が子政家までも和平致し候へば自餘の小身者共は異儀に不及候當年は當家と無二の合戦仕るべき用意有之由其間候御勢を差下され御征伐候はば御先を可仕の由をぞ申ける秀吉公不斜喜悅まし〱九州の城主大身小身不殘御尋有て一々目錄に記させ國境の事共聞せ玉ふ御味方に參りたらん者には本領無相違下し行べし異儀を申族は一々征伐を加べし去年西國の事共具に聞召届らるべき爲めに兩使差下され候へども西國中の者共一向隨順せず是は島津龍造寺秋月等が違背申に付て自餘の輩も彼等に隨身するにより上意を輕んずる所なり此上は御人數を差下され征伐有べきなり然共遠國の者共別條罪科もなし詫言致し上洛

仕るに於ては能様に相計はれ候へ然らば島津方へも今一往上使を下さるべし亦中國の毛利と大友とは多年鉾楯の事上聞に達しけれども此上は中を直し諸事熟懇有べき也島津返事の趣により人數を差向られば先隣國なれば毛利勢渡海申付べし右の條々立花左近以下御味方の者共に委申聞らるべしとの仰にて其後種々御饗應有て御暇被下けり宗麟豊州へ下著し此旨國々へ披露しけれども殿下の御下知を用る者一人も無りけり紹運統虎對談有て九州數十箇年の間甲冑を枕とし弓箭を業とし軍勞を盡といへども一つとして功を立る事もなし大友殿秀吉公へ拜禮を遂九州御出馬を招たてまつらるゝ上は我々も薩州への先手を望み戦功ぬさんて兩家與立の業可然と存ずるなりとて立花よりは薦野三河守入道賢賀と云者に立花の氏を授け同姓になして上せらる紹運よりは村山志摩守を名代として六月の初に上京せしむ手遠き事の様なれども後に思合すれば間近き謀略とぞ覺へける秋月此事をつたへ聞て紹運は未來を考て大閤の九州出馬を催すの由何の時にてか有んと内々は嘲哂しけるとぞ

秋月種實薩州勢手引事付仙石使者逃歸事

秋月種實家臣の老若を呼出て相談せしは筑紫事も去冬紹運へ一味仕るのみならず剩へ統増を

婿に取と聞ゆ然れば種實が身に於て向後難儀出來しぬと覺たりさらば種實に於ては薩州勢を引寄せ筑紫高橋兩家を亡し當家安穩の謀こそ可然砌也と評議しけるに各一同に最の由申けるさらばとて丙戌卯月下旬に使者を選薩州へこそ遣しける此使鍋島加州へ立寄て右の旨趣申述ければ加州申けるは箇様のことは使者の申様肝要に候其子細は舞や平家なども上手と下手とは同じ言葉語様にて格別此方の心入相違する者也隨分言葉を巧に理を細に被申ば薩州勢の出張は疑あるべからずとぞ申ける流石に被選出たる使者なればなじかは餘儀有べき義久納得し人數を可出とぞ約す是に依て同年六月初の比より薩州勢の人數發向せしむる由肥筑の間ひしめきけり然れば毛利大友和睦しぬれば島津方へも大友と和睦すべき由仙石權兵衛尉を以て仰下されけれども敢て順ず剩仙石が使者能呂傳右衛門を召籠てぞ置ける斯て極月の初に如何思けん切て捨べきに究り何となく行水をせさせ其中に預り人刀を提て湯殿を差てぞ入にける傳右衛門此由を見盟を取る伴の男に投付あをのけに打倒し又起あがらんとする隙に飛て出屏を乗越走出鳥の飛が如く何地共なく逃にけりさしもの寒天に赤裸にて十餘里を逃延しが餘に凍ければ去事有と思出してとある川に飛入しばし水をあび又息を切て走行ける程に其後は渾身あたゝかにして風も身にしまさりけり兎角して豊後の地迄來虎口の害をぞ遁け

る不思議なりし事共なり

島津勢出張事

天正十四年丙戌六月中旬島津兵庫頭義弘は家臣伊集院右衛門大夫を大將として肥後筑後の勢を相催し筑紫上野助が領内に働く其勢二萬餘筑紫を攻落て其競に寶満立花岩屋をも攻取べきとぞ聞へし豊後表には島津中務大輔忠豊を大將として新納武藏守入院祈答院本田肝屬以下の輩に日隅の勢を相添て肥後の國より豊後の境目へ働く其勢三萬餘大友を退治せん爲なり仙石權兵衛并大友義統より殿下へ注進申けるは島津彌御下知に隨はず候其のみならず筑紫高橋立花を退治せんとして近國の勢を相催し候亦當家をも急に可攻共聞候御沙汰延引候はゞ由々敷大事たるべしとぞ告たりける秀吉聞し召さらば急ぎ御征伐可有とて四國の軍勢を催さる毛利大友は多年鉾楯なりしかども今度御下知に依て兩家和睦せしかば九州出陣の用意にて己に吉川元春小早川隆景は長州へ出張し猶も軍勢を相催す黒田勘解由孝高宮本右兵衛入道は秀吉公の御目代として長州赤間ヶ關に著ければ長門周防安藝備後備中石見の勢段々に馳集る扱亦四國の軍勢は長曾我部を始豫州今張の浦にて舟揃して豊後へ渡んとす此比秀吉公より大友立

花高橋に被下たる御書十餘通の内二三通是を寫し侍りぬ

先月廿八日之注進狀今月十日於京都令披見候今度就宗麟上洛帶條目申遣候處其方輝元合體由尤神妙之至候然者島津事同心無之由無是非候此上者可加征伐候就夫長曾我部父子并四國勢爲先手申付候今月廿日出船之筈候其國著岸次第仙石權兵衛等令相談諸事無越度様可被相計候毛利吉川小早川爲中國先手立花高橋等可助成由申含黒田勘解由宮木入道差下候右兩人渡海之後一左右次第輝元中國衆不殘出陣固令下知候其上秀次卒備前播磨丹波美作紀伊淡路之勢下向候右兩人可有下著候條彼是人數待請候程聊爾働無之様專一候逆徒退治不可有程諸事不被任御本意之儀按之内候猶増田右衛門安國寺可申候也

七月十二日

秀吉 朱印

大友左兵衛佐殿

八月十日之書狀加披見候島津九州之逆徒等めしつれ其國境目まで罷出之由たとひ彼惡黨合戰をいどみ申候ともかまひなく堅固の覺悟可有之候四國中國之勢追付可有著岸候條其間聊爾之働無用に候

筑紫領内にも島津勢相働候由立花高橋筑紫等無勢之儀に候間猶以合戰不仕籠城堅固に相

守御勢を可待請由彼等方へも可被申越候其上吉川小早川可令渡海由先日申遣候黒田勘解由宮木入道もはや可有著岸候條其程は敵たとひ取かけ候共合戰可爲無用候上方勢段指越候輝元も可有出馬由申遣候秀長秀次出陣以後には旗本致出馬逆徒等一々可勿首候少も如在に不思議間不屬案利儀不可有程候右之人數著陣候而可及手立候必鹿忽之働不可有之候

一、敵罷出候而及長陣候は、可退屈候不引取様かけとめ可召置候段々人數差越一人も不殘可討果候此趣黒田宮木仙石方へも申遣候各々令相談無越度様尤に候猶安國寺可申者也

八月廿五日

大友左兵衛殿

筑紫廣門沒落事

筑紫廣門も内々薩州勢向由聞へしかども太閤秀吉の御助勢を頼んでさまでの用意も無しし處に六月下旬島津兵庫肥後關山の城迄打出伊集院右衛門大夫野村兵部丞は先立て筑後高良山に

筑紫廣門沒落事

在陣す廣門も頼に掛し毛利勢はいまだ參著せず島津勢急に押寄しかば仰天不斜斯りける處に七月七日島津の先勢二萬五千餘筑後河を馳渡し筑紫領分不殘放火せしめ翌日廣門が居城へ押寄叫喚て攻戰城中の人々も爰を最後と防ける間暫は支てぞ見へたりける去共寄手大軍なれば荒手を入替々々責鼓を打て込入ける間友清左馬大夫小河伊豆入道信覺など一足も不去討死す此等は筑紫家に於ても軍功の棟梁として近國にも隱なき剛強無双の者なれば其名を惜みけるこそ痛しけれ爰に亦勝の尾の南に當て鷹取の城に筑紫左衛門尉を城番として籠置けるを寄手大勢切懸突共不用込入ける間只一時に攻崩されて左衛門尉終に討死す嫡子新介は勇力の者なるが如何はしたりけん薩州家人河上左京と引組指違てぞ死にける此河上は去年有馬にて大將隆信を討たりし兵なるが故ありて主君の勘氣を蒙り流浪して有しに今度先陣に忍出終に討死せしとなり斯て廣門も勝尾の詰の城に追上せられしかばせん方なくも和を乞下城にこそなりにける親族共に悉く蘭部の小松へ引下し其後は筑後三猪郡の内大善寺へ遣し僧坊のちいさきに押籠番等稠しく申付てぞ置にける是を見聞の者共痛はしや昔は廣門今は狹門とぞ笑けり

高橋統増寶滿登城事

筑紫廣門既に没落せしかば寶滿に籠城しける筑紫家人共中々心細さは限りなし殊に急に岩屋表へ押寄ると沙汰しける故大將なき城と云小勢と云旁以て周章たる氣色にて暫も持支んずる體共見へざりけり紹運與力の侍に吉野源内と云者寶滿在城しけるが時分を見すまして紹運へ申入けるは統増を寶滿へ登城させられ候はんや只今能時節と存候と告たりける紹運も彼が云處一旦其理あり乍去先筑紫が家來共の意分をも見るべしとて陳九郎兵衛と云者を使として遣しける所に筑紫が者共申けるは統増は元來廣門の婿なり婿は子と同じ於御登城は何の二心か有べき主君と仰たてまつるべきとぞ返事しける九郎兵衛歸りて其の趣を申けれども彌七郎漸十五歳なれば萬事覺束なし其上筑紫は元來表裡多き家なれば旁如何と思ひ家臣共を呼出し此事紹運分別に不及各々如何可有やと意分を尋ける大事の義なれば誰有て愚意を云者もなかりける處に伊藤外記申けるは乍推參某存候は百貫に買たる鷹も鷲に合せて見と申事の候へば唯御手を被放御覽せらるべうもや候と輕口に申ければ紹運も尤と思ひ統増は寶滿登城とぞ究まりける相從ふ者には北原進士兵衛陳九郎兵衛中島采女北原傳丞其外剛強の

侍二十人に與力の輩相添られ七月十二日の酉の刻に寶滿へ登城させらる紹運推察の如く一端は取持べき様に見へたりしが薩州の大軍押寄せ寶滿へ使を立申けるは廣門既に擒になる上は早々寶滿をも可被相渡若異儀に及ばば即時に攻破るべきの由なり爰にて礮と物色打變り何とぞして統増を討て薩州への忠に備降參せばやとの行とこそ見へたりける此の事早紹運へも告たれば誰をつかはしてか取鎮むべきと有しが如何思はれけん伊藤源右衛門をぞ遣しける源右衛門は先年鎮久逆心の時忠功を成といへどもその後寶滿落去により紹運の前も遠ざかりしかば内々は述懐を存し他國をもすべきと思しかども同名外記諫を加押て留置ける今亦撰出さる事武運の冥加と人々申あへりき此時相順ふ者には高橋山城伊藤外記三原右馬助今村五郎兵衛有馬伊賀小中美濃其外究竟の侍以上十人與力の侍共引具し不移時刻馳登る然ども寶滿には神樂堂の門を堅め稠敷番を付出入を停ぬれば容易可入様無して進退爰に極りける先帆足善右衛門を呼出し統増迎に參候條門を被開候へと申けれ共善右衛門も一人の分別に不及候とて是非を辨兼たる體に見へける間迎の者共目と目を見合せ扱は質人を被捨候哉と云ければ流石の善右衛門も我子を岩屋に置たれば先暫被控候へ内へ相談し可然様に可申とて急走入ける去共事の體延引に及しかば有馬伊賀と云し者勝れて力強かりしが外より門の關貫の邊

をえいやえいやと押けるに關貫中よりおれて颯と押開しかば一度に嘩と打入神樂堂へ參り見ければ筑紫衆歴歴並居たり源右衛門申けるは統増公の御迎に參候條各々氣遣には不及候と方便て源右衛門無二無三に飛て懸り筑紫良甫を取て押へ脇指を抜て胸に差當統増を可取持と申すに依て登せ候へば手の裏翻すが如く今は亦統増を討薩州への忠に備降參すべきとの企は餘り淺猿き所存にて候統増介錯に罷登て候若於異儀は刺殺べしと近隣をにらみ廻しければ山城伊賀五郎兵衛其外も思々に一人宛取て押へ何共もあらば只一刺と見へけるを旗崎新右衛門と云者達てことほりを盡し今度の儀は偏に誤り千萬に候條熟談に申合すべし日本の神々を掛て偽り申さず候其證據には先質人を渡可申と云に依て急難を差ゆるし質共取籠上宮へ登置統増を守護し狼藉を鎮候き偏に源右衛門山城ななどが武功の故とぞ見へにける

十時攝津使節事

薩州の大軍岩屋へも寄る由聞へしかば立花統虎より紹運方へ十時攝津守を以て申けるは岩屋の儀は近年取荒され候其上無勢にて大敵を引請らるべき事難儀に覺候此度は先寶滿へ登城有て天の時至るべき折をも御覽せらるべらもや候覽と理を盡してぞ諫申されける紹運攝津守を

近く召て物語けるは統虎の申され様尤其理有に似たり乍去退て案ずるに義を守り節に當て死するは勇士の本意とする處也時をしり運を計るは智者の賢處に非ず寶滿の事は要害とは乍云地の利は人の和にしかずといへば縦彼城に籠たりとも人の心不調ば久敷謀に非ず義統と紹運は親族なれば見離すべきにあらず年比豊後への忠勤して毎度戦に利有といへども大友微末になり當家も運の極にや逆徒は年々月々に蜂起し味方に組する者は一人もなし時去時來皆始終あり高橋は筑紫の三檢斷職の其一也去共仁木一色は既に絶て年久し今迄名字の残れるも家運にてぞ有けん今又斷絶すべき時來れるにこそあんなれ若運盡ずば當城に有とても大軍を防返すべし遁るまじき時來らば寶滿に籠とも圍を出事不可有とても遁るまじきものならば多年の居城を枕として死なんこそ本意なれ居城を捨て逃たりなどと後代に嘲弄せられんは無下に口惜かるべし此盡爰に有て秀吉公の御助勢を相待べし思ふに四國中國の勢近々に渡海すとはいへども海路を隔たる大軍なれば彼に障り此に滯つて延引すべきなりよし助勢を待付ずして當城没落せば極運と思ふべし寶滿に籠るべくは立花こそ増りたる要害なれば統虎と一所にこそ籠るべけれども安否一大事の軍に大將兩人一處に楯籠らんは謀の不足處なり道雪と紹運値遇淺からざりしかば我は縦切腹すとも統虎さへ無恙ばと思ふなり薩州の大

軍寄たりとも十日支へぬ事はよもあらじ紹運命を限りに戦ふ程ならば寄手も二三千は討捕べし島津勢鬼神と云ども三千の兵を討せたらば重て立花へ寄て手強き働は成がたかるべし其上立花は名城にて殊に多勢なり敵何と攻るとも廿日の中にはよも落じ彼此三十日を過る間に中國の助勢も渡海すべき也然は統虎運を開かるべし此趣を統虎に能々申べしと有し處に屋山中務少輔罷出て申けるは統虎公の御諫言尤に存候此義に於ては是非に御諫に従はせ候べし當城の儀は最前より中務に預置れ候へば御跡に残留り切腹可仕と言す紹運聞て中務儀は深忠の者なれば一人當城に残置争か腹を切すべき其上中務切腹したればとて薩州の大軍退散すべきにも非ず寶滿登城の儀は右に云通りなれば一所にてこそ兎も角もならめとて諫をも用ひず終に攝津守をば返されける攝津立花に歸て此由を言しければ統虎は申に不及上下感じあひにけり是に依て立花より岩屋の城に加勢として吉田右京後藤新五兵衛竹迫五郎兵衛後藤太郎兵衛西山織部甲斐勘解由同新助井手七郎左衛門黒野源三郎森善兵衛黒野出雲日高甚八青木九介原田二郎若杉藤九郎泉原右京本田左馬工藤彌介神志奈彌三郎香椎勘介麻生民部彼此究竟の兵二十餘人を遣ける岩屋落城の日此者共一足も不退皆討死をぞしたりける

薩州勢押寄岩屋城事

天正十四年丙戌七月十二日薩州の諸將評議しけるは岩屋の城を攻落さずんば寶滿の城とてもたやすくはわたすべしとも不覺として同十三日觀世音寺太宰府へをし寄たり與力の大名には秋月種實高橋元種隈部城宇土星野問注所草野城井長野原田等都合其勢五萬餘の大軍にて岩屋の麓二三里が間はひしと陣取り爰にて寄手の大將より莊嚴寺と云僧を使にて岩屋へ申し越けるは今度此表に著陣せしむる事あながら紹運へ對しての弓箭に非ず筑紫廣門表裡を構所領を押領し國家を妨るよし其間候條可追罰ため令出張候處に廣門存の外没落の間遂本意候然ば寶滿は筑紫抱の城なるを紹運子息統増を籠置持支らるゝ事無謂者也早々此方へ渡し可給とぞ云ける紹運答て云やう薩州より此城下迄大軍を被寄事苦勞と申且は憚有べし寶滿岩屋立花三箇城の儀は紹運統虎秀吉公の御代官として預下さるゝの旨御朱印に候其方へ可相渡事信用に不及候若於御望は秀吉公の御朱印を賜て相渡申べしとぞ云返しける薩州の大將皆此旨を聞て逆も此城を弱々とは渡すまじく覺るなり諸將各攻口を請取仕寄竹たばの用意候へとして明れば七月十四日塀柵を構仕寄竹たばを付矢合の鐵炮をぞ始めける

岩屋城中役所配事

斯りしかば岩屋にも方々の責口を可差堅として先虚空藏の臺辰巳の方は福田民部少輔を大將にて同右馬介同新右衛門同兵右衛門長尾左京水城喜助合原因幡河崎右衛門同次郎兵衛鬼木左馬介を始彼是十餘人にて堅めたり南の大手は伊藤總右衛門市允松延勘七郎更原右馬允同次郎三郎同七郎石橋彌介河端勘介中島隼人原口喜介等十餘人にて堅めたり未申の方は屋山中務少輔持口也同羽右衛門陳三九郎今村六兵衛同主計同永澤同喜介同右馬允同彌五郎帆足備後同新三郎荒河隱岐同伊豆國分主計同三介木野大學井上主水長田大藏仲九郎窪山内藏助同久介を先として百餘人にて堅めたり風呂の谷は土岐大隅關内記同勘七兵衛長松加賀同掃部を先として五十餘人にて支たり東松本は伊藤八郎持口にて山下九兵衛同刑部伊勢民部土師兵部同七郎田中安藝同四郎兵衛小島監物澁江仁右衛門大石七兵衛行徳右馬允同次郎三郎岩橋内藏助蘭木左助藤和泉同左馬助同織部田原運澤赤坂運鐵を始として八十人にて秋月役所まで持續たり秋月役所は高橋越前請取にて伊部九華同孫三郎高松次郎四郎土岐了甫高松勘解由同治部同六郎綠藤式部同彌九郎福島主計を先として五十餘人にて堅めたり水の上は村上刑部茂松兵

部同彈介萱島左京淵上兵右衛門樺島善介德淵備前同内藏介以上六十八人にて支たり百貫島より西一方山城戸迄は三原紹心同和泉請取て富元忍富築瀬三河同新介三原宗久染川但馬同傳兵衛伊部市正馬渡良虎轟三介村田三郎市川玄蕃仲三五兵衛同刑部野田右衛門中島治部同與次郎同四郎小川宮内同右衛門麻島孫太郎是等を先として百人計にて堅めたり山城戸は弓削了意同平内持口にて弓削次郎三郎古野右馬助大町備前光行源次郎瀬戸口市允禪田四部三郎幡崎長門同隼人中願寺和泉同孫太郎平山何右衛門山木右馬允を先として七十餘人にて支たり二條には萩尾麟可同大學を始として同彌吉兵衛戸板市允千重隼人同七郎田中主馬允野上左衛門木村右衛門此人は筑紫の家來なるが證人に出て其儘居留る其外究竟の兵三十餘人にて堅めたり本陣甲の丸には紹運高櫓に登居て諸手の下知をして宗徒の兵百五十人にて堅たり此外には立花よりの助勢二十餘騎彼是都合七百六十三騎とぞ記されける

岩屋城攻事

去程に七月十四日より寄手の大勢鯨波を作かけ鐵炮を打懸はやりをの若武者共爰を先途と攻たりけり城中小勢とは申せども大將楠菊池などがよみがへりたる程の良將也其外相隨者共も

異國は不知本朝に類ひ稀なる武功の者銘々の持口にて討死せんと想定し事なれば強戰數度に及しか共一所も破られず十餘日の合戰に寄手も退屈してぞ見へにける斯て同二十六日の早天より寄手又取かけ邑城に攻入散々にこそ攻詰ける城中の人々なりを靜めて音もせず態と邑城を破らせ大勢を引入すまして屋山中務役所より鐵炮石弩其外大石大木石臼などころばかし押懸ける間邑城に入籠りたる寄手數百人をしにうたれて死ける手負は數を不知ぞ見へにける寄手是を見てあなどりにくしと思けん矢の口を止て御城へ物申んと呼びけり良有て紹運櫓の上より麻生外記と名乗て何事やらんと答ふ加様に申者は薩州に於て新納藏人と申者也扱も紹運は此十箇年の籠城に諸人に情を懸られ所々の防戰に覺を取候へ共大友衰微の方へ御一味故に功を立らるゝ事なし然ば一張一弛は武士の習張て不弛は文武も不爲とかや申候間時代に隨ひ降參候へかし然ば島津に於て御取次をば藏人可仕候殊に大友殿は六箇國の管領なりしか共佛神を蔑にし寺社を没倒し天道に背給ゆるに今は豊州一國さへ治兼玉ふと見へたり三略にも智者は不仁者の爲に不死とこそ申候條政道正しき島津へ御同心可然候とぞ申ける外記答へて云けるは扱も是は新納殿共覺へぬ御一言哉紹運へ申聞する迄もなし外記御返答を申べし何も鳴を鎮めて聞たまへ夫盛なるは必衰へ生るは必滅する習めづらしからざる事

ども也先源平より以來今も盛なる侍一人もなし公方を始武衛細川島山一色赤松山名上杉千葉
宇都宮佐々木土岐今川武田土肥椎名神保越前に朝倉出雲に尼子周防に大内肥後の菊池等に至
る迄名を得たる大家悉く破滅致し候大友家は頼朝公より豊前豊後を給はつて罷下りしより以
來名字の懈怠無之殊に此二三代は御紋葉を賜り九ヶ國の探題職たり其故に屬國政令の爲に
日向の伊東入道の加勢せしかども不幸にして諸卒敗軍せしより幕下の國侍等逆意を企候大友
なればこそ今に一兩國も治め候へ島津家の事も内々承知せしめ候に十年以前は根占肝屬本郷
北原が士卒鹿兒島まで亂入し一郡さへ治兼近年こそ卒度世に出られ候今豊州少妻手の砌とて
左様の廣言は黜なき山の粘とやらんにて候今こそ左様にの玉ふともやがて關白殿下九州進發
の間島津の滅亡も幾程有まじく候亦主人の盛なる時用に立者は如何程もある物にて候衰たる
時一屈をなし一命を捨るこそ名字有者の忠義にて候へ旁は薩州零落の時主を捨さまをく
る覺悟專一とこそ承つれ松樹千年の榮も槿花一日の榮と同じければ當陣五萬餘の衆誰か百年
の齡を保候べき武士たるものは仁義の一つをこそ守るべく候左なきは鳥獸とこそ云べけれ
と辯舌明らか伸ければ諸陣是を聞て敵ながらも理を極め言を巧に申したる今日の詞闘哉
と同音にぞ譽にける新納も理の當然なれば重ては言葉も無りけり麻生外記とは名乗つれ共

終には其隱なく流石に紹運は文武の良將と聞へつるが當機の智謀口才迄も達したる大將哉と
ぞ感じける其日の晩景に亦薩州の兩將より莊嚴寺と云僧を以て申越けるは此間入箇國の軍卒
を引受られ數日に及候へども城内物音もなく堅固に被持支事無比類覺候又此方日夜の働き
今日邑城を取崩せし次第双方の手柄不足もなく覺候今は和談と存候寶滿立花三箇城の本持所
領等は相違あるまじく候入箇國の寄衆の覺にて候條實子を一人質人に給はり候はゞ當陣を退
候べし向後豊州薩州の和談を紹運調儀候べし其事成就の時質人を返し進ぜ九州一統にして兩
家心を一にして中國へ切渡り京都へ攻登り天下を掌にし泰平を歌ひ候半とぞ申越にける聞者
皆寸尺の徒移し生れぬ子の襁褓定めとぞ笑ける紹運返答には三箇所の城亦是領知五六郡の事
は本より持分に候質人の事は思ひ不寄殿下の御用に立候はん事覺悟の前に候然れば秋月事
龍造寺隆信に與し大友家日州敗軍の後は豊筑肥の間に横行し表裡計にて諸家を惱し國家を妨
候種實一代に不限九州亂逆の張本にて候條秋月には腹切せ其上に今度の弓箭殿下亦是豊州
へ對しての確執にて更になし廣門が表裡を治めん計と神文を賜り候はゞ如何様にも可申談
にて候さらずば殿下に對し大友の屈に當城を枕とし腹を切候はんとぞ申はる薩州の諸將も力
に不及此上は諸卒いか程損ずるとも此城を攻落さては争か可引さらば急に攻よとて明れば

七月二十七日の寅の刻より寄手の總勢切岸の下に詰寄東明の横雲引渡すとひとしく四方同時に鯨波を作て攻登る城内にも兼て待設たることなれば今日を限と思定命を塵芥に比し義を金石に守て防戦けり昔日元弘建武の合戦は聞傳たる計也近代方々の小ぜりあひ多しといへどもか程の大軍は終になし互に作る鯨波の聲天地をひびかし矢叫の動搖太刀の鏗音千雷地に落六種震動するらんとあやしまれて女童は肝魄を失へり卯の上刻より午の終迄敵味方五萬餘人入易々々攻戦ける程に手負死人野溪に充滿して幾許と云數を不知足の踏處もなかりけり

岩屋落城紹運最期事

去程に寄手目にあまる程の大軍なれば一陣二陣引退ぬれば三陣四陣荒手に易て息をも繼せず死人を踏付手負を乗越攻込ける間城中の兵は荒手に易る勢もなし終日の合戦急なれば互に息も絶氣羸て大半討死しける間福田民部少輔役所を討破られて伊藤總右衛門役所に攻掛たり伊藤も息の有ん限は得こそ透すまじとて三人張に矢束解て押くづろげ矢繼早にぞ射たりける有合人々には成富新五郎辻治右衛門石橋彌介河端勘介中島隼人は等を先として面々に相従ふ者ども前後左右にして半時計は火花を散して鬪しが伊藤總右衛門一足も不引討死す其外の者

も不殘討れにけり屋山中務役所伊藤八郎役所の者共百餘人渡り合只今を限の合戦なれば後の世の物語にせよと聲々に呼はつて得たる所の打物秘術を顯し切先より火焰を出し柄も拳も一つになれと鬪しかども今は早残り少なに討なされ二條をさして引退く風呂の谷百貫島より山城戸まで何くも大海を手にて防ぐ程の事なれば三原紹心役所を一足も不引亂世と覺敷てこしをれ歌を一首塀柱に書村て討死す其歌ことしげればこゝには記さず山城戸の弓削平内は精兵の射手なれば櫓に登り矢種を不惜射たりしが弓手の拳に手を負しかば是迄也と云儘に弓を打捨櫓を飛て下大勢の中へ割て入前後左右を切て廻しが是も終に討れにけり秋月役所の高橋越前伊部九花是等も究竟の射手なれば矢尻を揃て射たるに一矢もあだ矢は無りけり矢種盡ければ大勢の中へ割て入數刻戦しが不殘終に討れにけり城中諸口の兵大半討れければ皆一つに丸もつて一防して見んとて二條を指て引籠る敵方にも透間をあらせず登りける間萩尾麟可同大學父子同彌吉兵衛木村新右衛門など云勇士共今は我等が前なれば冥途の旅のみやげにせんと云儘に面も不振切てかゝる其外諸口より引集りたる人々も是迄也一つ枕に討死して三途の大河を一度に渡んと云程こそあれ四方八面に割立追下し百度合て百度分れしのごを削り鐔を割太刀も刀も鋸の如くに打なして休まんと思ふ時は一度に颯と引て一つに丸もつ

て息を繼亦瞳と喚てかけ出若輩の弓取は是を軍の手本にせよと聲々に呼はり火水になれと切廻りしが暫時の戦に敵味方の手負死人六七百も有らんとぞ見へたりける中にも物の衰れを留めしは屋山中務が嫡子太郎次郎生年十三なるが方々の役所も破れ敵共早亂入と聞てさらば父の先途を見届んと云儘に太刀をつ取て走出づ母は是を見て幼少の體にてこそは如何成事ぞと袖を取て引留ければ帷子の袖を引切て無難敵の中へ切て入敵兵も此者幼少と云容貌人に越骨柄尋常なれば物衰れに思ひて何とぞして生捕にせんとしけれ共其名を得たる屋山が子なれば無下に敵の手にやは渡るべき透間もあらず切て廻りける間不及力討てけり軍散じて後までも其片袖計を母の形見と身を不放して持傳けるも道理也誠に例しすくなき次第とて涙を流さぬ人もなし斯て詰の丸の兵もさしもに深き三方の谷を寄手の死人にて平地に成程闘しが是も大半討れしかば寄手方々より亂入野邊櫓に攻近付討殘されし兵共櫓に取籠て進退自在ならざれば鎗の柄共を切短して此を破られじと防戦ふたり薩州の軍兵も是程迄攻寄たる事なればなじかは少しもためらふべき突共射共不退胃の鉢をかたむけ我先にとぞ攻込ける城中の者共も今を限と思切たる事なれば相手の有を幸に引組々々差違討死す卯の刻より申の終り迄息をも繼せず攻たりしに城中僅に五六十に討なざる時に紹運の玉ひけるは我は高櫓

にて切腹すべし江淵右衛門三浦式部黒岩隼人三人は奥へ參て女房共に忍せよ其外の者共は面の敵に切て掛れ面々は迄の届生々世々朽すまじ主従の契り今を限りと思ふまじ其身は苔に埋るゝ其名は末代に揚るべし忠義の至り勇力の働古今類はあらじなれ共運の極めぞ本意なけれはや敵の近付ぞ急げ者共と有ければ何も涙を押へ一度に瞳と切て出る方々にて手負たる者共も最後に紹運へ目見仕らんと詰の丸へ登るも有亦夫迄もなし先立冥途の道しるべせんとて切て出るも有けり江淵三浦黒岩三人は奥へ參らんとしけれ共敵味方の死體彌が上に打重りしかば家の軒とひとしくなつて參るべき行もなかりけり漸櫓に走上りて見ければ紹運の近習には中島左馬介同大炊介吉野左京築瀨與吉兵衛野口右衛門尉森滿彈正内田出雲同内膳原伊豆入道同越後北原内藏助同外記同治右衛門同八郎同彌六兵衛今村彈正同刑部同眞慶同重右衛門伊藤次介加賀備前同彌四郎田尻上總平井民部少輔横小路市介同勘介久保木工助同助右衛門綾部山城古野大學同八郎花田宮内同彌介上村刑部木村外記岡松酒右衛門佐藤善允八尋源介加藤雅樂介廣田宗祐橋本喜兵衛など云者共弓手馬手に相具せられ思切たる有様は只楠正成の湊川にて六十三騎に討なされ是迄と思切れし體も斯こそ有めと互に良將の心底推量られて漫に泪をぞ流しける斯りける處に寄手百人計眞先かけて野櫓を打越詰の丸の中へ切て入是を見て

傍若無人の奴原にいて物見せんと云儘に有合者共一度に噓と馳合せ一人も不殘と切て懸る大半討れて引て出れば亦二百餘人繼て切て入城の兵紹運の眼前にて只今最後の軍なれば樊噲をも欺孟賁をも擒にすべき其勇力を彰し屍の上の物語にせよやとて切先を揃呼さ叫んで駈廻れば只雷などの落掛るかと思はれて實に面を合する者もなく遙の谷底へ捲り落されけり寄手大勢なりといへども是等が威勇に辟易して半時計は攻入る事を得ざりけりその程に紹運は味方の手負死人を一通巡見有て死たる者にも一には手をかけて謝詞をのべ未息の通者には手づから藥を口に押入禮を厚く誠を盡して通られける古來より和漢の良將多しといへども箇様の例を未聞常々にも如斯の慈愛なる故に此數ヶ年の籠城にも方々にて忠義を抽て危を見て命を抛つ輩如何程と云數を不知今度も數萬の大軍を引受千萬に一つも運を開べき頼はなければども千餘人の侍一人として二心なく最後迄先途に立し事遠くは不知保元の亂より以來彼楠氏の家臣の外には類無き事共也斯て亦敵共大勢攻登しかば紹運も戰死の者共へ報謝の爲なれば各々は其にて見物せよ一軍して見すべきぞとて大長刀を引そばめ大勢に割て入常々鍛鍊の秘術は今こそ盡す處なれとて石突を取述水車に廻し蜘蛛手十字こむてなくてひらくて逆捲波のまくも切向者の眞向逃者のどう腰高股からすね唐竹割など當るを幸に手本に進兵を十七人

までばらりばらりと切伏らる此有様は項羽烏江の勢も是には不過とこそ覺ける今は向ふ敵もなく其身も深手数箇所負ぬれば心靜に腹を切べしとて高檣に登り腹十字に搔切てぞ失られける今年漸三十九歳誠に弱年の昔より明暮弓箭の隙無一日の安樂もなかりしが果して今年の夏如何成極運の末にや有けん岩屋城の苔の下露に消玉ひぬる事こそ最惜けれ大將既に斯なりぬれば各々念佛同音に唱つゝ差違々々算を亂して伏たりけり念佛の高聲なりければ寄手の軍兵我先にと攻登しが紹運の切腹を見て乍敵も弓箭を取て尋常にも腹を切つる物哉可惜大將名譽なる士卒の有様哉と彼を譽此を感じて惜まぬ人を無りける扱奥方の什錯をば三人に命じけれども役所の合戦急なる上死人軒とひとしければ通るに路無して兎角戰ける内に何れも討れて失しかば儂なくも敵の手にぞ囚はれける其外諸侍の妻子共悉山野に伏まるび或は囚と成て消もやらず露の身の置處なき有様夫婦親子の別れと云目も當られぬ有様也寄手も今朝の寅の刻より酉の下りまで終日の合戦に手負死人幾千と云數を不知其夜は勝て甲の緒をしめよとて太宰府に陣を張用心稠しくぞ見へにける翌日にも成りしかば寄手諸卒の實檢有けるに總じて大將たる武士二十七騎討死也其外手負死人五千三百餘とぞ註しける薩州の軍法にて敵味方の爲めとて秋月より茂林和尚と云る禪家の長老を請じ大施餓鬼を執行せり卒都婆の

頌に曰

一將功成冠九州

戰場血入染川流

殺人刀矣活人劍

月白風高岩屋秋

矢叫の聲も諷經の聲も只秋風一時の夢さめて本の野原と成にけりげにも此比の人心なべて道理にうとく節義をしらず朝には味方なりしも夕には敵となり偏に風にたゞよふ捨小舟のよる方なきが如くなりしに紹運は頼少き大友に屬して始終其志を變ぜず節義を守り忠死せられし事古今にためし少なき弓取なり薩摩方の者共紹運の首を取實檢に備へければ兩大將是を見て敵ながらも可惜明將なりとて床机を下て拜禮し岩屋の向なる二日市と云所の山上に懇に葬らせける軀をば後に立花家の者共岩屋の城の本丸に取納けるとかや今に至て紹運の首塚塚兩山に相對し兩墓壘々として春の草のみ青々たりと承る誠に屍は原上の土に埋めども忠義の名は末代に輝けりされば武名に志あらん人此邊を過なば必此墓に詣て、其節忠武名を仰がざらんや

薩州兩將寶滿使者統増下城事

薩州の兩將寶滿へ使を以て申入けるは岩屋既に落城候て紹運切腹の上は寶滿の城早々相渡さるべき也とぞ云遣しける彼寶滿と申は古歌に多く詠ぜし竈門山也筑紫第一の名城にて要害能地なれども筑紫家と寄合持の城なれば心置して和合せず左なきだに眼前に岩屋沒落して紹運程の良將さへ切腹有し事なれば何に付ても防戰ふべきとは見へざりけり是に依て返答如何と兩家の者打寄評議しけるに互に覺束なく思ければとかく言出すもの無りしに伊藤源右衛門申けるは越王二度恥を雪頼朝終に平家を平げ給ひし例も有旁以て天運を待には不如と存候へば先統増公の御命を一日成共延申て浮世の體を窺見るべきにて候と指切て申ければ各此儀尤也と一決して返事申けるは統増若年に候間立花へ登城させ給はゞ和談に可仕無左物ならば當城を枕として腹仕らんとぞ申しける薩州の兩將此趣を聞て統増立花登城の儀相違有間敷の由神文を以て申越に付て下城にこそ極りける爰にて伊藤源右衛門申候は我等儀は存ずる子細候間當城に残留り切腹し紹運への届にも可仕亦は日比支持たる名城に一人も無あけ行たりと嘲弄せられんも口惜候間御供は御免下被候へと申是を聞て北原進士も源右衛門一人には腹を切らせまじ進士も同く切腹可仕とぞ申ける中島采女正進出て申けるは兩人被申分左も社可有候へ共我等は一圓心得ず子細は貴殿など兩人左様に被望候とてさあらば切腹候へと統

増公も亦是に有合人々も許容は難叶所にて候然ば主君への届にては無して妨とこそ存候へ死を究る事は、大儀の前にして安く今此主君年若に御座有て然も運を開かるべしとも不覺箇様の時は死して名を成さんより命を全ふし御先途を見届申こそ死に百倍の忠節たるべく候紹運も岩屋の苔の下にて左こそは御満足たるべしと杵臼が昔を引程嬰が百慮の知を盡して諫ければ兩人も尤聞得候如何様御先途に可立砌も可有とて今度の切腹をば思止れり其の外一人も不殘統増下城の供仕る斯て統増をば約束の如く立花へ送るべしと思し處に案に相違して薩州勢大勢にて打圍み天判山下武藏村を指て引越す是はそも神文はいかにと云しかども薩州の慣にて弓箭に至ては空誓紙も有事なり此方へ御入候へとて立花へは登城せざりけり斯りし處に野道の傍より雉子一つ飛立て横切に行處を統増の近習に候ける今村五郎兵衛と云し者四尺六寸の太刀拔追様に切たりしに思處を不違真中より二つに切てぞ捨たりける薩州警固の武士共目を驚す次第なり箇様のまれ者共數十人屬順しかども目に餘る大敵なれば切拂ふて立花へ登んも不定なり愁なる事仕出て結句統増を失申さんも口惜次第と面々密に語て無是非敵の囚れと成にけり斯て翌日は大勢警固して肥後の國指て引越けるが八月朔日には吉松と云處迄送り番人稠敷守護しけり統増の母公も同く囚れて北の關迄を送りける折節龍造寺政家は

太閤秀吉公九州進發近き由を聞て内通の事どもありけるとかや先薩州手切の働とて大勢を引卒し筑後三池郡へ出張して放火せしむ内々は統虎の方へも可申談など消息有ければ北の關に籠置たる母の宗雲事其表手寄にても候はゞ盜取度存るの由を龍造寺へ通ける依之政治家大将大木兵部少輔堀江覺仙と云し者に大勢を指添北の關へ差越警固の者共散々に追立宗雲を奪取肥前へ向て引取其後立花へこそ送届ける是偏に太閤の御威勢偃草風間の遠きに及故に危き運をぞ保ちける

薩州勢太宰府陣引退事付立花追打事

右て薩州の兩將より寶満岩屋の兩城をば秋月種實へ渡けり爰に立花一城いまだこらへければ即使を馳て急降參せらるべしとぞ申遣しける統虎返事に忝くも關白秀吉公の御朱印を頂戴し紹運切腹候上は我等も立花の切岸に大軍を引請紹運孝養の爲に一合戦仕て其後こそ可申談候へと申ける是に依て薩摩勢立花の城可攻と云沙汰しけれども岩屋にて宗徒の勇士廿七人迄討死し其外多くの人數損じければ容易く責寄る事も叶はざりき是偏に紹運粉骨を盡せしに依て今立花城の助と成にけり斯りける處に秀吉公の御先手豊前柳浦に著陣すと聞へしかば鳥

津義久より太宰府の兩將へ其陣を早々引取候へ上方よりの先手豊前表著陣の由風聞に候間義久も先馬を入候とぞ告げる依て八月二十四日薩州の兩將其外の國士不殘太宰府の陣を引拂ふ然處に立花城より敵は引退ぞ付て見よと云程こそ有けれ立花山を打下り足輕を懸ければ流石の島津勢も後陣以の外に崩されてしどろに成て引處を得たりや賢しと鯨波を作掛散々に追崩し各分捕數多仕たりけり中にも綿貫與三兵衛一番に敵に馳付鎗を入能敵を討取ぬ立花方小勢とはいへども弓箭の道に長じたる者共多ければ馳引を知時の勢を取得て大軍にも不恐遙々と付出てあぶなげなく勝利を得たりけり是偏に道雪が餘勇未失統虎が雄偉不常故ぞと聞へけり

立花統虎討捕星野兄弟事

明れば八月廿五日立花勢又打て出同國糟屋の郡高鳥居の城に押寄て鬨を作る是は島津方より立花の城押へのため筑後の星野中務大輔兄弟を籠置ける此城昔は宗像が持たる城なりしかども開城に成て年久しきを此比俄に取構たれば塀櫓等堅固ならず去ども東北は輒く登難き切所也西は追手南は二の丸にて此二方は地さがり一町計にて竹木所々に生たり統虎は人數をかさ

に押廻し若杉山に旗本を備へ薦野三河同彌介小野和泉を先手の大將として其勢五百餘人十間飛より攻寄る搦手は毛利家よりの加勢の人數二百餘人須惠村の谷道より攻登る城中には星野兄弟を始め寵る所の人數三百餘人鯨波を合せ弓鐵砲を打出し防ぎ戰ふ寄手是を事ともせず塀下迄必至と詰寄たり中にも丹半大夫谷口善右衛門小田部新介沓掛掃部一番に塀下に付けるが丹半大夫沓掛掃部は鐵砲にて胸板を打通され矢處をも不去死にけり宇美善四郎臼杵新七薦野三河が從者安部新助宮下喜太郎も此所にて討れぬ小田部新介は右の眼を射られて引退く安東津之介十時傳右衛門立花次郎兵衛同三大夫池邊龍右衛門十時但馬内田因幡由布五兵衛三河が手の者横大内新五郎安武六郎清水伊右衛門杯續て攻登りしが難なく塀を押破て城中に切てぞ入にける爰に小野理右衛門と云すゞどき者真先に駆入役所に火を掛たり城中の兵是を見て逃すまじとて追かけたり理右衛門唯一人なれば叶ふまじと思けるが敵共急に追掛しかば塀の上より城外へひらりと飛に三丈計の嶮岨にて然もくむせ多き林の中に落けるが何の恙もなく虎口の害を逃れけり去間城中の陣屋に火を掛たり寄ては續て攻入程に星野が勢散々に周章騒げる處を立花勢かして追詰爰に追懸射伏切伏すさまあらず攻入けり大將星野吉實は櫓の上に諸卒の下知して居たる處を立花次郎兵衛駆込一鎗突ければ鎧の上帯を突切けり二の鎗を

突んとせし處に吉實奥へ駈入ける十時傳右衛門續て追懸鎗を以て突倒し終に首を取星野民部少輔を小早川隆景より加勢十七騎の内横山與三として其年十七になりける若者是を討取ける其外城中の者共一人も不殘討取城郭を一炬の烟と燒擧げり十時傳右衛門は吉實が首を取しかども首帳には立花次郎兵衛と註されよと申次郎兵衛は夫こそ思も不寄我は突損じたり正しく討取たる人こそ高名なれと云傳右衛門はいやく獵場と戰場は同例也初手を本とするぞと辭讓しければ統虎聞て兩人の志を殊の外に感心す昔日由利八郎を生捕し相論和田畠山が國衛が首を諍しに易たる事共哉と兩人共に褒美に預りぬ其狀に云

前廿五高鳥居之城取崩候刻最前別而被碎手城主星野中務被討捕殊被鎗疵事乍按中御高名之次第感悅無極候爲其賞蒔田郡之内福光兩兎田鐘隈役職之儀差進之候彌可被抽忠貞事可爲肝心候恐々謹言

八月廿八日

統虎判

立花次郎兵衛尉殿

高鳥居の城既に落ければ直に岩屋の城へ取懸たり此城には秋月より桑野新右衛門と云侍に人數少々相添て籠置ける立花勢の内小野理右衛門と云者白晝に忍入櫓に火を掛たり城中の者共

周章騒ける處を寄手鯨波を作掛て攻入ける間一支も不支して敗北す理右衛門が謀なくば少は隙も入なんに早く火をかけしによつて程なく兩城手に入し事無比類働自他共の名譽哉と感じけり是に仍て關白秀吉公より統虎に感狀を下さるゝ事數多也其内少々爰に註せり

去月廿七日對安國寺黒田勘解由宮木入道書狀并首註文今月十日扱見今度其表島津相働味方之城二三箇所平もろく相果候處其構之儀も無心元思ひ輝元元春隆景其外追々指遣候立花城之儀無別儀相抱候さへ忠節無比類思候處に去廿四日敵引退候刻足輕相付敵多討取儀手柄之上重而高取居東西攻破城主星野中務大輔同民部少輔を始其外不殘數百人討取首註文到來誠以粉骨之段中々不及申候此以後之儀者聊爾之働可爲無用候人數追々差遣其上輝元元春隆景兩三人一左右次第令出馬九州逆徒等悉可勿首候條得其意尤に候然者爲褒美新地一稜可申付候間突鎗高名仕忠節之輩に可令支配候彌成勇候様に可申觸事專要に候委細安國寺黒田宮木三人可申者也

九月十一日

秀吉書判

立花左近殿江

立花左近將監對兩三人註進狀并首註文今日於淀到來披見候高鳥居城江取掛即時責崩城主

立花統虎討捕星野兄弟事

初星野中務少輔同民部少輔其外隨分之者共數輩討捕之段無比類働絶言語候今度味方城二三箇所不慮之處無異議相抱候さへ奇特被思召候處如此之段誠九州之逸物候爲褒美新地一廉可被仰付候條立花家中粉手候者共にも令支配彌可相努之由可申聞候自是以後聊爾之行不可仕之由可相進事專一候也

九月十日

秀吉公御書判

安國寺

黒田勘解由殿

宮木入道殿

廣門大善寺逃出事

廣門も囚と成て大善寺に籠居の體にて有しが薩州の兩將歸陣に付て廣門をも薩州へ引越の由聞へしかば廣門思案しけるは薩摩の奥へ下りなば二度運を開事有まじ然らば廣門が代に至て家を破滅せんも口惜き次第也所詮有無の二にして是より忍落て舊臣等を招集秋月勢五箇山に籠り居候を踏崩し城を奪取て來春太閤の御進發を可相待と思立て竊に計策を廻し人數を集

めける程に七八百人も有と聞へければ相圖を究め薩摩勢の番の者共二三人切殺し周章騒ける其隙に諸鎧を合せて駆通りしが先久留米の城へ使を立御通し可有哉と尋ければ知らぬ顔にて可有と云その隙に筑後川を駆渡し龍造寺領内を通ける程に案内申して爰をも心安駆通り五箇山へ向し時は方々より人數駆集て千餘も有けん廣門彌力を得て直に五箇山へ押寄息をも不繼攻崩し城番の大將坂田藏人板並大炊を始として悉討捕勝鬨を揚無異儀城を取堅固にぞ持支ける

高橋統増被擒入薩州事

筑紫廣門は大善寺より欠落しぬ紹運の室宗雲は肥前勢に奪はれし事なれば彌七郎統増を大事に思けるにや急ぎ薩摩へぞ引具しける途中暫しが程肥後の國高津加の法華寺と云に籠置稠しく番をぞ勤ける是に依て彌本國も手遠成て可落行も盡果無念と云も計なし去共色々計策を廻し何とぞ船にて落すべしと田原河内を商人に仕立解船を誘へ肥後の國松橋と云所に著陣し五六日も逗留し其内に高津加へ云合せ統増夫婦を忍取船に乗せ肥前へ渡海せしめ立花に可越と巧みける遠境の路次危事なれどもせめては角もこそと覺ける高津加には相圖の時刻

にも成ければ表は警固の者堅ければ裏手の壁を破り外の藪を切夫婦を忍出し跡には伊藤源右衛門留居て若も番の者見あやしむ事あらば乳母子の中將を統増と名乗らせ手に懸失て自身は命を限に切拂ひ其間に落延させ給ふ様にと兼て相圖して今や遅しと待けれども物音無ししかば無心元思ひ人を出し見せけるに道にてはたと行合たり夜中の事なれば互に周章して味方とは思ひも不寄すは敵ぞと心得て抜合せ方々に追散し行方不知成にけり箇様に無詮事に時刻を移しはや曉方に成ぬれば其夜の巧み徒に成にけり角て壁の破目藪の切目を番の者見出さん事は必定也如何はせんと按じ煩けるが通も通れぬ露の身を厭ても如何せん案否にかけて寺の納所順芳を頼て見んとて順芳を近付睨々の由を密に語ければ順芳聞て能こそ御申候へ某が命にかけてちんじ可申條心安かるべしと頼母敷申すにぞ一寸延れば尋躍とやらんにて何れも悦思ける案の如く警固の者見咎め不審を成ければ順芳罷出て色々方便申に付て其儘にぞ打過ける然る故にや頓て薩摩へ引入祈荅院と云所に籠置ける思懸なき遠境のすまい物の哀は語るに言葉も無りけり扱亦北原進士伊藤外記事は宗雲の御供して立花へ送届奉りしが其後兩人相談せしめ統増の御供に後れ或は散々に成たる者共を驅催して筑前國那珂郡の内稜野と云所を要害に取拵各籠り居て岩屋より方々に迷ひ出たる我人の妻子又は戦死の者の足弱共を少々

尋集め其後亦岩屋の城へ立還り暫籠り居たりける統増は翌年まで薩州に居たりしが秀吉公九州に下り給ひて後此由を聞召立花統虎に急ぎ統増を呼越べき由命ぜられける統虎承り敵方へ入質に取籠置候へば此方より申つかはしたりともさうなく渡す事有べからず如何なる謀にてか取返し申さんと歎ければ秀吉公聞玉ひ立花三河入道賢賀は老功の者なれば彼をつかはしてこしらへて見よと有ければ則賢賀を指つかはしけるに難なく統増を受取歸二度運を開きけるとぞ聞へける

從秀吉公賜島津御書事

其後秀吉公より薩摩の島津義久へ御書をたまはり合戦をやむべき由被仰下ける其文に曰
依敕詭染筆候仍關東不殘奥州之果迄被任倫命天下靜謐之處九州事于今矛盾之儀不可然
候條郡境目相論互之存分之儀者被聞召届追而可被仰出候先敵味方雙方共可相止弓箭
由被仰出候可被得其意儀可然候自然不被相守此旨候者急度可被加御成敗候間此返
答各爲には一大事之儀候有分別可被言上候也

十月二日

秀吉御判

從秀吉公賜島津御書事

三四九